

悠 遊 第五号



Venezia
S. A.

企業OBペンクラブ

企業O B ペンクラブ 同人誌

▲第五号▼

目 次

特 集・高齢者の主張

◇満八十歳の独り言	野村 嘉彦	36	33
◇高齢化社会を憂う	東前田原与一		
◇迫りくる高齢社会の衝撃	大野 昕		
◇「衣食足りて礼節を知らず」	石川 正達	41	39
◇利尻のウニ丼	岸本 義生		
◇鳴沙山の月	遠藤 俊也		
◇五厘銅貨	浅野 正春		
◇野球は三割、縁談は一割			
—手打ち仲人のすすめ—	黒崎 昭二		
◇中国・開封訪問記	吉壽 清巳		
◇夫婦は「二心一体」	岩崎洋一郎		
◇長岡京偶感(一)	佐伯利治		
◇大和魂を忘れた桜の話	大塚 滋		
◇祝 辞	西島 力		
◇算数の答えの出し方	龜井 弘治		
◇滅びゆく一つの文化			
—寄る年波とは言わない—	鳴澤 宏英	27	24
◇加齢の弁	藤岡 豊	19	16
◇シルバー世代は	岡 政昭	22	14
人生の残りものではない	新井 進	24	14
◇二百兆円のフェティシズム	長谷川正男	22	14
—中国の女文字の世界—	藤岡 豊	24	14
31 30	31 30	31 30	31 30

◇忘れ得ぬ出会い															中川 十郎	74
—デンマークの高校三年生との交流覚え書き—																
◇「ソ連そしてロシア」															都甲 昌利	79
◇情報が共鳴する恐ろしさ															多田 修	82
◇遮断された玉音放送															水谷 汎	84
◇「製造業とりサイクル事業」															織田純一郎	86
◇Eメール仲間															今村 亮	88
◇追慕 出光 佐三																
イラン石油輸入・『日章丸事件』															吉葉 芳彦	91
◇キンシャサの一期一会															松浦 武弘	93
◇村上春樹著「アンダーグラウンド」															櫻井 清治	96
◇愛・恋の俳句拾集															藤井 長治	99
◇アメリカの教育の一面															荘司 忠志	101
◇私の生い立った町															竹内 京一	103
◇デファクト・スタンダードと															許斐 義信	106

◇「ベドリントン・テリア」															西川 永幹	109
◇ヒ モ															村田孝四郎	
◇最近のロシア事情															上沢 準一	
◇アジア随想、再びインドまで															福井 律	
◇会社と知性															森田 茂	
◇薄幸の美人女形																
—十一世片岡仁左衛門															関谷 裕彦	
◇短歌サロンについて															細川 謙三	
◇ベン俳句の一年 その佳句鑑賞															平間真木子	
◇林 篤二さんを偲ぶ															石川 正達	
遺稿「柔軟な頭脳、強い決断」																
◇企業OBベンクラブのあゆみ(年表・年史)																
◇執筆者名簿																
◇事務局から																
◇編集後記																
表紙の絵															新井 進	
カット															吉井米三郎	

理由を探ってみよう。

神はなぜ老人を増やし賜うたか

北田 純一

最近、若者のあいだに『若肉老食』という言葉が一人歩きしている。「老人の数は増える一方で、これを支える若者の負担は天井知らず、その上、若者が老人になるころには年金財政が破綻しており、年金などもえそうもない。これはまさしく若肉老食、世代間搾取ではないか」というわけである。

まるで、老人は穀つぶしの厄介者のように聞こえるが、はたしてそうだろうか。たしかに老人の多い社会は停滞して見える。だが、神様は決して意味のないことはなさらない。きっと、老人には老人にしかできない役割があるに違いない。神はなぜ老人を増やし賜うたのか、その

日本人宇宙飛行士の活躍が華々しく報道された。なにしろ、宇宙空間には重力がない。空氣がない。したがって気圧がない。水はたちまち蒸発し、血液だって体内で瞬時に沸騰してしまう。人体の70%は水分だから人間はたちまち干物になってしまふ。その上、太陽に照らされている面は100度を超える高温、日陰はマイナス100度以下の極低温というから、およそ地球上では考えられない恐ろしい世界である。

こんな厳しい宇宙空間で人間が作業できるのは宇宙服を着ているからである。説明によると、宇宙服は八層構造で二重三重に防護できるよう、費用を惜しまず一着十数億円をかけて造られているそうである。その代わり鎧のようく重く、重力のある地球上で着用すれば歩くことすら容易ではないらしい。

考えてみると、われわれの地球は、この過酷な宇宙空間に浮かんだ惑星の一つである。にもかかわらず、人間が生きていられるのは地球 자체が宇宙服を着ているからである。地球は大気に囲まれ、水が存在する。地球がエンバイアメント、つまり環境という名の宇宙服を着ているからこそ、いろいろな生き物が生命活動を続けられるのである。万一、環境が破壊され、宇宙服に穴が開いてしまったら、空恐ろしいことになるに違いない。

ところが、人間は産業革命以来、経済成長という名のもとに大量生産、大量消費、大量廃棄をくりかえし、地球環境を破壊しつづけてきた。人口は増えづけ、来世紀には一〇〇億を突破する勢いを示している。だが、はたして地球に一〇〇億人の生命活動を支える余力があるかどうかは極めて疑わしい。ましてや、人間が文明と称する贅沢をさらに追いつづけるなら、地球の宇宙服はもはや安全とは言えなくなってしまうだろう。

今は豊かな飽食の時代、健康にはダイエットが一番と言われている。とりわけ成人病患者にはダイエットは不

可欠である。ところが、人間誰しも豊かさと決別したくはない。もっと頑張って贅沢を楽しみたい。だが、それでは命を縮めてしまう。

おなじように、経済成長もどこかで歯止めをかけ、環境保全に努めなければ地球を台無しにしてしまう。だから、個人のみならず国も社会も経済もダイエットに転じなければならない。どこかでダウン・サイジングに踏み切らなくては地球の宇宙服は破れてしまう。伸びざかの若者にダイエットは苦痛に違いない。だが、老人にはそれ程でもない。だったらダイエットは老人が率先して指導すべきである。

世に二〇〇%の法則という法則がある。あるグループの構成員の二〇〇%が変質するとグループ全体が変質してしまうというのである。もともと老人は社会の知恵袋として昔から指導の責務を果たして来た。昔は数が少なかつたが、今や老人は多数派になろうとしている。日本では六十五歳以上の高齢者が二〇二五年に四人に一人の割合となり、総数三〇〇〇万人を超える大集団になる。老人が日本の社会を変えるのは不可避の成り行きである。

ひるがえって考へると、日本の老人はヒマばかりでなく、総じてカネ持ちである。長年働いてきた成果だから働き始めたばかりの若者よりカネがあるのは当然だが、カネとヒマは文化の温床だから、日本の巨大な高齢者集団が文化付くのは目に見えている。

そうだとすると、日本は高齢者に引きずられて一大文化国家に変身するに違いない。荒々しい経済至上主義から優しい文化主義に変身し、ゆったり安心して暮らせる社会になるのなら、少しごらいの経済停滞など恐れるに足りないではないか。

もともと、高齢者が増加すれば自然と社会の活力は低下し、いやでも経済はスロー・ダウンせざるを得ないようになっている。不幸なことのようだが、お陰で地球環境が保全され、人間の生存が安泰になるなら慶賀の至りである。

その神の恩寵を忘れ、老人が指導者の役目を怠つたり、若者に無理な経済成長をゆるして自らの手でせっかくの宇宙服に穴を開けるような真似をさせてしまうなら、いかなる神罰が下されるかは申すまでもないだろう。

ある高齢者の主張

寺井 精英

一般に高齢者といつても、これには二通りのタイプがあると思う。一つは文字通り寄る年波に勝てず活力の減退した人。痴呆とまではいかなくてもおつむの働きが鈍くなつて、頭脳が廃れてきた爺さん。シカゴ大学のニューガーデン博士の表現を借りれば「オールド・オールド（老老人）」。他の一つは年はとっても老いてますます盛んといわれるような人。おつむのみならずあらゆる能力があり余るような活力ある爺さん。こちらは「ヤング・

オールド（若老人）」というのだそうだ。前者が脳廃（すた）れる爺であれば、後者は能力が須（すべか）らく足る爺で、脳廃爺と脳須足爺と書いて共に「ノスタイルジー」と読ませる。老人にはこのように相反する二態があるが、一般に両者に共通していることはノスタイルジーの呼び名のごとく、昔の思い出にひたる傾向が強いことだ。しかし同じ長生きをするなら私たちとしては後者の生きかたを学びたい。

昭和三十八年に総理府が調べたところでは、全国に百歳を越える人は一五二人。それが昭和五十六年には一〇〇〇人の大台を超えて、平成に入つてからは加速されて平成七年には六三七八人、昨年は八四九一人と急増を続けている。この分だと今年は一万人を超えることは確実で、いすれは人口一万人に一人の割で百歳老人（百寿者、英語でセンテナリアン）が生まれることになると思われる。二十年ほど前のこと。高齢化社会が話題になり始めたころ、世界の三大長寿村といわれるエクアドルのビルカバンバやロシアのコーカサス、パミール高原のフンザ王国に調査団が行ったところ、どの地域も戸籍が曖昧で、

百歳という年齢に疑問が持たれ、逆に百歳の年齢維持の難しさが痛感された。ただ長寿を保つ条件として言えることは、いずれも大気温度が二〇度ないし二三度の爽やかさで、山坡多く自然に足腰が鍛えられるチャンスがあり、また水の清浄なことが指摘されるにどまつた。

しかし一方において歴史をひもとけば、何と言つても光っているのは一四八三年から一六三五年までの三世紀にまたがつて一五二年間を生き抜いたトーマス・パーである。

彼の死後、その長寿にあやかろうと作られたのが、彼の名を付したスコット・ウイスキーである。一般の人々の平均寿命が二十歳台の当時においての百五十二歳は奇跡的としか考えられないが、事実これを立証するものとして彼は長寿を保つたという理由のみで貴族に列せられ、死後英國国王の墓所であるウエストミンスター寺院に祭られたことが挙げられる。また史的な事実ではないが、昭和十三年にハリウッドで映画化された英國のベストセラー作家ジエームス・ヒルトンの小説「失はれた地平線（当時の仮名遣いによる）」では、チベットの山中に周りを屏風のような山脈で囲まれたシャングリラという正に

桃源郷を地でいくような村があり、ここは百歳を超えるヤング・オールドの集うまちである。首長はローマンカトリックから破門されたペロー神父がラマ教の僧侶に転向し、二百七十歳という齢（映画の場合）で登場してくれる。これを読んで興味を覚えるのは、百歳を超えて抱き続ける若々しい理想と使命感へのノスタルジーである。前述のオールド・パーのようなスーパーマンは別として、やはり百歳を超えて集団的にヤング・オールドの若々しさを保っていくには、環境ぐるみの対策が必要であろう。そういう観点からも、ヒルトン描くところのシャングリラの村のような存在は、単なるドラマツルギーの所産としてではなく、これから迎える二十一世紀の高齢化社会を創出していくために必要なイマジネーションであり、かつパラダイムであろう。

近代アニメの創始者であるウォルト・ディズニーは、かつてロサンゼルスにディズニーランドを開設して成功した。そして彼は、それによって得られた資金と名声を使って、今から二十五年前に更にグローバルなレジャー・ランドであるディズニーワールドのまちづくりをフロリ

ダに計画したときに示したのが、イマジネーションとエンジニアリングの合成語であるイマジニアリングという用語である。彼はこの考えを手法化して、事業化に先立つてEPCOTセンター（Experimental Prototype Community Of Tomorrowのアクロニム）をつくり、明日のまちづくりの建設に意欲的な姿勢を示した。今日、ディズニー健在なりせば、さぞかし新しいシャングリラづくりに燃えたことであろう。

現在、世界は二十一世紀に向かって進みつつある。しかし、同時に世紀末の関門は新しい千世紀（ミレニアム）に通じる関門でもある。そういうまでもなくこれは千年に一度の、すなわち文字通り千載一遇の機会でもあるのだ。この関門のランドマークを飾るイベントとして登場するのが次の四つのプロジェクトである。

- ・ オリエントエクスプレス（マッハ二五）の就航
- ・ 情報スーパー・ハイウェーの開設
- ・ アーバン・ホモトピー（複雑な都市化）への対策
- ・ シャングリラ計画（高寿化社会）の出現

現在産業界の不景気からの脱出と経済構造改革などの

総合的解決策として、物流拠点の建設が大きい話題にならうとしている。この問題は二十一世紀の初頭を飾るグローバルなまちづくりのプロジェクトとなるだけに、前述の四つのイベントを総合的に結ぶものでなければならぬ。そして当然の結果としてグローバルな国際的な視点から俯観する姿勢が必要である。残念ながらこれに関する詳述は、紙数の関係上他日に譲らざるを得ず、いさか論旨は竜頭蛇尾の尻切れとなってしまった感があるが、企業OBペンクラブ諸兄諸氏の高度なご理解力に甘えて

こちらで筆を擱かせて頂く。

「お見舞いの品ありがとうございます。四月に脳出血で倒れ半身不随となり、痴呆症も併発し、入院してから八カ月程になつたけど、近ごろはリハビリを行つても自分からやろうとしないんです。」

「今熱海温泉病院は完全看護なんでしょう？」

『でも、日中は私が付いてないと、どこへ行くか心配なんです。その上、来年は寅年だから絵の注文が来ているので、描かないことは……。戦後の混乱時から、妻には世話を掛けっぱなしだったし、最後まで面倒を見てやらなければと、覚悟はしているんだが。近ごろは、食事をしなくなり、私が、無理やり食べさせると、すこしは食べててくれるのだけども、どうしようもなく痩せる一方なんです。チューブで栄養剤は補給してるのですが、それも、目を離すとすぐ抜いてしまうのです。でも、ま

年を重ねてくると、夜の電話は友人や知人が死んだという葬儀の通知等が多いので、受話器を取るのが怖いし、億劫になっている。部屋中にシグナルが鳴り響いている。やっと腰を上げ受話器をとると、伊東に住んでいる義兄の声が聞えた。

「死について」

正木 豊

クリスマスイブの午後九時三十分ころ、電話が鳴った。

だ意識はしっかりとしますから。』

看病疲れもあるのだろうか、止めどもなく義兄の話は続く。話することでストレスの解消になるのだろう。ころあいをみて、「義兄さんがバテないよう頑張って下さい」とう言つて受話器を置いた。

八十一歳の画家義兄の話を聞きながら、姉がチューブをはずす行為に、胸を打たれた。まず、頭に浮かんだのは「死ぬ気になっている」七十七歳の姉の意図表示をチューブを抜く行為で表現してゐるのではないか、と思えた。四月に見舞いに行つた時、費用が大変でないかと尋ねた。すると、意外な話を聞かされた。「どうやりくりをうまくやってくれたのか、私と妻の年金は一切手をつけず、貯めといてくれたんです」

『それ以上あつたんです。お義父さんが三年半も寝た切りだったから、金がかかることが分かっていたのでしょう』

父が亡くなったのは昭和四十一年一月十七日に心不全

で、八十一歳の生涯を終えた。当時は寝た切り老人を介護する病院や施設はなかつた。戦災で焼け残つた新宿区落合の父の家に住んでいた姉夫婦の家族が、父の面倒を見ることになった。母はすでに戦災で死亡していたので当然とは言えたが。弟の私は水戸で所帯を持っていたので、父の看病は姉に任せざるをえなかつた。日に日に衰弱してゆく肉体、床ずれや皮膚が破れても、痛みさえも訴えない病人にうろたえながら、姉はかかりつけの医師と相談して、家族ぐるみで物言わぬ父に対応した。当然、絵描きの夫や中学生の長女や長男も看病に動員した。家族全員で寝た切り老人の世話を行う、体制作りにすべてのエネルギーを注がざるをえなかつた。清潔好きな病人の体を、やさしく拭きとり、下の世話まで行つた。空襲で失つた母を見取れなかつた分までと、献身的に接して行つた。時には、二十四時間の緊張感に疲れ果て、だれにもなく、不満を爆発させたこともあつた。

死を迎える半年前ころから、父の表情は何の変化も起きてこなくなつていた。意識があるのかないのか、全くわからない。看護する人の呼び掛けに対しても、かすかに唇

が動き声にならない声がする。時には、生きてるのか、死んでいるのか、分からぬ。

最近、心臓が止まつた時、いや脳の機能が停止した時が人間の死ではないか、と専門家たちの間で論争されている。人間の尊厳が問題になつたが、そのとおりだと思う。しかし、視点をかえて考えてみたい。

看護疲れから異常とも言える姉夫婦たちの父への対応が、ゾンザイに扱うように見えたこともあつた。そんな時、見舞いに上京した私は見るにみかねて、近くの病院を尋ねた。

「医師、父は意識があるんですか。とにかく私たちに反応がなくなっていますね。どうみても死に体ですよね」

「――――」

「家族や周りの者たちに迷惑を掛けながら、生かされている事を父が知つたら、おそらく、死なさせてくれと言うでしょ。医師、お願いです。一刻も早く、楽にさせてやって下さい」私は床に土下座をして頼んでいた。だが、医師は拒否反応として無言のままだった。やがて、昭和四十一年二月に父が亡くなつたわけだが、姉はホーム

ヘルパー制度が導入されると、応募し銀行関係の家庭のお年寄りの介護に長年従事した。

三

最近、福祉や老人医療問題が論議され、やれ介護保険とか医療関係の法律が制定された。結構なことだと言いたい。だが、介護をもつとも欲しがる老人家庭に、福祉の恩恵が届いていない現実に目を向けてもらいたいと願う。病院や医者嫌いの老人世帯は、二、三時間も待つた揚げ句、四、五分の紋切り型の応対で片付け、薬ばかり寄越す医療にうんざりしている。だから、病気になつても医者通いはしたがらない。延命するだけの治療には拒否反応を示す他ないのだ。

更に、本人が死を希望するなら、医師は本人や家族の希望にそつた処置が出来るようにする。本人の意思が反映出来ないことは人権侵害ではないか。死について、本人が望むならそれをかなえる医療が出来る法律があつてもよいのではないか。死を送りする自由が何故認められないのか？医療面からも日本は後進国と言える。

手探りの海外旅行を

アーフドルカーダー・エイコ

このほど、オーストラリア視察八日間の旅を終えて帰ってきた。町の海外視察事業「女性の翼」の一一行十人とともに、である。

直行便ではなくシンガポール経由で行ったので、シンガポール空港での待ち合わせ時間も入れると直行便で行く場合の九時間の二倍近い時間を要した。帰りも然り。つまり、往復の各一晩は機内泊だ。六日間といつても、シドニーに滞在したのは正味三日と半日である。

旅行日程を手渡された途端、行きたくないと思った。事実、こんなせっかちな旅はいまだかつてしたことがない。しかし、どうしても行かざるを得ないのだ。「あなたは十五年半、オーストラリアで暮らしたそうだね。この三日間のうちの一日を、老人ホーム視察やHome visit（オーストラリア人家庭訪問）に使ってくれ」と仰せつ

けられたからだ。

ちょっと待ってくださいよ、また視察ですか。研修ですか。何十万もかけて視察だ、研修だと、ビルの中でクリニックを拝聴するわけですか。どうしてシドニーのあの広い芝生に、でれっと寝そべってみないんです？ ボンダイ・ビーチで、南半球の水に体を浮かせてみないんです？ ふうっと大きく息を吸ってさ。何かが感じられるでしょうに。

旅というのはねえ、リラックスじゃなくて、感じることですよ。フィーリングですよ。そもそも、その国にはその国ならではの風があるんです。眼には見えない独特の風、エッセンス、魂の風が。自然条件、歴史、風俗・習慣などがびっしりとつまつた風。私たちはその風を肌で感じとろうと、だからこそ遥々と旅立つんです…そう私は言いたかった。が、言わなかった。

遊び、無駄な時間、退屈、遠回りの生き方からこそ、たくましい人間、創造性豊かな人間が生まれるという哲学が、この日本では通用しない。そう知ってしまったから。ぎっしりスケジュールを立て、それをこなすこと＝

勉強と思い込んでいた日本人には、そんなことを言っても無駄だと分かっていたからである。

案の定、現地での三日間は実につまらなかつた。いや、私に与えられた一日を除いては…。この日はホテル近くのキングスクロス駅から電車に乗り、四十分ほど先のミランダ駅で下車。そこから七分ぐらい歩いて、Retirement Village（退職者の村）を訪ねた。専用車を使うのではなく、一般庶民の乗る電車やバスを利用して、なるべく足で歩こう、と私は躍起だった。

午後は私たち一家の友人宅二軒を訪問、大歓迎を受けた。しかし、ここでも一悶着があった。訪ねた家で、もつと突っ込んだ話、例えば教育や女性問題などについて話し合いたかったという声がグループの中から出たからだ。つまり、遙か海を越えた外国に行つても、日本の社会のいびつなが、しっかりと根を張っていた。自分の五感を働かせるヒマのない、ただ一方的に与えられるだけの「受け身」の文化?が、である。

更に、免税店や土産屋さんに連れていかれるわ、いかれるわ。買う人も買う人。買うわ買うわ。日本独特のお錢別文化、贈答文化のせいで。

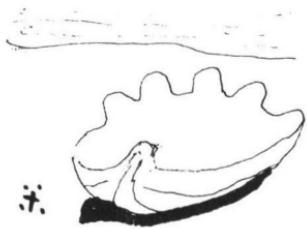
やれやれ、成田を飛び立つて帰り着くまで、結局、日本人の添乗員、日本人の土産屋さんの中で明け暮れる。

テープルセッティングをして待つていてくれたカップル。日本人よ、ヒトは感性ですよ。感性に訴えなくちゃ、感性に。

わざわざ海外へ出かけたというのに。

要是こうだ。添乗員なしの手探りの海外旅行が一般化しない限り、この国の国際化は前進しない。そう確信した旅ではあった。

こう言う私に、人は言うだろう。「私はことばが出来ないからねえ」と。しかしそれは、その人のヤル気につかっているのではなかろうか。旅先で必要不可欠と思える言葉、例文を、その国の公用語に訳して持参すればよい。あるいは国際語ともいえる英語で体当たりしたい。とにかく自分の足でぶらり一人旅、あるいは仲間旅を。風のまにまに…。



酒と女とギャンブルで
身を滅ぼす

長谷川 正男

わたしの亡母（はは）は、昔の小学校すらろくに卒業していないのに、娘時代、寺の奉公人をしていたせいか、いわゆる人生哲学、または世渡り術なるものを、かなり体得していたようで、幼い頃は、そのいくつかを教えてくれた。今になって、やっとそのことが間に合い、一方、現代人の生き方の作法や基本、手本になっていると判断し、ありがたく感謝している。標題もその一つである。

ところで、現代の動きを見聞して、全く表題の通りだなと、さらに思いを深めている。しかも、まさか「あの人」が」と想うと、もう何をか言わんやである。あまつさえ、何が平等だ、平和だ、自由だ、福祉だ、宗教だ、科学だ、人権だ、思いやりだと絶叫せずにはおられなくなる。さらに少し飛躍的だが、ベストセラーとして話題になつた図書の、著者の学歴や経歴には若干のフィクシヨ

ンがあつたと、ある週刊雑誌の記事を読んで唖然とし、明いた口が塞がらないほどになった。記事そのものに多少のフィクションがあつたとしても、それなら「火の気のないところから煙は立たず」を、人は何と解釈すればよいのかと問いたくなる。

その他、最近の、世の中の動きをつぶさに分析、思考してみても、やれ「誘拐」「ハイジャック」「セクハラ」「サリン」「汚職」「脱税」「薬害エイズ」「詐欺」「銃社会」「麻薬」「自殺」「いじめ」「不登校」等々ほとんどが「お酒」「お金」「ギャンブル」「女性」そして「人命」に直接関わる事件、事象であり、それら生々しい実態を、ただ一つのニュースバリューや、または世間の風情と片付けてしまつてよいのだろうかと、自問自答せざるを得なくなり（もちろん明るいことも多く見られたが）、人間の尊厳さ、みにくさ、本性を思う時、誠に不気味で殺氣さえ感じ、ただただ戦き嘆き悲しみを憶えてならないのである。

かといって、そのまま放置することもできず、「これはきっと、どこかが狂つており、何かが失われてしまつたからだ」と独断偏見するものである。そして、あの石川五右衛門が詠んだという「石川や 浜の真砂子は尽きるとも 世に盗人の種は尽きまじ」を現代人はどう判断し解釈するのかなど、突飛もない考え方抱かされる。

さて、今のところ、わが国（日本）は「治安大国」「経済大国」「長寿大国」などと、世界の国々から注目されてはいるが（事実その通り）、国内の日本人そのものを凝視した時、そこに見えてくるものはというと、何のことではない、昔そのままの「貧富の差」「人種の差」「自己中心」以外の何ものでもない姿である。これで本当にわが国は、日本人は平和で幸せで、豊かな生活をして生きていると言えるのだろうかと率直に思うのである。そして、こんな姿形で二十一世紀へ云々と絶叫してみたところで、眞の日本国、日本人だと、世界に誇れる伝統と実績を堅持していくのだろうかと、たいそうな懸念、不安が先立つばかりになるのだ。

さらに、スイッチ一つ、押しボタン一つのやり方では、色々な研究どころか、日本国はもとより、この地球が、宇宙が、いつ爆発し破滅するかも知れぬ時代に突入して

いると言つても過言ではなかろう。まして、こんな小さな人間どもは……と考えると同時に、その小さな人間が、とてつもないことをしでかし、創りだす現実に対し、何が本物で何が偽物なのかを判別するどころか、軽いかるい標題なんか、どこかへ吹き飛んで行つてしまいそうで、すごく悲しく寂しく、残念な気持ちでいっぱいになるのであった。

さてさて心あるみなさん、この美しい日本の風土、なつかしい故郷、温かい人間の魂を素直に見つめ、その思いをさらに強める時、どのような結論、お答えをお出しになられるだろうか。次のことを、いまひとつ組み入れ、話題の余韻としたい（もちろん、これまで述べてきたことへの誤解、曲解を防ぐ意味で）。

戦後から十数年を経過した昭和三十年代に米国、欧州へ出張した時、まず驚いたことは人生の大半を修了したと思われるシルバー族が、よく整理された公園のベンチで読書、あるいはジョギングに汗を、またキャンバスに繪筆を走らせている姿に接したことだった。

当時、日本では、平均年齢が五十歳前後と記憶しているが、『戦後』は終わったとはいえ、そのころ日本のシルバー族が戸外に出る姿は希であった。せいぜい家の中で孫の子守をするのが関の山ではなかつたろうか。しかし、戦後半世紀を経て、日本人の平均年齢は男女ともに世界のトップに躍り出了。間もなく六十五歳以上の人口が全人口の二五%に達し、その比率は更に高まる傾向にあるという。最近の年金議論にも見られるように、会社勤務者の定年年齢は六十歳から六十五歳へ、更に七十歳

われらシルバー族の生き甲斐と提案

新井 進

へと延長される見通しである。

歐米諸国が数世紀を要したの対して、日本は約半世紀で世界一の長寿国に到達したわけだが、急速な高齢化社会はその矛盾点を露呈してきた。

矛盾点についての提案は後述するとして、シルバー族の生き方に言及したい。

(一) シルバー族の生き甲斐

三十数年、あるいは四十数年にわたる会社人間を修了して、もう少し文化的生活を、あるいは知的技能を、または Social work を、そしてこの世に、小さいながらも生きてきたのだという、何らかの足跡を残したい願望は誰しも心の中に持っている。次にいくつか見聞した例を挙げよう。

D君のケース： 定年後、会社勤務の多忙に追われて自分を見失っていたことを反省し、退職と同時に大手新聞社主催の文化サークルに参加した。一年ごとに異なるコースに通う一方、大学の一般市民開放セミナーにも参加、自己啓発の研鑽と共に専門知識を深める日々を送っている。いつ会っても、彼の若々しい向学心に感心させられる。

A君のケース： 定年五年前に脱サラを図り、コンビニ店の経営を開始した。ややまとまった資金が必要だったが、それを何とか工面して、宮仕えから小さいながらも一国一城の経営者となつた。今では三店舗を有して数人のクルー（店員）を雇つている。最初は連日連夜、仕事を追われていたが、最近では時間の余裕もでき、ゴル

フや旅行にも行けるようだ。

B君のケース： 退職と同時にシルバーボランティア協会に登録し、語学力を生かして南米の小学校日本語教師として赴任した。三年を経過したが、地元と日本との文化交流に貢献している。

C君のケース： 会社に勤務していたころから奇術（手品）に興味を持ち、時たま会社の宴会や取引先との商談の余興などにその特技を披露していた。定年後は更にその方面的専門学校に入り、技の向上に努めた。やがて地域の老人クラブで演技を行つて大きい反響があり、各地の老人クラブの慰問巡回を始めるに至つた。

リスの名言を想起させる。

『過ぎし生を楽しむということこそ、二度生きるということなのだ』

シルバー族に加入したら、もう一度、ある行動を起こして青春を再現し、第二の人生をエンジョイしようとする積極的な人生規範を示している。この言葉は、我々シルバー族に深い感銘を与える。

(二) シルバー族からの提案

(a) ヤング層は価値観を変化させよ

若者のシルバーに対する態度は、年々よくなってきているが、まだ心掛けるべき点がある。混雑する電車のシルバーシートに座り込み、見て見ぬ振りをしている若者が相変わらず多い。外人などが微笑を浮かべて、何気なく老婦人に席を譲る光景に出くわしたりすると、大げさかもしれないが、欧米と日本の社会的伝統の時間差、温度差を感じさせる。若者も、いざれはシルバー族に加入していく予備軍であることを自覚してほしい。

(b) シルバー族に適した街づくりを

日本における車の事故死は年間一万件。そのうちシル

バー族の被害数がトップを占めている。自家用車ドライバーの事故指数でもシルバー族の件数が多い。

最近の環境改善打開策の一つとして、欧洲で採用された「ドライブ・アンド・パーク」システムは、歩行者を車から守る意味からも、ぜひ日本でも具体化してほしい。また卑近な例として、手近で費用の掛からないものにベンチがある。シルバー族は街に買い物、レジャーに出掛ける機会が多いので、街角に足の疲れを癒すためのベンチを設置することを提案したい。

(c) 路面電車の再現を

車社会の反省、また環境を守る意味からも、最近路面電車の復活が議論に上ってきた。大都会では地下鉄が縦横に走っていて、一般市民の良き足となっている。しかし、足の不自由な高齢者にとって、階段の上り下りは苦しい。すべての駅にエスカレーターを設置することは不可能に近い。最近、豊橋市内に敷設予定の路面電車計画に対しても国は補助金を出すという。東京など大都市での路面電車拡張は、いろいろとトラブルが伴うので、地方都市からでも実現してほしい。

一市民の願い

岡政昭

今年の年賀状に「安心して住める良い年となりますよう」と書いた。これをうけての初詣でに、「きれいな水と澄んだ空気、そして緑に囲まれた環境の中で、ストレスや脅しのない生活—健康、さらには、ほどほどの収入にも恵まれながら、時間をうまく管理し、自分の選んだ『働き』や『遊び』を通じての絆を大切にするとともに、開かれた形で社会のお役にも立っていきたい」との願いを新たにした。

このささやかな願い実現のため必要な条件とは何だろう。金融・経済の不況に当面した日本にみなぎる閉塞感、加えてアジアに広がる通貨危機と世界に共通する地球環境の問題を考えると、平和の配当を享受している年金受給者という一市民の視点から、有意義に何が主張でき、また実践できるのだろうか。自己向上のための日常生活

面における自助努力や、温暖化対策（アイドリングの防止、ゴミの減量やりサイクリングなど）への参加は当然として……。

1 「群れ」からの自立

日本の協調型集団主義の源泉とされる「和をもつて尊重となす」は西欧的自律型個人主義の洗礼を経た「個」と「全（集合体）」との調和を志向したものと観じよう。民主主義ルールの行使にあたっては他人の権利を自己」と同じように認め、多数決の原理にしたがうとともに、少數意見を尊重しよう。他人任せは、往々にして「個」たる自己の判断放棄や、他人なしし社会に対する責任転嫁につながる「全」への埋没、言い換えて「群れ」—倫理性と自主性なき「従順な羊」の集団—の一員に甘んじ、全体主義を容認する結果となることを戒心しよう。

2 「知らしめ、ともに考えるべし」

透明な行政・経営を求めての情報公開の要請が強い。官民を問わず、中央集権的な組織機構による情報の独占と非開示が現実の認識をゆがめるとともに、行政裁量と政策効果に一般からの不信を招いている。とりわけ財政

と金融、さらに土木公共の部門に著しい。密室のなかで組織は肥大化し機構は階層化して既得権化するようだ。

実際の施策にあたって、「あまりにも遅く、あまりにも小出しに過ぎる」官・本部主導の「寄らしむべし」的「業界縦割り」・「護送船団」方式は、技術革新、情報同時化の今日求められている社会資本の公共財と市場の経済に不都合（ミスマッチ）となつたことが検証されてきた。この旧体質に代わり「小さい政府」を志向して、「官」の分野では住民・消費者寄りの地方分権、民間委譲が、活性化されるべき「民」の法人分野では株主・顧客寄りの収益優先、消費者満足度の充足が、個人分野ではライフスタイルの多様化、自己責任が課題とされるいる。この「民」（現場）主導のためにも、関係当事者間による適切な情報共有とコミュニケーション－問題点と費用対便益基準にもとづくりスクの分析、選択肢の策定、スケジュール作りへの参加ーが望まれよう。

3 「厚生年金」問題へのアプローチ

高齢者に対する医療費補助と年金給付がやがて財政破綻をまねくことが懸念されている。少子高齢化の進展に

ともなう国民負担増、貯蓄率の低下、世代間扶養の不公平などが問題点として取り上げられ、さらには介護を含む医療・福祉のサービス範囲（人的・物的内容）と応益分担、高所得者に対する年金カットないし課税などが後向きに議論される。しかし、裾野を民活に広げれば、規制緩和による介護保険、医療ケア、福祉ビジネスなどが新たに市場参入していくわけであり、公的支援も受益者に対する直接支出以外に、成長するシルバー産業を助成する観点から「呼び水」としての効果的なインセンティブを幅広く考慮すべきであろう。

4 「超低金利」下の金融サービス

バブル崩壊後の異常な超低金利状態が続いている。この国の資産デフレに現行の金融政策がどれだけ有効に機能しているのか。金融システムの安定は至上命題としても、銀行の貸し渋りは解消せず、景気回復に果たした役割が問われている。厚生年金基金の運用利回り低下はまさに影の部分だ。公的資金の導入論議に先立ち、低金利下の国民計算上、不良債権に悩む銀行部門に家計部門から利息收入の所得移転があった半面、銀行部門からは貸

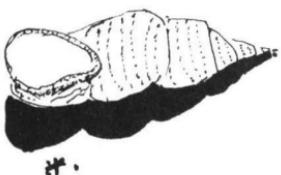
付債権の償却にともなう損金計上で法人税による公的部門への所得移転は相当減額されたことが明らかにされている。

一方、筆者の知るかぎり、年金受給の個人取引先に対する銀行のサービスは「限度百万円まで預金金利一%アッパー」などにとどまっており、熟年退職者の希望する資産の流動化（ストックからフローへ）にこたえる金融商品の品揃えはいまだしの感が深い。たとえば住宅資産にしても、関連のアセット・パックト証券の銀行仲介、一般投資家への販売など、貸付債権の信託やリバースモーゲージの手法なども取り込んで税制優遇や担保・再割適格性を付与した流通市場のさらなる育成が検討されても良いのではないか。ビッグバンを控えて期待される事業者としての金融機関と当局の対応は高齢化社会のニーズを前に向きに捉えたものであって欲しい。

5 「思いやり」の心

「自分にして欲しくないことは相手にもしない」とは古今、東西を問わず社会共通の礼儀作法（マナー）であろう。今ごろの若い人とは言いたくないが、一緒にバス

旅行をしてみて、「ありがとう」を素直に口にできた「隣家の好青年」もいれば、携帯電話に没頭して周りを困らせた「心なき道連れ」もいた。家庭での躊躇が学校での教育か、いずれにせよ「個性豊かで創造力に富む」べき次の世代が、高齢者を含め他人を尊重しない文化的土壤に育つわけがない。スペシャリストたるとゼネラリストたるとを問わず、知・情・意にすぐれた「個」の存在は、関心分野における先輩の歩み（伝統－歴史）を継いで、同時代人との競争と共生（職業－社会）から孤立しえないし、市民として物心にわたる生活基盤（公徳心を含めて文物の制度的なもの）に支えられてはじめて可能と思われるからである。



片

「好老社会」を目指そう

中川路 明

「老人は 死んで下さい 国のため」／ある川柳誌の最優秀特選作である。これを見て八十七歳の老夫人は絶句し、やつと「寿命のある間は死ねません。それに、私たちも生まれたときからずっと老人だったわけではありません。若いときもありました」とつぶやいた。

一九九九年に予定される年金改正について、厚生省が

昨年末に年金財政の維持のための五つの選択肢を示した。年金の給付を減らすか、保険料の負担を上げるか、情報を公開するから国民的討議をしなさいと言う。現状の保険料の未収、給付の不均衡、さらに広い視点での医療、社会福祉などの社会保障制度との重複と無駄などの問題についての展望は示していない。水槽に入れる水と底から抜き出す水の算術的なバランスを示したに過ぎない。

これでは、いたずらに年金財政の不安を煽るばかりで

ある。年金相談でも、以前は高齢の受給世代の人が多く来たが、近ごろは若い人も来るようになった。年金は丈夫と書いては記事が売れないから、狼少年の好きなマスコミも、的確でない数字のみを走らせる。老人は高額の年金を受けており、自分たちはその分を世代間扶養とかで高い保険料として払わせられると聞いて冒頭の川柳が生まれたのであろう。たしかにわが国の高齢化、少子化は他の先進国に比べて早く進んだ。しかし、突然長寿命になったり、子供が生まれなくなつたわけではない。将来を考えなければならない政治家、官僚が見て見ない振りをしてきた付けがまわつてきただけである。

年金については、支給開始年齢、現役世代の可処分所得に対する受給額の割合、保険料の徴収法などを適正にすると財政のバランスはかなり良くなる。それでも、これから五十年間の均衡を考えると給付と負担の改正は避けられない。いまの年金受給世代は、まだ貧しい戦後の生活のなか、年金のない両親の老後を自分の所得で見守つたきた。団塊の世代といわれる戦後の昭和世代は、両親は年金で守られ、住居も親譲り、生涯の給付と負担の收

支も次の平成世代よりははるかに良い。これらの三つの世代の公平化を考えると、年金保険料を段階的に上げるより思い切って引き上げ、後の世代の負担を楽にするのが望ましいのではないか。

平成世代の人たちも払った厚生年金保険料の額だけの給付が受けられないとマスコミは書き立てるが、保険料の半分は事業主が負担しており、厚生年金は自営業者の国民年金より手厚い年金である。このような説明が充分されていない。

公的介護保険が年末に成立した。ドイツで二十年かけて検討したものを見たものではなく厚生行政は押し切つた。在宅介護も、施設介護も整備されずに運営主体とされた全国三千三百の市町村は対応に戸惑っている。高福祉のステーデンでは財源をすべて地方税で賄い、実施面では福祉、保育、環境は市で、医療は県でと役割分担をしている。それに至るまで、地方分権により市町村の福祉実施能力を高めるために、二十四年かけて一千五百の市町村を二百八十六の市に合併し行政能力を向上させた。急がば回れである。

奇跡と言われた高度成長の泡の破裂の後に、医療、年金、介護と取り残された問題が明らかになった。自らの失政を顧みることなく、「老人が増えて大変だ。大変だ」と年金、介護保険についてその場限りの施策を出す。若い人たちに、老後の生活に社会援助を必要としている人がいなくなれば生活が楽になると思わせてしまった。高齢化自体が問題なのではなく、そうした変化に適応しない制度の改革の遅れが問題なのである。

一九九三年わが国の六十五歳以上の高齢者は一六九〇万人であり、うち介護を要する人は百九十万人で、残りの八八%の人は健康で働いているか老後を楽しんでいる。大部分が元気で介護を必要としていない高齢者はこれからますます増加する。その人たちが将来の生活が見えずに戸惑っているのになんらの政策も出てこない。高齢者の能力が活き、社会的弱者に役立つ職場がたくさん手つかずにおかれている。しかし、現在の縦割り行政では繩張り意識、重複の効率の悪さで実現しない。厚生、労働はもちろん自治、通産、文部、運輸など関連を一体化した老人省の設置が要望されてきた。

橋本首相が「命をかけた」行政改革も、保身とご都合主義のお粗末な結末になった。単に二十一省庁の組織表を得意の算術で十二の省庁に切り貼りした行革会議の報告書に唖然とさせられる。二十一世紀を迎えて、産業を育成し経済発展を目指した行政から、消費者の側に立つた行政に変革するという理念は全くなかつたようである。労働福祉省の名前を見ても供給者側の意識しかない。これでは公共事業の無駄を廃して、社会保障、教育などを充実させる政策など作れるわけがない。

高齢化、少子化による社会人口構成の変化とともに、高齢者といえども健康な人は年金を貰いながら社会貢献しなければならない時代がくる。体力を必要としないソフトな仕事の分野はすでに広がり始めている。身の回りに視点を定め、若い人の及ばない活躍をしている人が大勢いる。世の中には高齢者を尊敬している人もいれば、嫌っている人もいるだろう。しかし高齢者的好まれる社会は、高齢者的好む社会であるはずだ。我々高齢者は、老後などと言つてはいるときではない。積極的に「好老社会」を目指して主張しようではないか。

天 命

藤 岡 豊

一九九七年は銀行、証券の大型金融破たんが相次ぐ大変な年であった。会社更生法のもとで息を永らえる企業はまだしも、自主廃業となつた山一証券では、一万人にのぼる社員の処遇に頭を悩ませている。社長が涙ながらに訴えたとおり、一般社員には何の罪もないのだから。この山一の社員の採用をめぐって各企業が名乗りをあげ、その総数は退社させられる社員の数を大きく上回っているそうである。ところがその大部分が三十歳、もしくは三十五歳以下という条件がついているとのことである。景気の停滞を背景としてリストラを進めている各企業にとっては、中高年者は要らない、採用するなら若手社員、というのは当然のことかもしれない。

しかし、これを聞いて私は、もう三十年近くも昔のことだが、ニューヨーク駐在時代のある日の記憶がよみが

えった。

私の借りていたフラットは、ニュージャージー州のフォートリーにあった。近くの停留所からバスに乗り、ハドソン河を渡ってからマンハッタンの地下鉄に乗り換えて会社へ行く。このバス停でよく顔を合わせる一人のアメリカ人がいて、時たま話す機会があった。彼の年齢は五十年前後、子供は男の子が大学に、女の子はハイスクールに行っているとのことだった。マンハッタンのある運送会社に勤めており、私どもの会社と関係はなかったが、当時業績が芳しくないと噂が流れており、心なしか彼の顔色も今一つ冴えなかつた。そしてついにこの会社はリストラを決行することを決め、かなりの社員をレイオフすることとした。他人事ながら彼の身を案じていたところ、たまたまバスで隣り合わせに座り、会話をする機会があつた。おそるおそる巷の噂を口にしたところ、人減らしをするのは事実だが、自分の身分は保障されている、と涼しい顔をしている。さらに聞いてみると、解雇されるのは年の若い社員たちだという。従業員の数を減らすに当たって、中高年者を残して若い人からレイオフ

していくというのは、私には全く理解に苦しむことであった。恥ずかしいことながら、私はそれまでアメリカに「シニオリティ」という制度があることを知らなかつたのである。

アメリカの企業は、そのほとんどがこの制度を設けている。これは会社内の地位や給料に関係なく、勤続年数だけをベースとした序列制度である。これによれば、会社の業績が落ちこんで合理化をはかる必要が生じた場合、勤続年数の少ない若い人から順に解雇することになつてゐる。会社側から見た場合、知識・経験の豊富な社員を有効に利用した方が生産性を保てるとの判断があるようだが、同時に永年会社の業績に貢献してきたこと、そして今は扶養家族を抱えた生活の問題があることを考慮したものに他ならない。

私ども日本人の見方からすれば、会社側としては元気のよい若い人を残した方が、長期的観点からも有利だと考へがちだが、そうではないらしい。アメリカでは、從来日本にあつたような年功序列制度を、もともと取つていなきことがその裏にあるのかもしれない。そういうえば

日本でも、トヨタ自動車系の特殊鋼の大手である愛知製

鋼では高齢者の活用策として、現行の五十五歳役職定年制度を今年の一月一日付で廃止することとした。この制度は部長以下の管理職は五十五歳でラインの役職を外れて名誉職的なもの、いわば窓ぎわ族となるというものであった。今回これを廃止して、普通のスタッフと同じように戦職を与え、役職手当も半額を支給するというものである。要するに六十歳の定年までフルに働いてもらうことにより、生産性を維持し、あわせて高齢者の活性化を図ろうとする考え方である。

しかし高齢者に対する期待は、単に知識・経験に限られたことではなく、その理解力と判断力にある。名医といわれている東京慈恵医大の牛島教授はこう言っている。「言葉の意味をちゃんと理解する能力は、年齢とともにどんどん高くなっています。たとえば二十五歳を一〇〇〇とすると、年齢が増えるにしたがって高くなり、一番高くなるのは六十歳。それから多少下がりますが、八十一歳で初めて二十五歳の段階にもどります。その分だけ理解力とか、真理の深みをつかみ取る力は、年をとれ

ばとるほど高くなるのです」

このように見えてくると、単に暦の上での年齢だけで判断するのは間違いであることが判る。若くても老いる人がいる半面、老いても若い人がいる。要是実力の年齢が若いかどうかに尽きるようである。

ところが今の世の中、すべてを暦の年齢で取りしきつてある。これが最大の悪というべきであろう。定年退職、介護保険、老齢年金等々、どれをとっても年齢ですべてを律しているところに問題があり、またこれが悪循環を生む元凶となっている。つまり年齢でもって老いを押しつけ、その結果本人も老いたイメージを自分に当てはめてしまうのである。たとえば組織から離れる途端に地盤がなくなり、急速に老化してしまう。今まで自分を支えてきた目標がなくなり、新たなビジョンを創りだす原動力もなくなってしまう。あげくの果ては「余生」などという言葉のまやかしに身をゆだね、孤独な濡れ落葉となるのが落ちなのである。世の中が年齢だけで高齢者と名付け、高齢者扱いをするところに問題があるのでなかろうか。

病院には小児科があるのだから、老人科があつてもよいのでは、という意見があるそうだが、とんでもない話である。六十五歳を超えたたら誰でも彼でも老人科へ行けというのだろうが、定年になれば誰でも退職という考え方と全く変わりがない。

そうは言つても体がいうことをきかない、生理的な老化現象は避けられないと言うかもしれない。しかし必ずしもそうではない。というのは、衰えというのは本人が自覚するところから始まるからである。そして肉体の衰えを知覚する年代が遅くなつてきているのが現実である。論語の為政編に、

「五十にして天命を知る」

とある。しかし人生五十年とされていた孔子の時代ならいざ知らず、現代では四十歳、五十歳でますます感い、天命を知るのは七十歳なのである。

加齢の弁 — 寄る年波とは言わない —

鳴澤 宏英

人生には、いくつかの年齢的な節目があるという。ところが私の場合、振り返って記憶を呼び起こそうと努めるのだが、印象の強いものにほとんど思い当たらない。その日暮らしの安易な人生を送ってきたせいだろうか。

四〇歳を迎えたときは、人生の折り返し点との思いはあつたものの、これとてひとつ通過点以上の深い意味はなかつた。それに人生八十年は今日でこそ当たり前のことだが、当時はまだ期待と願望をこめての目標にすぎなかつた。

次に、五十の大台にのせたときは、年齢をゴルフのスコアになぞらえ、これで一〇〇を切るのは絶望的になつたとのささやかな感傷が頭をよぎったのを憶えている。

六十歳（還暦）となると、さすがに節目を迎えたとの印象が鮮烈で、家族から贈られた赤いカシミアのチョッ

キを着たときの感懷は正直複雑なものがあった。

学友のひとりは、新聞を開いて、官庁や会社の人事欄より先に死亡欄に目がいくようなら、老いの証拠だと言う。もちろんこの変化は、一夜にして起きるわけではない。漸進的なプロセスなのだが、サラリーマンも六十台にいれば、誰しも経験するところではなかろうか。第一の動機は、知人の名前が載っていないか探すこと。次に気になるのが死因。ガンと知ると胸が痛む。よくあるのは心不全、これでは心臓が止まつたから死んだ、ということだけのこと。真の病名を公にしたくないとの遺族の心遣いがあるのだろうか。そして第三は享年である。自分より年若くして他界した人には、赤丸印をつける妙な習慣がいつしか身についてしまった。赤丸のつく頻度は、当然のことだが、年とともに高くなる。人間、生まれた順番に人生を終わるわけではない、との単純な、しかし明白な現実をあらためて思い知らされる瞬間である。

「のらくろ会」という全国的な集まりがある。大正十一年（戌年）、つまりワンワン年生まれ、それに田河水泡の漫画を愛読した世代などいろいろな意味をこめて名づけられたもの。誘われて会員になっているが、まさに多士済々。ルパン島から生還した小野田寛郎氏もその一人である。

この会の、さる常連によると、年寄りには三つの戒め（タブー）がある。ひとつ、昔の話（その多くは手柄話か自慢話のたぐいだ）はするな。ふたつ、同じことをくどくどと喋るな。三つ、孫の自慢をするな。いずれも聞かされる側の気持ちを汲んだもので、言い得て妙だと思う。

他方、彼のお奨めの話題は色恋に関するもの一切である。ちなみに「のらくろ会」は、女性に限り、会員資格をすべての戌年生まれにひろげている。その狙いは明白々々。現に戌年生まれのバーのママや、有名女優が会員に名を列ねている。「いい年をして・・・」などというのは余計なお世話だ。文豪ゲーテをみよ。晩年になって

いかにも世俗的な寂寥感に襲われたものである。

十八歳の乙女に真剣な恋をしたではないか。当然のこと、失恋した彼は「マリーエンバートの悲歌」を書いている。

遠慮することなど全くなないのである。

昨年の流行語大賞に輝いたのは渡辺淳一の「失楽園」。究極の不倫として大いに話題を賑わせた。この題名は、周知のことく、J・ミルトンの壮大な叙事詩（全十一巻）『Paradise Lost』の借用である（「樂園喪失」という邦訳もある）。天国を追われたアダムとイブの話というものは不当な単純化だが、原著はわが国でも愛読され、その一部は旧制高校の英語のテキストにもなっていた。

失楽園ブームに触発されたわけではないが、たまたま毎日が日曜日の身分なので、朝からテレビ画面に現れる若い女性たちを鑑賞（？）している。

最近の注目株のひとりは、まだはたちの佐藤藍子。眼が人一倍大きく、しかも今もてはやされる「小顔」の典型、それに清純な乙女の印象がある。その対極にあるのが飯島愛。こちらはかなり年上、例のTバック（女性のふんどしルック）を売り物にしてデビューした一見突っ張り型だ。本人も中卒の不良少女を自認しているが、ど

うして頭の回転は早く、何よりも勘がよい。

タレント並みの扱いを受けている女性アナも、とりどりである。たとえばNHKを辞めてTBSに移った話題の草野満代。大の酒好きでつき合いがよく、芸能記者仲間の評判は上々だが、ニュースキャスターとしての評価はまちまち。彼女に限らずスポーツ系は、総じて明るく清潔感がある。香川恵美子（TBS）、関谷亜矢子（NTV）などいずれも然り。美人とはいえぬが草野満代の後釜の有働由美子（NHK）も好感がもてる。美形となると、好みもあるだろうが、鷹西美佳（NTV）や田口恵美子（テレビ東京）——彼女は四月にテニスの松岡修造（東宝の社長の息子）と結婚する——などが挙げられる。そんな他愛のない話をしていたら、そばで聞いていた西川知世さんが、すかさず「テレビの見過ぎ」と言って、明るい声で咲笑した。憎めない人柄である。

転じて最近共鳴したのは山藤章一の奇想天外な発想だ。もともとイラストレーターだが、軽妙なエッセーや辛口の評論でも結構売れている。また熱狂的なプロ野球ファンでもある。還暦を迎えた彼は言う。六十歳に達した男

性はすべからく「シルバー・ハンマー」を腰に差し、マナーを心得ぬ若者に一撃（はりばてだから痛くない）をくらわせるべし。そのための法律を作れ、と彼は主張する。そのところは年寄りの憂さ晴らし、それに世直しひための警鐘の意味を少々加えたもの。しゃせん遊び心だが、人生の知恵のひとつと言えようか。

シルバー世代は 人生の残りものではない

大島 義

高齢社会と言われる世の中に慣らされつつある間に、超高齢化社会という言葉が目立つ世の中になってきた。定年というと失業、孤独、粗大ゴミ、濡れ落葉、などと暗い面ばかりが強調され勝ちである。しかし、現役世代とは違った効用があるのも否めない。今まで所属して

の競争や先輩・後輩への気配りなどのシガラミから解放されるからである。いわば新人生を手に入れたようなものである。人生の忘れ物を拾得するよい機会を与えられたと思えばよい。やり残したこと、やりたいと思うことに積極的に挑戦することである。暇ばかりの生活では現役時代とはまた違ったストレスが溜まることになる。日々の生活に対する工夫で乗り切って行かねばならない。

地域社会との交流の場も積極的に求めて行きたいものである。シルバーライフに入るまでは、ともすれば没交渉であり勝ちであった地域社会に対してである。地域に存在するシルバー人材センターはその好適な場と言える。それぞれ現役時代に長年培った知識、経験、ノウハウ等を有効に活用できる場を見つけることもできるだろう。この人材センターは全国に存在し、基本理念として「自立・自助・共働・共助」を掲げている。またサークル活動、趣味の集いなど生活に活力と潤いを与えてくれる場がある。

高齢期をどう生きるかは個人の選択と自己責任の問題

であることは言うまでもない。しかし、無為に過ごして
いては楽しみは生まれてこない。これからの一十年、三
十年を明るく生きぬくためには、それに合わせた価値観
を考えて行かねばならない。

高齢社会即老人社会という考えは、もはや時代遅れで
ある。本来、人間は精神的に加齢（エイジング）とともに
にますます成熟していくことが老年心理学の研究によつ
て証明されている。高齢者像は変わりつつあるのである。
積極的な生活態度を持つて生きる（アクティブエイジン
グ）ことであり、創造的・生産的な生活態度を持つて生
きる（プロダクティブエイジング）ことが要請されつつ
ある。高齢者は守られる存在ではなく、高齢者自身が社
会に貢献する市民として生きる努力を続けて行かざるを得
ない時代になってきたように思う。

ところで、生殖を目的と考えるなら、性行為そのものがフェティシズムであり、國の覇権なり権益の拡大が目的であるなら、戦果をあげることがフェティシズムになる。

次にフェティシズムの効用を考えると、女性の下着に執着を持ち、それで満足が得られるならば、それが目的化しても、それなりの意味を持つ。現に性行為を伴わない性的行為が街に氾濫していて、セックスレスの男女カップルも増加しているらしい。

千二百兆円のフェティシズム

小林 正憲

生殖は人口受精などの手段により別途可能である。性的行為の裾野を見ると、生殖を必要としない高齢者を楽しませるところにもその要素がおよんではいる。

戦艦大和も結果的には効果がうすかつたが、巨艦を持つことで利権争いが有利になったとしたら、当時の考えとしては意味があつたことになる。

フェティシズムは科学技術や社会技術を伴つた文明の所産である。人間をより美しく、または好ましく見せるための付属品の開発があればこそフェティシズムが生じるのであって、裸の生活ならばありようもないし、戦艦大和を完成させたのも技術あつてのことである。

このようなことを言ひだしたのは、現在我が国の個人金融資産が千二百兆円余という膨大なものだからである。お金で欲しい物が買える、何らかの願望が満たされる、という目的のためにお金を貯めるのであって、まさしくフェティシズムである。

しかし、豊かな生活がしたいので、物を買つたり、役務にお金を使うわけだから、豊かな生活を目的とするな

ら、公共設備の充実などで達することもできるから、物を買うのもフェティシズムである。

次に、お金を貯めることが満足感につながるならば、このフェティシズムにも意味があるし、何よりも現在の日本経済を破産させないのは、この千二百兆円があるからである。国や自治体の借金も貸し手が国民であるからこの程度ですんでいることを思えば、千二百兆円のフェティシズムは実際に有効に作用している。

手段はどのようであつても、結果は千二百兆円の実質価値減少で破綻が解決できることを知る大蔵官僚は、涼しい顔をしているようにみえる。フェティシズム狂の日本人のなかで、彼らだけがフェティシズムに惑わされない人種である。彼らは他人のフェティシズムを上手に利用する秀才である。

また金融流通などの社会技術が一応完備した文明を持てばこそ、このフェティシズムが可能であったことも加筆したい。そして、このフェティシズムをもつと役立てて方法はないか、と考えるのである。

このようなことを言ひだしたのは、現在我が国の個人金融資産が千二百兆円余という膨大なものだからである。お金で欲しい物が買える、何らかの願望が満たされる、という目的のためにお金を貯めるのであって、まさしくフェティシズムである。

しかし、豊かな生活がしたいので、物を買つたり、役務にお金を使うわけだから、豊かな生活を目的とするな

第二次大戦が侵略であったという解釈とは別に、アジアを植民地から解放するのだ、という意気燃えた若者もいた。そして尊い血を流し、すべての資産を失って敗戦を迎えた、それが我々の世代である。

今仮に、再びすべての資産を失う覚悟で、この一千二百兆円を使うならば、アジア経済は救える。しかし、そもそも出来ないだろうし、うっかりすると戦艦大和の二の舞になる。

だから、我々からみた若者の国に二百四十兆円くらいのサムライ債の発行を認め、高齢者が主体となって直接間接にこれを消化してはどうだろうか。それが意外と高齢社会のあり方につながるようにも思えてきた。

「高齢者のフェティシズム」と「千二百兆円のゆくえ」については、それぞれ項をあらためて書きたいと思っている。

思うに、マスコミにとって最も楽しい情報源は戦争である。読者ないし視聴者の関心を引きつけるのは戦争の描写であろう。悲惨な場面、残酷な情況等数限りない材料が無数にある。それを、あらゆる限りの誇大表現によつ

満八十歳の独り言

野村嘉彦

いつの間にか私は満八十歳。マスコミに育てられて生き永らえてきた。マスコミは一度しかないこの世の人生を結構複雑怪奇にして楽しませてくれた最大の功労者である。

しかしながら、だれでも他人に知られたくないことがある。一方、他人の隠していることを暴きたがる、覗きたがる。他人が困るのを、あるいはその一生を台なしにすることに喜びを感じる残酷な性格を持っている。対岸の火事を見物する野次馬根性もその一例である。その演出陣のチャンピオンはマスコミである。

て人々の心をかき立てる。読者や視聴者はそれにより興味を高めて喜んだり、悲しんだり、そして憤りを感じたり、正義感をかき立てられて楽しむ。大きな戦争のない今日、些細なことを途方もない大きな表現で報道して大方の歓心を買うかが、マスコミ各社の腕の見せどころのようである。それに四六時中踊らされているのが現代人と言えよう。

さて、その中で米国の著名なジャーナリストであるボブ・グリーンは、かつて小さな少女の手紙の話を書いた。時は一九六六年。クラフトという名前の八歳になる少女が、イリノイ州にある小学校で授業を受けていた。彼女の三年生のクラスの先生は小学生に対しても、若いアメリカの兵士たちは、故郷の友達や家族からも遠く離れたベトナムという場所にいると話した。生徒たちは、ベトナムにいる兵士のために、みんなで思い思いの意匠をこらしたバレンタインデーのカードを作り、先生はこれをまとめてベトナムの前線へ送った。

一ヶ月ほど過ぎたある日、生徒の一人であるパリー・クラフトのもとに、一通の手紙が届けられた。ベトナム

にいる一人の兵士の母親からの手紙だった。彼女の息子がそのカードを受け取って、祖国の人間がベトナムにいる自分たちのことを思つていてくれる事実を知った大きな喜びを母親に知らせてきたのである。母はこのことをイリノイ州の幼い少女あての手紙に書いたのである。それから少女と兵士、そしてその母親はお互いに顔も知らず、電話もかけないままに数年間相互に手紙とカードの送付を続けた。言うまでもなく、小学三年生の少女は国際政治に関する知識はほとんど無いに等しかった。しかし、少女のしたことは、他人を思い遣る人間の気持ちを象徴的に表していた。ボブ・グリーンは当然ながらこの気持ちを彼女に率直に伝えた。彼女は今なお母親とカードを交換しているが、彼女はグリーンからの電話で事の一部始終を聞き終えて、「自分のしたことがこんな素敵な結果を生んだことを知り、あらためてれしく思います」と答えた。

一人のマスコミの優れた記者の語るトピックは老人の私の心を激しい感動の世界に導いた。私はふとしたきっかけから人生の大半、八十歳の半分即ち四十年間ベトナム

ムとの交遊に生きてきた。

ベトナムの友人は坑米救国の苦しい戦いの毎日の生活の中で、私に辛抱と勇気と謙虚と、どんな逆境にも挫けない頑張りの精神力を与えてくれた。

やがて戦争は終わった。そこで哀れをとどめたのは戦場に赴いて無事帰還した米国の若者たちであった。彼らは「凱旋」のはずが、自国民から非難の標的となつた。彼らはベトナムの民衆の思い掛けない激しい抵抗に対して、その恐怖から逃れるために犯した非人道的行為が世論の批判的となつた。

それを真っ先に、しかも誇張して宣伝したのは他ならぬアメリカのマスコミであった。そのために辛うじて生きて帰国した兵士をアメリカの国民はまるで囚人扱いした。ベトナム帰りといえば『性病持ち、麻薬常習者、婦女子暴行、虐殺犯人、神経病者』という先入観念で見られた。

だが一方、人間はすぐ忘れる。だから歴史は繰り返すという。世界は少なくとも二十年以上大戦争と名のつく殺りくを体験していない。日本国民は敗戦後五十年以上

自らが関係した戦争を経験していない。だから観念的には戦争という言葉は知っているが実態を知らない。

私は一九一七年、二十世紀の最大の出来事の一つであるロシヤ革命の年に生まれた。そして波乱と怒濤の二十世紀が終わろうとして居る今日まで生きのびた。その間に二つの世界戦争と日本の敗戦を経験したが、幸運にも奇跡的に今日の繁栄を見て、相変わらずの平和で豊かな晩年を送らせていただいている。幸せの限りである。

二十一世紀はすぐ側まで来ている。人類がいかに生き抜くか、それをリードするのはマスコミの権利と責務といつても過言ではないだろう。宇宙探査などは人類共通のテーマとしてマスコミが先頭にたって推進しているのは素晴らしい。人はマスコミが良いことだと報道すればそう信じる。悪いと言えは猫も杓子もそう思う。何だか味気ないよう思える。

その意味で、私はこの世界で他に追随を許さない力とそれに伴う責任をもつてマスコミの活躍に人類の将来を委ねたい。そして残り少ない私の人生を適当に楽しませて、自らが生きるためにとは言いながら、がっかりされ。

せるような報道はなるべく自粛していただきたいとお願
いする。

訳のわからない老人の談議もこの辺りで終わりにした
い。

さて、退職後の人生を「いかに生きるか」は多くの人々
にとって一大関心事である。六十歳で定年退職した後
二十年は、十万時間あまりの時間が得られる。この豊富
な時間を、実のりある人生のために使いたいと思うこと
は当然と言えましょう。

この自由な時間によって、これまで出来なかつたこと、
例えば、趣味やスポーツ、地域での活動、学習やボラン
ティアなど、退職を契機として、趣味一筋、社会奉仕一
筋といった生き方の転換のほか、家族で過ごす時間・夫
婦で過ごす時間をもっとふやしたいと思えば、それも可
能となる。

こう考えてみると、退職はいろいろな生き方を可能に
するという意味で、ハッピーな転機と言えるかも知れな
い。

だが、退職したからといって、退職者は必ずしも職業
活動から引退するとは限らない。多くの退職者は、何ら
かの理由で再就職をする。その理由は人それぞれである
が、その多くは「経済的必要」がなくなるまでとか「体
力が続く限り」とかの理由で働くようであるが、本心は
は好ましいことである。

退職後の年金額が低いということが大きいのではないだらうか。

ところが、働くかなくても経済的に困らない人もなぜか働くのである。彼らにとって「労働は美德」であるという思いが強く、「働いていない・遊んでいる」ということに他人の視線を気にし、それに罪悪感を覚え、労働の中にしか生きがいを見いだせない、いわゆる無趣味な人たちであるが故に、生活に困っていなくとも働くというわけである。現役時代はモーレツに仕事に打ち込んできた人が、定年退職後生きる張り合いを失って、急に元気がなくなってしまうという話をよく聞くことがある。せっかくハッピーリタイアしたのだから、いろいろな人生のしがらみを離れて、自分の好きなように生きられる時間として、あるいはライフワークの探求のための時間として有意義に過ごそうとする考えが大切だと思う。

わが国は今「少子・高齢化」の急速な社会変動の渦中にあり。老若男女を問わず、多くの人たちが将来への不安な気持ちをつのらせながら、安定した生活と幸福な人生を求めて模索している。いよいよ少子・高齢化が深刻

な時代が到来する。二十一世紀である。

科学技術の進歩は、出生率と死亡率の低下を生み、少子・高齢社会を招来している。出生率の低下は少子化を、死亡率の低下は長寿高齢化を生む。出生率の低下が高齢化は多産多死→多産少死→少産少子の順を追って達された。つまり、出生率の高かった時代の人々が高齢者として多数残っている一方、出生率の低下で若い人々は減っていき、総人口に占める高齢者の割合が増えたのである。従って、人口が高齢化した国というのは日本、スウェーデン、イギリス、デンマーク、オーストリア、イス、フランスなど豊かな国々に集中している。

わが国は今、ものすごいスピードで高齢社会へ走っており、平成二十七年（二〇一五年）には四人に一人が六十五歳以上の高齢者だという。従って、団塊の世代の人たちの老後、さらにそのジュニアたちの老後こそ試練の時となるであろう。それゆえに、わが国の高齢社会を考えいく上で重要なことは、高齢化をめぐるさまざまな問題が、いま高齢に達した人々よりも、むしろ若い世代

に直接関わってくるということである。近年社会の高齢化と核家族化の進展は、多くの高齢者単身世帯を生みだす基になっている。単身生活を余儀なくされている理由は、子供がない、いても親の世話を見ない、親が子供の世話になりたくないなどであるが、いずれ病気や寝たきりになつた時のことを考えると、場合によつては、しきるべき施設に入る準備をしておくことも必要になつてくる。

乳幼児が元気よく育つためには、特に母親の愛情のこもつた育児サービスが必要であることと同じように、高齢者がその生涯を完結するためには、より若い支えが絶対必要である。しかし、このような問題に対する若い人たちの認識は残念ながら浅いようである。高齢化がもたらすであろう厳しい現実は、二十年後、四十年後にわたり、更にその後、高齢期に達する人たちが直面しなければならない問題であり、その意味で、高齢社会には、いま若い人たちこそもっと深い関心を示して欲しいのである。

私は五十八歳。あと七年で六十五歳となり、高齢者の仲間入りをする。それから二十年後、私はこの社会でどのような過ごし方をしているのだろうか。おそらく、不安定な過ごし方をしているように思われてならない。なぜかと言うと「老後の備え」がいまだに出来ていないからである。子供はいない。蓄えもない。年金財政のことには心配だし、下手をすると七十歳、八十歳まで働かなければならぬかも知れない。もし、そうなつたら、自助努力を怠つたための天罰であり、自業自得である。そればかりではない。寿命は男性よりも女性の方が長いことを考えると、私は女房より先にあの世へ旅立つことになる。そうなつた時、残された女房は・・・と考えると、老後の備えは万全でなければならないと自省しているところである。もし、寝たきり、ボケてしまつた時は、昨年成立した「介護保健法」の世話にでもなろうかと考えているところである。

備えあれば憂いなし、と言うが、私の老後の備えには不備があるが、つとめて健康を第一に、他人を頼らず自助努力の末「終」を迎えることが出来れば、と思つてい

迫りくる高齢社会の衝撃

大野 显

日本経済がさっぱり元気がなくなつてからもう何年が経つのであろうか。

マクロにみれば、一九八九年の東欧の共産主義体制崩壊がスタートであつたと思う。この時期は、ちょうど平成のスタートと重なつてゐる。一九九〇年末に最高値をつけた株価は、その後下がり続けている。この原因が政財界の高齢問題に対する無知、あるいは問題の無視からきているように思えるので、敢えてその対応の軌跡をたどつてみたい。

とある。

の傾向は企業の合理化、スリム化の進むなかでますます強まつてゐる。

わが国には、千二百兆円の預金があるといわれるが、

その預金を持っているのは、若い人ではなくて中高年である。この中高年が消費に背を向けたのである。つまり、パイオニアという会社は天に向かって睡をしたことになる。ここで問題なのは、周りの企業もこの重大さに気づいているのかいないのか、だんまりを決め込んでいることである。

何故この問題が重要なのかを簡単に説明すると、日本の企業社会に戦後定着した五十五歳の定年制は、一応人生五十年を前提としていた。ところが戦後の年齢の伸びは急速で、今や人生は八十年となつた。たとえ定年が六十歳に延びたとしても、その先の二十年をどう生きるのか。いま不況対策として日本の企業が採用している厳しい合理化策をみると、私はイソップ物語の北風と太陽の例えを思い出す。企業が北風を吹かせば吹かすほど、庶民の財布の紐はますます固くなる。では太陽の政策とは一体どんな対策なのか。

ドラッカー発言の衝撃、日本人は75歳まで働く

日本経済の回復は期待できるのか

一九九六年末に日本を訪れたドラッカーは、ある意味では日本の経営者がもつとも嫌がる問題を真っ正面から取り上げた。人口動態をどう把握するかが経済・社会分析の基本であるし、それを欠いた未来分析は成り立たないという前提に立って「人口動態の変化は物凄いものだ。その影響についての研究の一つの結論は、この先十五年くらいのうちに、つまり二〇一〇年ごろまでに、すべての先進国で退職年限、定年が七十五歳になるということだ。それ以外の解決はない」と言う。一寸先は闇といわれる未来予測のなかで、比較的に狂わないのが人口動態の予測である。従ってこの議論には説得力がある。このまま放置すれば、年金制度も医療・福祉制度も崩壊するであろう。

わが国でも日本ウエルエージング協会会長の吉田寿三郎先生は早くから北欧の福祉の実情を直視され、日本人はヤング・オールドの間は、つまり七十五歳まで働くべき、と主張されている。このことがどのような意味を持ち、なぜ重要なのかについて私なりの理解を述べたい。

日本政府は、景気対策というと内需拡大を錦のみ旗に公共投資を繰り返してきた。しかし、今それが効き目がないことはだれの目にも明らかである。二十年前なら道路を造れば自動車の生産も上がるといった、いわゆるケインズ流の乗数効果も期待できたが、最近では雲行きが変わって、公害をまき散らす車などいらぬ、という世の中である。

このバックグラウンドをうまく説明された第一勧銀経済調査部・武田淳氏の「景気対策としての公共投資の効果」から引用する。社会資本の増加が経済全体の生産性の向上にどのくらい効果があるかを示すものとして、労働投入量一単位当たりの社会資本が1%増加した時の経済全体の生産性上昇率をグラフにしている。このグラフによると、社会資本の効果は七六年の0・6%から九四年には0・15%と、その効果は四分の一に下がっている。また、この間に社会資本のGDP比率は四〇%から八〇%に上昇している。

一方、九〇年代は、わが国が高齢化率で欧米の先進諸

国に追いつき、これを急激に追い越す時期と重なつてゐる。すなわち九〇年に六十五歳以上の人口が一二%で米国に追いついた日本は、九五年には一五%でイギリスに並び、更に二〇〇〇年には一八%でスウェーデンを追い越し、世界一の高齢国となる。この急激な高齢化が現在の不況と同時進行しているのが、わが国の偽らざる実状である。この数字は、見方を変えると既に現時点で六十歳以上の年金生活者が二〇%を越えているということである。

先程から見たように、公共投資は税金の無駄遣いである。いちばんお金があるはずの中高年は、首筋が寒くて財布の紐をしっかりと締めている。この二〇%を越える年金生活者の消費を促す方策はあるのか。それは老後の不安をなくしてあげることである。生活に困らぬ程度の年金が保証され、いざという時の医療・福祉制度が完備していれば貯金は消費に向かう。つまり、高齢者のストックをフロー化するために対策を立てればよい。それは高齢者が元気なうちは働ける環境を作ることである。米国

では既に、定年制は年齢による差別である、と憲法にすらある州もある。AGEISM（年齢差別）は今や米国では、RACEISM（人種差別）SEXISM（性差別）と共に並んで三大差別といわれ、この撲滅は二十一世紀へ向けての最大の課題といわれている。高齢者の経験を社会に還元するプロジェクトにコミュニティー単位で予算をつけるといった対策は会社人間を再び地域社会に呼び戻す具体策ともなる。今までのハード指向でなく、人にお金をつける政策が望まれる。

高齢者雇用こそ最大の景気対策

「衣食足りて礼節を知らず」

石川 正達

遠い昔、「衣食足りて礼節を知る」という格言があった。だが、今やその格言は廃れ、「衣食足りて礼節を知らず」、いやむしろ「衣食足れば礼節を失う」という時

代になってしまった。

この格言は紀元前六百年代の中国・春秋時代、齐の名宰相、管仲が書いたとされる「管子」の中にあった「倉廩（米蔵）実ちて礼節を知り、衣食足りて榮辱を知る」が原典だ。これが日本に伝わり、平安初期の続日本紀に「詔曰く、人、衣食足りて共に礼節を知り、身、貧窮に苦しめば競つて奸詐をなす」と記された。

管仲は主君の桓公を助けて富国強兵策をすすめた。農・

漁業、商工業を振興させ、強力な軍隊を背景として桓公を覇者に導く。道徳よりも経済を重んじ、国民の生活安定を第一義に考えて成功している。当時の中國民衆の貧しさを思えば「衣食足りる」ことが優先した。飢えや寒さを防ぐ生活ができるで初めて初めて道徳心が芽生えると考えたのだろう。

私たちが子供のころ、たとえば電車で皇居前にさしかかると、脱帽して頭を下げる。親に反対しようものなら父親からガツンと雷が落ちる。当時の日本は歐米に比べて貧しい国で、富国強兵のために忠節を強要され、家族制度の下で絶対権力を持つ家父長から従順を強

いられた。社会でも家庭でも礼節を厳しく躰けられ、衣食足りずして礼節を押しつけられた形である。

「礼節」とは何だろうか。諸橋の大漢和辞典をみると「礼」とは「人のふみ行うべき則（のり）。生を遂げるために守るべき儀法。国家の法制。事理を貫き統べている法則。敬う：」などと記され、「礼節」とはその「礼儀のきまり」とある。つまり人が社会で生きていくために必要なモラルの基本なのだ。

ところが、一九四五年の敗戦により、それまでの日本の価値観は良きも悪きも、すべてひっくりかえってしまった。敗戦の混乱時に、ただひたすら貧しさから脱出しようと富の追求に夢中となつて摔金主義へと走つていった。自由・民主の大切さを学んだことは素晴らしいとしても、その代わり、己れの生活を守るために自己中心に固まり過ぎたのではないかろうか。社会に生きる人間としての義務や責任、善惡の判断は希薄になつていった。家庭においても親は子供の教育の指針を失い、社会生活の基本ともいえる躰も崩壊した。

「躰」とは、礼儀作法を身につけ、人間を美しく磨く

ことを願つて、日本人が作りだした漢字（国語）なのに、いまの国語表記の基準となる常用漢字から排除されいるという世の中なのだから、社会人としての躾が崩壊するのも止むを得まい。

今、社会には政治腐敗から中・高校生の殺人まで、世纪末に相応しい犯罪が溢れかえっている。ゼネコンの談合、贈収賄、大会社の総会屋との癒着、日本の官僚の頂点、大蔵省役人と金融業界幹部との贈収賄事件等々数限りない。銀行が会員のノーパンしやぶしやぶ店などで接待漬けの官僚たち。大蔵省OBが大量に金融界トップに天下りしている現状などをみれば、いずれも構造的に起るべくして起きた事件だろう。

大人が己れの欲望を満たすことしか考えない拝金亡者なら、子供も恥知らずの行動へと走っていく。万引き、傷害、援助交際…。自分の欲望を満たすためには何でもする。罪悪感はきわめて薄弱だ。刺してみたかった、殺してみたかったという理由だけで人を殺す。私も子供のころジャックナイフをポケットに忍ばせていたこともある。しかし人を傷つけるなどいう行動は想像の世界だけ

のものだった。それが今は簡単に実行に移すのだ。いつたい家庭での教育、躾はどうなっているのだろう。

日本の将来を考えるとき、少年犯罪の増加に心を痛める。この少年たちの親は、団塊の世代と呼ばれる戦後育ちの世代だ。日本の敗戦時、食糧・物資の乏しい時に育った。だから自分たちの子供には物質的に不自由な思いはさせまいと思って育てているに違いない。だが、余りにも自分中心の暮らしになり過ぎていなか。自分たちの生活を豊かにすることだけを求めて家族との心の交流、家庭での躾を怠つていないか。たとえ貧しくとも、他を思いやる心を育ててももらいたい。

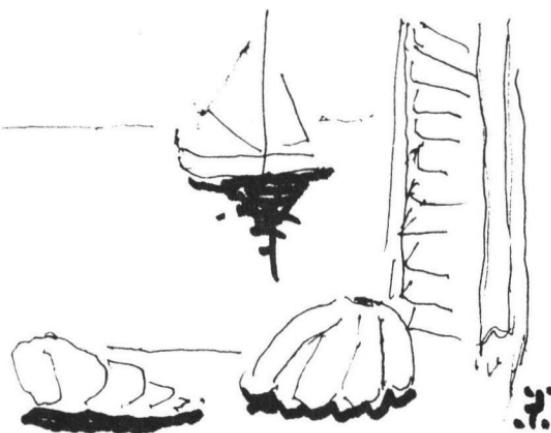
未成年者の行動は、親が責任を持たねばならない。何か起きると、学校とか社会の責任にしたがる。中・高校生の犯罪が起きると、未成年者は少年法で守られていると考えてか、その学校の校長とか教頭がテレビで答える。子供の行動の責任は保護者である親の責任なのだから、親は顔を隠しても出て社会に釈明すべきだ。そうならば、親は子供の行為にもっと目を配るようになり、子供の方も家の恥となるような罪は犯さなくなるのではない

か。

有名女優の高校生の子供が自宅で覚醒剤パー・ティーを開いていた事件では親がテレビに出て弁明せざるを得なかつた。小遣いを何十万円も与えて放漫に育てていれば、悪いことをするようになるのは当たり前のことだ。禅宗の指南書の中に「家富んで小児驕る」という諺がある。

家が裕福だと子供に何でも与えて甘やかすから子供は驕慢に育つという意味だ。諺のついでに「家貧しくして孝子出づ」というのもある。家が貧しいと子は親の苦労を察してよく働き、親孝行をすると言う。ところが最近は新仮名遣いになつたせいか「出づ」を「出ず」と記す人がふえた。家が貧しいと孝子なんか出やしないのだ。

テレビで若い女性たちに「恩を○で返す」の○のところに入れる言葉を書かせたところ「金」と書く人が多かつた。金、金、金の世の中である。礼節はどこかへ吹っ飛んでしまつた。世を嘆くは高齢者の常として、礼節を忘れた社会を嘆かずにはいられない。



利尻のウニ井

岸本義生

毎年夏が近づくと、旅行代理店のパンフレットや新聞に北海道旅行の案内が始まる。夢と花の浮島「利尻・礼文の旅」が目にとまると、私は必ず思い出すことがある、ひそかに苦笑する。

それは「思い込み」とか「勘違い」の怖さとおかしさである。これはままあることで、例えば「あの人はAさん」「彼はB社」などと頭から思い込んでいたために、話の途中で「あれ!」と気がついて恐縮することを私はたびたび経験している。これらの短い話は、私と同僚が、ある人たちに間違われ、間違えた方も、かなりの時間が過ぎて本人たちが現れるまで、間違えたことに気が

つかず、また私たちも人違いされていることに全く気がつかなかつたという利尻での出来事である。

一九八五年六月中旬のこと、私と同僚の二人は利尻を訪れた。主目的の函館・札幌の用事を済ましたついでに利尻まで足をのばした。デハビランドカナダ製十九人乗りAN Aで稚内からわずか二十分で着いた。利尻を訪ねたのは、海辺近くでの「陸上の鮑養殖場」に設備一式を納入したのでその完成前の挨拶と見学のために、特に肩の凝る仕事ではない。

この設備は簡単なもので、沖合より取水した海水をパイプで送り濾過器を通して水槽に注入する。水槽には、他から手当てした一センチほどのエゾアワビの稚貝が入っている。鮑には餌となる昆布を与えると三年で約八九センチの成貝となる。多くの水槽の並んだ屋内は昼でも暗い。鮑は夜行性で、明るいと餌を食べないという。天然もののエゾアワビは五年から七年かかるって、およそ十

三センチくらいになるが、不揃いなので、宴会・式場・団体などの数をこなすところには養植物が不可欠とのこと。更に、鮑の水槽から流れれる水はアワビの食べかすや糞などの栄養素が混じっているので、これを別の水槽に送り、そこでヒラメ、ナマコの養殖に利用している。稚貝は別に専門の生産者がいて、これは母貝に人口受精させて暗室で育てる。五ミリくらいになると水槽の底にくっつく。これに餌として藻を与えて二センチまで育てて養殖場に出荷する仕組みである。何年で二センチになるかは聞き忘れた。

話を本論に戻そう。

私たちちは投宿先のホテルに入ると、すぐに昼食のため最上階のレストランに出かけた。背広姿の私たちを見た黒服に蝶ネクタイの、チーフと思われるホテルマンが「あちらに席をとつてあります」と、左右を見渡せる最良と思われる角のテーブルに丁重に案内してくれた。室内は、シーズンインにも拘らず空いていて、入口近くの席で若者のグループが食事をしている程度だった。

真白なシーツのかかったテーブルには、すでに小付け

が並べてあった。「メニュー」と声をかけると、ホテルマンは「本日はウニ丼を中心に用意させて戴いております」と言った。瞬く間に準備がよいな、とは思ったが、私たちは「利尻では本場のウニをたらふく食べよう」と機中で話していたので、ためらうことなく「それでもいいよ。それからビール」と、私たちの返事も威勢がよかつた。

他の料理も味なものだったが、本場のウニ丼はさすがに抜群だった。食事を楽しんでいると、私たちと同年輩と思える背広姿の二人連れが入ってきたが、立ち止まつたままホテルマンと何かやりとりしている。さして広くない食堂なので、会話を自然に私たちの耳にも入る。

「稚内信用組合から一人分の席を予約している筈だが」と、声はだんだんと大きくなる。

「えっ！」

ホテルマンは私たちを直視した。

彼は大変な失敗をやらかした後悔と、なぜ私たちがウニ丼に反応を示さなかつたかの恨みと、この急場を何とか手際よく、しかも静かに収めなければとの思惑のため

か、気の毒なほどくちやくちやの顔をしていた。

利尻の場所柄、稚内信用組合はホテルにとつて上得意の筈である。二人を、私たちから少し離れた席に案内したホテルマンは、ひたすら平身低頭して「手違いがありましたが、すぐ準備いたします」と、謝りを繰り返していた。推察するに、信用組合の人は本土の関係先を案内しているのか、年配の人は機中で見かけたような気もした。かなり大切な客らしく、信用組合の人は何回も頭を下げていた。

つまりホテルマンは、私たちの身元を確認することなく、頭から予約を入れていた二人連れと勘違いし、また

そのように「思い込み」、何の疑いをもたなかつたこと

から起きたもので、私たちには喜劇であつても、ホテルマンにすれば冷や汗ものであつた。私たちも用意されていたものがウニ丼でなければ、おそらくホテルに確認したであろう。しかし、私たちの堂々たる態度にホテルマンは、より一層彼の思い込みを深めたに違いない。いざこれにせよ「稚内信用組合の方ですか」と、声をかけておけば済むことである。

食事代を払うときにホテルマンが言つた。

「本当に申し訳ありません。ご迷惑をおかけしました。食事代金は半額にさせて戴きますので、なにとぞお許しください」

丁重だったが、声には恨みがこもつてゐるように思えた。私は一人連れを振り返つた。彼らは機嫌を直したらしく、笑いながらビールを傾けていたので、なぜかほつとした。外ではエゾカンゾウの黄色い花が美しく咲いていたのを思い出す。

鳴沙山の月

遠藤俊也

どっと歓声があがつた。

怖いくらいに澄み切つた空を背景に、巨大な砂山、鳴沙山（めいささん）の稜線から中秋の満月が顔を覗かせ

たのだった。

た――。

これは、一九七七年九月十六日のことだ。

曇りがちだったこの日は、夕方陽が傾くまで空には薄墨色の雲が去来していた。ひと目この月を見たいと集まってきた大勢のだれもが天気を気にしていた。それが、ついいましがた雲が切れたのだ。時計を見ると、八時三十分だった。

わたしは、山稜から出てくる名月を捉えようと愛用の一眼レフを構えていた。無我夢中で何回もシャッターを切る。あらかじめ構図を考えておき、人の背ほどに伸びた沙棗（すななつめ）の木を横に入れ、山の背から現れ出した月に焦点を合わせた。

撮り終わつたあと、しばらくは放心状態のわたしだつたが、気が落ち着いてきたとき、ふと次の歌を思い出した。

天の原ふりさけみれば春日なる

三笠の山に出でし月かも

遣唐使阿部仲磨呂が詠んだ歌だ。この月を眺めていると、生涯を異国長安の都で終わらせる運命になつてしまつた彼のやるかたない望郷の念がよく分かるような気がし

鳴沙山は幾重にもなつた砂丘の連山だ。風が強く吹くときは、灰色のサラサラした細かい砂が舞つて音を発するのでこの名がついたという。山麓は広大な砂漠になつていて、日没前、ラクダに乗つて揺られてゆく遙か向こうの観光客の列が、大昔のシルクロードの旅を連想させ名月を堪能したあと、明るい幾つもの提灯に飾られた

敦煌市主催の月見の宴会場に入った。各席にはビール、月餅のほか土地名産のブドウ、スイカ、ウリなどが添えられている。市の幹部の挨拶が終わると、大勢の観客を

前に色とりどりのパフォーマンスが繰り広げられた。唐代の衣装をつけての京劇、西域少数民族の古典舞踊、果ては野良着をまとった日本の盆踊りらしきものまで出てきたのには驚いた。

帰途、バスのなかから、天空高く昇った月がひときわ沂えて見えた。その下の鳴沙山の黒ずんだ山影は段々小さくなつてゆき、やがて視界から消えていった。

炬燵の向かい側に小さな体をスッポリ埋めて顔だけを布団の外に出して母の手の動きをじっと見詰めながら

退屈紛れにそばに置いてあるボタン箱をかきまわしていると

兄の学校の制服の真鍮のボタンや貝ボタンに混じつて今の大円銅貨の二倍ほどの大きさの銅貨のようなものが一枚だけ仲間もなく寂しそうにしているのを見付けた。

外には寒中の東京の空つ風が容赦もなく吹き荒れている。父は出勤し兄や姉たちは学校に行つてしまつて家の中には母と私だけが同じ炬燵のぬくもりを楽しんでいる。

建てつけの悪いガラス戸と障子がガタガタ、ゴトゴトとそれぞれの勝手な音で間断なく鳴り続いている。

銅貨をボタンの箱の中から取り出してしげしげと眺めるが、

今までに見たこともない銅貨で、それが何だかどうして母は炬燵でせつせと父のワイシャツのボタンを付けてい

五 厘 銅 貨

浅 野 正 春

も知りたい。

「おかあちゃん、これなーに?」

「どれどれ、見せてご覧。あゝそれは昔のおあしですよ。」

「なんて言うおあし?」

「五厘銭と言つてね、一銭の半分の値打ちのおあしです

よ。」

「今でも遣えるの?」

「遣つてみてもいい?」

「えゝ、いいですよ」

立ち上がった小母さんは

鉄砲玉の入った硝子瓶のふたを開け

中から鉄砲玉を二個取り出して

小さな古新聞で出来た紙袋に入れながら

「マーちゃんが珍しいおあしを持って来てくれたから

本当は二個一銭なんだけど二個五厘におまけしてあげる

わ

と言いながら鉄砲玉の入った紙袋を渡してくれた。

「あら、マーちゃん。今日はとても元気がいいのね」

やにわに小母さんの前でパッと手を開いてみせると

小母さんは「まあー、いま時本当に珍しい。五厘銅貨ね」

「小母さん、これで何か買える?」

「えゝ、勿論買えますとあさ」

小母さんは、そう言いながら一瞬思案顔で

店の前に並べられた駄菓子類を見渡していたが
「そうだ、マーちゃんこれがいいわ」

立上がった小母さんは

鉄砲玉の入った硝子瓶のふたを開け

中から鉄砲玉を二個取り出して

小さな古新聞で出来た紙袋に入れながら

「マーちゃんが珍しいおあしを持って来てくれたから

本当は二個一銭なんだけど二個五厘におまけしてあげる

わ

と言いながら鉄砲玉の入った紙袋を渡してくれた。

「ありがとう、小母さん。」と言つて駆け足で家に飛び

込んだ。

母は前と同じ姿勢で同じ仕事を続いている。

紙袋から炬燵の上に二個の鉄砲玉を取り出して、

一つをそっと母の口に入れ、一つを自分でしゃぶり

駄菓子屋の小母さんの言ったことを母に夢中で話すと
母は静かな微笑みを浮かべながら聞いていたが

「そう？ 親切な小母さんでよかつたわね、マーチャン」

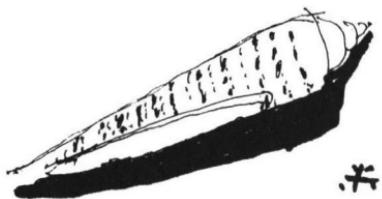
と言ひながら微かに涙ぐみ、暫しの間目を宙に遊ばせて
いたが

やがてまた静かな微笑みを浮かべて

ボタン付けの手を動かしはじめた。

の五厘銭をボタン箱から持ち出すことで無残にも断ち切つ
てしまつたのかも知れないと思つたびに、「母に済まぬ
ことをしまつた」という後悔の思いが胸を締め付ける。昭和十四年の想い出である。私はまだ満五歳で、今
思えば、世の中は戦争の危機が日々音もなく忍び寄つて
いた時代であったが、小学校入学前の私には勿論そんな
ことはまったく分からず、寒中の一日の長閑で平和な母
と二人きりのひとときであつた。

母がかすかに涙ぐみ、暫しの間目を宙に遊ばせていた
情景が、今でも私の記憶に焼き付いている。小さかった
その時は、私はその五厘銭の意味など考へる由もなかつ
たが、中学も三年生になつて、そろそろ顔ににきびが出
来るところになつたある日、ふとこの光景を思い出したと
き、「あの五厘銭には、もしかしたら母の何か特別な思
い出とか記憶がひそんでいたのではないだろうか？」と
いう疑問が私の胸になんの関連もなく浮かび上がつたの
だ。もしかしたら、私は母のかけがえのない思い出の絆



野球は三割、縁談は一割

—手打ち仲人のすすめ—

黒崎昭二

表題がおわかりですか？野球狂の私が苦心して考えついた迷句である。野球なら打者が年間を通じて三割以上の打率をあげれば一流と評価される。一方、縁談の世話を十に一つまとめれば、即ち一割をゴールインさせれば「仲人の達人」といっても過言ではあるまい。

筆者は結婚して四十年、銀婚式を過ぎ「金」に向かっている最中である。光陰矢の如しとはよく言つたもの。子供たちはそれぞれ独立し、普通の家庭を営む社会人になつたからまあ心配はなさそう。孫も四人を数える程度になつたし「よか爺」とも言えよう。人並みにここまでやつて来られたのは、親は勿論だが、学校の先生を始めとして社会の多くの方々のお陰である。そして恩返しの手段には親孝行を第一に、役所や企業を通じての仕事、更に地域社会での各種活動等いろいろとある。私の場合、

最後の項目の中に「縁談の世話」というのが入る。これは毎年必ず一組は縁をまとめるという具体的な目標として手帳の冒頭に明記してある。以下のところ終生続けるつもりでいる。

かつて四十歳の時、家内の従姉妹にだれかよい男性はないいかと頼まれた。しばしば我が社宅に遊びに来ていた後輩にたまたま狙いをつけて見合いさせたら、ものの見事の的中し縁組が成立してしまった。やや面食らつた。嬉しいのなんの。これが初の縁まとめ。つまり手打ち仲人第一号である。仕事もそうだが、物事すべて実績が出来ると各方面から声が掛かってくるもの。それ以来ずっと婿さん嫁さん依頼のお歴々が、ちょくちょく会社の席にも自宅にも来られるようになった。根が単純な我が輩。承ればすぐその気になる。あれやこれや世話するうちに三十年が経つた。手打ち仲人は三十近くに達した。一方、職場での立場上、部下から頼まれて結婚式場だけの頼まれ仲人も相当数させて頂いた。「手打ち」にせよ「頼まれ」にせよ仲人の役は若い人たちに対し終生の保証人である。従つて彼らとは季節の折目折目に会いもするし

便りも交換するが、実に楽しいものである。子供が生まれれば可愛くて孫のように思うしその成長ぶりを見聞きするのがまた格別に嬉しいのである。

ここで正直に告白すると縁談の世話は「勞多くて功少なし」である。もちろん事を考慮して「よかれかし」と思い見合いの場を作つても、その日のうちにノーという答が返つて来るのも多い。また何回か交際が続いて脈がありそしたら期待していると「断つて欲しい」と連絡があつたりする。その時は最小限の言い分を聞くとともに仲介者として多少の意見は言うが、くどくど追求しない。最も真剣に相手を見つめ考へているのは当事者。従つて原則として私の場合は粘つて説得はしないことにしている。大抵は止むなしとして我慢する。

一つだけ近年の難しかった成功例を紹介させてもらう。男性は三十九歳。海外駐在の経験もあり外國語にも巧みな一流機械メーカーの管理職。なぜか縁遠かった。女性は三十五歳。有名航空会社の国際線ホステス。地球の裏表数十カ国を飛び回り実力十分の人。このまま仕事を続けるなら会社も評価し更により地位につけたであろう。

その彼女がふと漏らした本音は「今は仕事も楽しくやり甲斐がある。だが初老になった時、身の回りに血肉を分けた子供のいない生活を思うと暗い気持ちになる」と。

私は双方に面談してから見合いをアレンジした。一番に強調したのは「今現在、仕事の上での業績が高そうで間接としては六十点と思ひなさい。己の分を冷静にわきまえて相手が六十点以上と思ったならば交際を続けなさい。六十点同士が幸いにも合意に達すればよし。こんどは夫婦となつた後に「人の△努力△」を重ね合わせて百点に近い家庭を作りなさい」と。彼らは辛抱強く交際した。一年に及ぶ付き合いが続いた。間に立つ当方も折節に助言を根気よく与えた。遂にまとまった。

結婚してしかるべき後に玉のような坊やが誕生。その名は△乃矢△ちゃん。皆さん読みますか。一人にとり、まさにダイヤモンドそのもの。新年になると必ずその△宝△を抱いて挨拶に来る。こんなに嬉しいことはない。私のここ十年の経験では見合いさせてそれが発展し成立に至る確率は十に一つあるいはそれ以下である。後輩たちの縁を世話してやろうと思い立つ御仁はかなりいる。

だが頑張って三、四回見合わせて残念な結果に終わると「自分にはこういうことは向かない」と投げてしまう。しかしさにあらず。がつかりしないで十回前後まで続けてごらんなさい。きっと一つくらいはまとまるはず。このごろは欧米なみに日本も自由恋愛の末の結婚が圧倒的に多い。時の流れである。だが、さまざまな事情で相手を探しにくい環境の中にいる人たちも案外多い。てれ屋で異性との交際が下手な連中も。そういう彼や彼女のためによい見合いの場を作つてやれるのは先輩もしくは上司なのである。

そこで特に男性の熟年管理者諸君。これは大事な業務の一つと思って欲しい。いわゆる営業なり開発なりの仕事ならば実績を挙げ成功させるべく、それこそ創意工夫、気配りに全力をあげるに違いない。経済情勢から社会動態、人間関係等に至るまで広くかつ細密に把握し判断し得る立場にある人だ。故にとことん世話好きな小母様たち以上に縁組でも適切な配慮ができるはずである。

人生少なくとも三回は仲人をせよと言われている。結婚式場での頼まれ仲人、もちろんそれもよろしい。だが

一步進めて自らの手で苦労もするが縁談をまとめへ手打ち仲人▽をやってみよう。素晴らしい満足感。二十一世纪に活躍する子孫を創出する大事業なのですよ。

プロ野球。三割打者は球団から表彰状を貰つて来期は年俸の大幅アップ。縁談。成功率一割でも手打ち仲人をしてへお天道さま▽から目に見えない表彰状を貰つて末長く続く最高の幸福感を味わおうではありませんか。

中国・開封訪問記

吉 善 清 己

河南省の開封市は、かつて宋の都であった。上海から夕方の特急に乗ると、翌朝到着する。私は塗料技術者として九四年から毎年この町を訪れ、様子を見てきた。

市政府は手取りばらく金が落ちる観光事業に目をつけ、千年前の古都再現に努力している。お陰で宮殿跡地

は整備され、町並みは年ごとにきれいになった。古都を巡る日本のツアーモーターも来るようになった。大規模工業団地の完成と、省都・鄭州に建設している国際空港が稼働するなど、この地域はますます発展するであろう。

開封市油漆廠は、四百名ほどの従業員で、主に汎用塗料を生産する小規模の塗料会社であった。計画経済の時代はテリトリリーが決められていたから、大手油漆廠と共存できた。しかし、市場経済に移行してからは、大手の汎用塗料と、もろに競争するようになり、利益は下がる一方である。おまけに、工業団地に新工場を建設してしまった。年六千トンの生産能力に対し、一千トンの販売がやっとではやっていけない。廠長と総工程師（技師長）は倒産の責任をとつて首になつた。

市政府は従業員、設備、商標を引き継ぐ新会社、開封市制漆總廠を発足させた。新廠長に任命された人民解放軍のOBは、従業員を半分に削減、月給はこの町の労働者平均の六割、四百三十元（一元＝十五円）に抑え込んだ。残りの従業員はレイオフで、月六十元をもらうだけになつた。旧油漆廠から引き継いだ定年退職者八十名の

年金は月に三百元。四割も減額した。親子三人で一ヶ月千元は要るというから、人々の生活は苦しい。新廠長は、従業員の命を守ることが第一と、販売部内の尻をたたく。しかし、倒産中の市場喪失が大きく響いて九六年度の販売高は三分の一にダウン、赤字決算となつた。九七年度は何とか三千三百トンまで回復して、黒字になるという。成果を上げた廠長の鼻息は荒いが、レイオフと低賃金で黒字決算になつただけである。

工業化の進展は、自動車、家電製品、農機具などの生産工場で使う工業用塗料の需要を増加させた。これらの塗料は収益性が良い。一方、高度の生産技術を必要とする。そのため大手油漆廠は先進国の大塗料会社から技術を導入したり、あるいは自動車塗料専門の合弁会社を設立したりして、売り上げを増やしている。資金の乏しい市制漆總廠は、大手の真似はできない。大手に向かない多品種・少量生産の製品を自己開発して、生き残らねばならない。そのために私のような専門技術者の協力が必要なのだ。

若い工程師（学卒技術員）の学識と創造性に、私の経

験を生かそうと考え、三名の工程師と共同研究を始めた。

三名は私が毎月日本から発送する実験計画に基づき、休日の土曜日に働く。その対価として、私は一人月額百五十元の出勤手当を支払っている。市制漆総廠は実験室と研究材料を提供する代わりに特許出願、生産・販売権を、私はノウハウを得るのである。市政府は“残業共同研究”と称し、高く評価してくれている。

自動車事故の増加は補修用塗料の需要を拡大したが、品質の良くない中国の塗料は見向きもされない。個人經營の塗料販売店は輸入塗料の販売を一手に引き受け、売上高は市制漆総廠と肩を並べるまでに成長した。店主は塗料工場を建設する、と威勢がよい。技術責任者として、首になつた旧油漆廠の総工程師を三倍の給料で迎え入れた。市制漆総廠の工程師たちは安い給料に不満を洩らす。市政府の助力を受ける軍出身廠長と私企業店主との経営競争はこれからどうなるのだろうか。

自動車修理塗装で一躍大金持ちとなつた私企業の男もいる。一日十元の安い労賃で農民を雇い、一台の修理塗装代は四千元を請求する。これはべらぼうに高いが、車

は国有企業の持ち物、たれからも文句は出ない。しかも現金取引だから笑いが止まらない。しかし、このようないい話はすぐに知れ渡り、同業者が瞬く間に増えて儲からなくなってきた。男はさっと手を引き、いまは輸入自動車部品の販売に重点を移した。

ばかをみたのは日本の定年退職者だ。彼はこの私企業に三千三百元の高額月給で修理塗装の指導に雇われた。三百五十万日本円を投じて湖に面した百平方メートルの高級マンションを購入、日本の年金はまる残りになる、と自慢していた。それが、今や様変わり。開封から引き上げるにも、高額マンションの中古は売れそうにない。乾燥ネギ製造の日中合弁会社は種子を日本から持ち込み、農家に栽培を依頼している。農民たちは収穫したネギを、土を払い落とすだけで出荷してくる。水で洗い、枯れ葉を取り、長さを揃える日本式要求は通らない。おまけに上水道に赤錆が混入、また田地のボイラーカラ供給されるスチームは時々停止するなど、合弁会社の日本人専務はイライラを当たり散らすだけだ。千五百元の高月給で雇われた日本語通訳は、専務と中国労働者との板

挟みに会い六ヶ月で退職した。このように合併会社は出だして頑いた。しかし、中日友好の名の下、市共産党委員会の力を借りて見事に解決、今は市の優良企業になっている。

従業員四千人の国有電装部品廠は価格競争に敗れ、倒産した。さしたる技術を必要としない部品組み立て工業には、農民たちがどんどん進出して、非能率な国有企業を打ち負かしている。米はキロ三元、小麦粉はキロ一元二角という安い農産物価格に喘ぐ農民たちではあるが、その子供たちは親の苦難を乗り越えようと勉強している。開封市人民政府が管轄する人口五百万人の地域で、九七年度、清華大学に三人中三名、北京大学に十人中七名が貧しい農民からの入学者であった。中国の農民は逞しく、日本の農民団体のように政治を当てにはしていない。

内陸の様子をみてると、中国は自由主義国家、日本は社会主義国家ではないかとさえ思えてくる。

翻つて我が家を見れば、我々夫婦は結婚して三十五年以上になり、一人とも還暦はとうに過ぎている。その間、

夫婦は『二心二体』

岩崎洋一郎

結婚披露宴での来賓の祝辞ほど退屈なものはない。新郎新婦をろくに知らない名士と称する人物が長々と美辭麗句をならべて、眠気を誘う。

その中で、珍しく頭に残る祝辞があった。ある脚本家が新婚の二人に与えた言葉である。要旨は、二人は今は歓喜の絶頂にあり、あたかも心も体も一心同体の気分になつてゐるであろう。しかし、生まれも育ちも異なる星の下で過ごしてきた一人であるから、本来は「二心二体」である。この事を忘れずに新婚家庭を築くとうまく行く、という筋である。結婚の祝辞に相応しいか、いささか疑問が残るが、私にとって感銘深く聞けたし、考えさせられる助言であった。

犯罪都市と言われたニューヨークに住み、高齢の初産を経験したり、ブラジルのアフリカ地帯のバイアで風土病に幼児がかからぬかとおろおろしたり、様々な体験と一緒にくぐり抜けてきた。

今や、お互いに角もとれ、体力の衰えも自覚している。二人とも物忘れが甚だしくなり、そのつどお互いに優しくからかいながら、補い合っている。サラリーマン生活を卒業して五年にもなると、年金生活のテンポにもそれなりに順応出来てきた感が深い。

「二心一体」の言葉をかみしめながら、我ら夫婦の歴史を振り返ってみた。激しかった求愛時代は別として、我が年代の男は企業戦士として身も心も会社に捧げてきた。三十数年間で、欧米への出張が二百五十分を超えた。更に国内の出張を加えると家にいた時間は限られており、とても「一体」とは言えたものではなかつた。体もさることながら、頭の中も仕事の忙しさや楽しさで溢れかえっていた。妻は妻で、家事や子育て等、自分の領域で忙しかつた。たまに一緒に外出しても、それは例外的な行事とも言うべき性格のもので、誰が見ても一心同体とはほ

ど遠いものであった。それぞれが、小さな宇宙を持って、その中で生きてきた。球形の接点は小さくはない。定年になったからといって、いまさら妻の宇宙に、十足で侵入するようなまねはできない。

現在はどうか。男性は、会社生活から離れると、核となっていた一つの大きな宇宙がバブルのごとく消滅する。もし、会社なる宇宙のみに生きていたならば、定年後は、身の置きどころがないであろう。幸い、私の場合は、外国の友人たちの励ましもあって、コンサルタント業を始めた。借りた事務所に毎日通つて、外国企業の日本会社との提携という特殊な宇宙を一つの生息の場としている。更に、企業〇Bベンクラブや日本ライセンス協会等の会員としての場がある。小学生時代から大学時代に至る交遊関係や、元の会社の校友会代表の役職がある。趣味のジャズ仲間もいる。

我々夫婦はお互いの宇宙の存在を尊重しながら、それこそ自分の領域で自分を確立してゆくようにしている。例を挙げると、一人とも温泉は好きであるが、妻は大学時代の親友と年一回ぐらい出掛けて、命の洗濯をする。

また、田舎の妹のもとに一人で出掛ける。女同士、気の置けないおしゃべりが楽しいらしい。当然だが露天風呂も、女同士でゆっくり心ゆくまで入る。

私の方は、小学校の男女の同級生と年に一回遠出の旅行を計画し参加する。彼らとはもう五十年以上も昔から付き合いだから、妻に会う遙か以前からの仲間である。杯を交わすと、一瞬の内に腕白時代にタイムスリップする。修学旅行や夏の遠泳の思い出、戦中戦後の食料難や疎開の辛さ、先生のあだ名などなど。夜の更けるのを忘れて語り合う。ここは女房の入り込める世界ではない。本人も承知している。

このように、夫婦といえどもオフ・リミットの聖域があり、それは高齢になった現在も不变である。いや、無理がきかなくなっている高齢の今だからこそ、ますます大事になってきているのではないか。まさしく「二心一体」の領域であり、それをお互いに尊重してゆくのが、上手に年輪を重ねてゆく知恵の一つであると痛感する。と言って、お互いの間が断絶しているわけでは決して無く、一緒に過ごす時間は長くなっているので、話し合

うチャンスが多い。テレビを並んで見ながら、辛口の批評を披露しあって若い者にケチをつけるのも一つの楽しみである。お互いに、何時かはこの世から辞去することも認識して、その時に備えた語り合いを自然にする雰囲気が生じている。

お互いに正気のうちにと、約束しあったのは、一、癌になったら、お互いに告知すること。最期のときになって、嘘つき合うことはやめよう。

二、アルツハイマーなど痴呆になつたら、直ぐに何処かに入院せしめること。もうお互いの介護をする体力は無いことを自覚しよう。

三、不治の病になつたら、延命策はとらないこと。尊厳死が認められるか不明だが、苦痛にさらされて植物人間になつても生きてゆくのは潔しとしない。

これまでの人生は、お陰様で、面白く愉快であった。物質的に金銭的に平均的なレベルの生活もエンジョイした。思い残すことは、もはやそんなに無い。いずれは夫婦の一方が、先におさらばすることに間違いはない。そのことを冷厳に見つめて、今からその日の衝撃を和らげる意

味もこめて、一心一体であることを肝に銘じて、二人はこれからも旅路をつかず離れずに進もう。これが今の我々にできる愛の表現ではないか。

長岡京偶感（二）

佐 份 利 治

「桓武天皇はなぜ平城京を捨てたか」

この問い合わせに対し、これまでには「堕落した仏教勢力から逃れるため」、「天武系の勢力から離れるため」などの説が唱えられている。しかし、年表や記述を仔細に見ると、他の推理が浮かび上がって来る。

桓武天皇が山部王として初めて歴史に現れるのは、七六四年、二十八歳で從五位下に叙せられた時である。恵美押勝の謀反に際し藤原式家の一統に協力したためと思われる。それまでの山部王は、母、新笠女の生地・乙訓

郡大枝村を中心^{おおえ}に山背一円で狩りなどを楽しみつつ育つたと想定されている。

中央官界に入った山部王は、称徳女帝と道鏡との癒着を始め、腐臭の漂う仏教界を目の当たりにした。七七〇年には侍従、七七一年中務卿と急速に昇進した山部王は平城京への嫌惡を次第に強めたに違いない。

一方、白壁王の擁立以来政界で暗躍して来た藤原式家の一族、百川は、和氣清麻呂を使って道鏡を駆逐し、あまつさえ称徳天皇に毒を盛った（嫌疑極めて濃厚）。その結果、七七〇年には称徳天皇が崩御、白壁王が即位して光仁天皇となった。

権臣百川の陰謀は更に続く。天武系の血統を除くため、光仁の后、井上^{いがみ}とその子他^{おほか}戸皇太子を、天皇を呪つたという理由で謀殺してしまう。その結果、山部王は皇太子になるが（七七三年）、この事件はその後、彼の人生に大きな影響を及ぼす。

皇太子となつた山部王は、淫祠性が強く俗権化した仏教の影響を避けるには、都を移すしかないと考えた。そして密かに候補地を探し始めたと強く想像する。

候補地が決まると（付記）、壮大な計画で新都の設計を始めた（付記）。反対勢力である天武系の力も強い故、すべては隠密の内に進められたが、新都への移転は、七八四年十一月一日を目標とした。それは、この年が天下の政治の改まるとされる甲子きのえねであり、また、十九年に一度十一月一日に冬至が訪れる吉相の年でもあったからである。

ところがここで、予定外のことが起った。光仁天皇の崩御である（七八一）。桓武天皇として即位した山部王は、父の喪に服するため三年間新都の発表を延期しなければならなくなつた。

律令国家としての機能回復や蝦夷征伐に積極的に取り組み始めた天皇は、また、井上や他戸の怨靈に悩まされ始めた。「あれは百川のやつたことだ」と打ち消しても、義母や弟を死に追いやることにより自分は皇太子になり、ついには王位に就いたとの自責は募つて来る。

夜ごとの亡靈に耐えられなくなった天皇は、先帝の喪の明けるのを待ち兼ね、七八四年五月に長岡京への遷都を発表した。

六月に工事を開始して、十一月には遷都、翌年一月一日、新宮大極殿で朝賀式を行つてゐる。

実は、井上や他戸の怨靈が史書に表れるのは、ずっと後年である。しかし、慌てふためきつつ、わずか半年の工事で遷都した異常な様子から、怨靈の姿が強く読み取られるのである。

【付記】長岡村か宇太村か。

「最初に桓武天皇が選んだ長岡村は二流の地であり、そのため、十年後には宇太村（平安京）へ移らざるを得なかつた」というのが定説である。しかし私は、次の理由から長岡と宇太とは同時に視野にあつたと考える。

一、長岡も宇太も、東西四・五キロ、南北五・三キロの京城を収容するのに十分な広さがある。
二、長岡も宇太も、北が高く南が低く、北と西は山に囲まれ、地相的に京都に適している。両者とも陸路の要地であり、水運にも恵まれてゐる。

三、長岡も宇太も山背に属し、秦氏の支配する地域であつた。秦氏と姻戚関係の深い藤原氏も領地を持っていた。

四、長岡村の広い地域に古墳が多く存在し、先史時代から水害は無かつたことを物語る。ただ、京城の東南部を桂川が斜めに横切り、この辺りは昔から水害があった。一方、八百年ころの宇木村は、賀茂川や葛野川かとのが平野の中央部を流れ、南部は湿地帯であった。

このように見て來ると、兩者を比較した上、長岡村を採ったとしても不思議ではない。

【付記】平安京は長岡京のコピーだった。

平城京の設計では、大路の間隔を先に決めてから小区分を作った。そのため、道路の幅により個々の区画の面積が異なることになった。これに対し、長岡京では四十丈（一一〇メートル）四方を一区画としそれに道路幅を足して京城が設計された。宮城（内裏・朝堂院・中央官府を含む）内の建物のプランについても、長岡京では、平城京のそれから幾つか変更された。しかし、その後作られた平安京の設計は長岡京を全面的に踏襲するものであつた。（八木充「古代日本の都」）

長岡京では宮城の建物もすべては完成しなかつたが、宮城の設定をするに際しては、まず都全体の区画の割り

付けをしなければならなかつたわけである。この点からも長岡京の設計はかなり早い時期から進められていたと考えるのが妥当である。実際には、道路の建設も一部は行われたらしく、現在の土地区分にもその名残が見られるという。

犬和魂を忘れた桜の話

大塚 激

私自身、そんなに多くの国や都市に出掛けたわけではないが、そのなかで、三年間住んでいたアメリカ合衆国の首都ワシントンDCは好きな町のベスト・テンに間違いないなく入る。

何よりも緑が多く、空がたっぷり広がっている。

ニューヨークのように、首が痛くなるほど真上を向いてやつと「空があつたか、まだ暑か」というのはどうも

いただけない。その点、ワシントンは普通に前を向いていて十分に空を見ることできる。

しかし、ワシントンの冬の寒さ、夏の暑さは極端に厳しい。冬は体感温度摂氏マイナス五十度、夏はプラス四十度に近づく。

冬、家の近くのハイウェーで派手な事故があり、車で見物に出掛けたが、車から出てフェンス越しに現場を見ること一分足らず、旺盛な野次馬根性も寒さには勝てず、急いで暖房の利いた車に戻り、少し体を温めてからまた外に出る始末。目をつぶると上瞼と下瞼が軽く凍りついで開く時パチンという感じがする。

夏は夏とて、冷房の利いたビルから出ると、送風機から熱風を曰いっぱい吹き掛けられているようで、思わずクラクラと立ちすくむ。

西海岸は気候が温暖で快適なのに、こんな厳しい気候の東海岸になぜ首都を置いたのかと尋ねたところ「ヨーロッパに近いから」という返事。アメリカ人の永遠の故郷はやっぱりヨーロッパであり、イギリスなのだと改めて知らされた。

出張や旅行で短期間そこに滞在したのと、少なくとも一年そこで暮らしたのとでは、同じ海外経験であっても大変な違いがある。ここで少なくとも一年といったのは、春夏秋冬、最低でも四季を過ごすことである。

どの町も、どの国も、例外なく移りゆく季節に応じて驚くほどにその表情を、たたずまいを、そして色を匂いを音を、さらには人の心さえも変えてゆく。

仕事の関係で、それまで三回すべて真冬にワシントンに出張してきたE君が、たまたま四回目、ベスト・シンズンの四月にナショナル空港に到着した。都心に向かう車での第一声は「私の知っているワシントンとは全く違う。これは別の町だ」というものであった。

真冬のワシントンは、猛烈な寒さもさることながら道路脇に積み上げられた雪に泥がまじって、街全体が薄汚れた茶色と灰色に塗りつぶされる。寒風が吹き抜ける街路は人通りもまばらで、みんな足早に通りすぎて行く。クリスマスの飾りさえも侘びしくて、物悲しく、これが世界の首都かと思う。

それが春の訪れとともに劇的に一変する。それはもう鮮やかとしか言いようのない变身である。四月第一週の週末、桜祭りのパレードに浮かれる緑と赤と黄色の華やかな街は暖かい陽光と花の香りが満ち、名実ともに世界の首都としての貫禄と容姿が戻ってくる。

ワシントンの住人たちはこの春があるから、あの冬を耐えることができたのだと思いながら、そろってポトマックの桜見物に出掛ける。冬を耐えたから、春の喜びが大きいのであって、そのはずむような気持ちは、春だけの旅人にはとても分かるものではない。

ある年の四月九日、わが事務所の一回四人と、たまたまその時出張で来ていた一人を加えて総勢五人で、お寿司とおにぎりとボットのお茶を持って、そのボトマックに出掛け、満開の桜の下でお花見弁当と洒落こんだのである。ワシントンの住人四人は訪れた春の喜びを満喫したことはいうまでもない。

あいにくと、その夜から十日いっぱい、「花に風」の言葉の通りに雨と風が吹き荒れた。これで今年の桜も終

わりか、九日にお花見をしておいてよかつたナ、と思いつつも十一日に別の客人を迎えて、多分前日の嵐でもう駄目でしようと言ひながらポトマックへ案内したところ、驚いたことに嵐などどこ吹く風と爛漫の花盛り。九日と全く変わらない。「花も嵐も踏み越えて」ではなく「花は嵐を踏み越えて」という次第。

日本においては、桜というものは古来から花の命が短くて、散りざわがいさぎよいとされている。

「敷島の、大和心を人間わば、朝日に匂う山桜花」「咲いた花なら、散るのは覚悟、見事散りましょう国
のため」

ところが、ワシントンの桜は日本の桜と違つて、かくも散りざわが悪く、ねばり強いのである。

なぜだろうと皆で議論してみた。結論は風土のせい以外考えられないということになった。

最初に日本から送られた桜が、このボトマックに植えられたのが一九一二年というから、もうかれこれ八十年以上も昔の話。それからずつとアメリカの風土に根付いてきたため、淡白な日本人的性向を脱し、油っこいアメ

リカ人的性向に近づき、散り際をこそ、その神體とする大和魂を忘れてしまったのに違いないということである。

地質、地味、気候、温度、湿度、そういった大自然のもろもろの力と、与えられる雨、水、肥料などが長い年月をかけて日本の桜をこのように変質させてしまったと考える以外、納得のいく説明は得られそうにない。

そしてこの説が、たとえ少しでも正しいとすれば、そこに住むそれぞの國の人間も、そういった風土の影響をうけないはずはないだろう。だとすれば、この間の戦争の原因も結果もそのせいではないだろうか。

桜から始まった昭和一桁生まれの議論は、時間の経つのも忘れて飛躍していく。

そして、日本でなら完全に花が散ったであろう雨と風に耐えて、次の週、十五日ごろも、この大和魂を忘れた桜は、まだ十分鑑賞に値する花を残していたのである。

祝
辞

新婦新郎双方のご両親ご親族のお慶びもさぞかしと拝察致します。

ご結婚おめでとうございます。

西 島 力

え、何、順序が違う？ いえ違っておりません。別に順序というものは決まっておりません。新婦でも新郎でも、男でも女でもどっちが先ということは無いのであります。声に出して言うから嫌でも順序が出来るので、これが並べてあれば右左というだけで後も先もありません。早い話がおふろ屋さんでありますが、関東なら向かって右が男で左が女であり、関西ならそれが逆になる。いえ別に規則でそうと決まっている訳ではありません。はあ、公衆便所ならどうなるかって？ いや、そこまではまだ研究致しておりませんで、この次までには取り調べまして。いったい何のお話をしているのでしたかしら。

そうです、日本では昔から芝居や狂言でも、お染・久松、お軽・勘平、お夏・清十郎という風に、たいてい女性が先になっております。これが伝統であります。ちちははという言葉がございます。今ではこれはお父さんお母さんのことだと考えられておりますが、これは実は逆であります。ちちといえば乳つまり「おっぱい」でありまして、もちろんのことお母さんであります。おっぱいは何事につけても人生の始まりでありまして、赤ん坊はおっぱいを求めてチュチュと言い、チチと言うのであります。やがて歯が生えかけて離乳食にかかりますと、これがマンマ、マンマになり、つまり万国共通のママに進化するのであります。あの銀座のクラブの方のは邪道でありまして関係ございません。

一方、お父さんの方は元々両唇破裂音のファであり、ファでありまして、これも人類共通で隣の中国ではパパ、英語ではファーザー、ドイツ語ではファーテー、スペイン語ではパードレ、子供たちはどこでもパパ、パパと言っていることは申すまでもございません。これが日本では何時からか声門摩擦音のハに転化したのであります。年配の方には前者、若い方には後者が多い

あります。いざれに致しましても「ちちはは」はお母さんお父さんなであります。中国から漢字が入って参りまして安易にこれを当てはめたために、男優先の儒教の伝統に従って父母つまりフボという逆の順序が日本語の中に座り込んでしまったのであります。誠に無責任な話と言わざるを得ません。

順序の逆転は夫婦の場合にもございまして、夫婦といえば男女の順になつておりますが、元々の日本語ではこれは「めおと」と申しまして、メは当然女でありオは男なのであります。従いまして、どこのご家庭でもお父さんよりお母さんの方が偉いのであります。本日ご参会の皆様のお宅でもさようであろうと存じますがいかがでありますようか。え、うちはそんなことはない？ はあさようで。（勝手にしろ）

私は結婚のはなむけに何時も申すのであります。夫婦は苦樂を共にするべきものと考えます。世中の夫婦を拝見致しますと、苦を共になさるけれども樂は共にならない、あるいはその逆、という例をよく見かけるのであります。年配の方には前者、若い方には後者が多い

— 66 —

ようであります。苦楽を共にしてこそ本当の愛情と言えるのではないでしようか。

ところで、愛の告白と申しますか、つまりそのプロポーズと申しますか、英語ではアイラブユーとか、ユーマリーーとか言うそうであります、本日の新婦新郎はどのようにされましたですか。え、まだしていない。横断歩道の信号が赤になつた時に言おうと思っていたら、赤になつた途端、みんなで渡れば恐くないで渡っちゃって、それで言いそびれた、今夜言うつもりだ？まあそれも良いでしよう。（勝手にしろ）

昔の日本ではどういう風に言ったのか。これはかの高名な国語学者金田一春彦先生の受け売りであります、「お前と苦労がしてみたい」と言ったのだそうであります。何とデリケートで奥深い日本語でありますか。お前というと、今では目下の者に言う、もしくは男が女に対して使う人称と思われているようですが、元々は相手に対する十分な敬愛の情を込めた表現であります。男女相互に使われたものであります。人称の格が時代の変化につれて上下する例は他にもございまして、僕と

いうのも元々は私は貴方のしもべだというへり下った言い方が今では平等な友達同士で使われますし、逆に貴様というのは文字どおり貴人に対して奉つた人称なのに、段々下落致しまして、「きさまあ、それでも日本人かあ」なんていうのが流行りまして、まあ嫌な時代でありますな。

さて、苦労というのもなかなか含蓄のある言葉であります、つまりこれこそ私が先程申しました苦楽のことなのであります、最近の若い方の中には、苦労なんてとんでもないわ、苦労するなら何のために結婚するのかわかりやしない、とおっしゃる向きが多いようで困ったことがあります。「お前と苦労がしてみたい」。こんなに濃やかな情感を秘めたプロポーズの言葉が他にありますか。これこそ「苦楽を共にする」意味であり、英語のアイラブユー等とは比較にならぬ高度な文化の遺産であります。

あの、何時もならここで拍手なのであります。はい、ありがとうございます。はい、はい、はい、鳴り止まぬ拍手、恐れ入ります。え、何、いいお話を？重ね重ね

恐縮です。はあ、もう止めてもいいお話をだ？　ああそうですか、なるほど。え、お後がつかえているから？　それはちっとも気が付きませんで、失礼を致しました。

算数の答えの出し方

亀井弘次

長野五輪の滑降コース設定にかかる長野五輪組織委員会（N A O C）の愚行は、世界に恥をさらした。

一般スキー選手の滑っている国有林地域を、オリンピック選手が滑ることを拒否した。自然環境保護と言う言葉で国際スキー連盟（F I S）と渡り合ったN A O Cの事務総長（前自治省事務次官）小林実氏の発言には、全く論理性が感じられない。

昨年末に連発された金融危機回避策について、橋本総理は事の成り行きについて国民の納得のいく説明をした

だろか。財政改革の旗印にこだわり、打つ手は後手ばかり。

山一・東食の問題でようやく景気浮揚策をうちだしたが、なぜ方向転換が遅れたのか。消費税一%引きあげで七兆円も吸いあげ、景気不振の町の声に耳を傾けず、財政改革の方向になぜ走ったのか。これ以外にも数多くの“なぜ”に答えようとしない。

クリントン大統領をはじめ欧米の首脳ならば、情勢の分析と新しい判断を、TVの前で堂々と語っているに違いない。

橋本総理は答えだけを、ぼんぼんと放り出しているだけだ。

これらの訳を考えているとき、深田祐介氏の著書『最新東洋事情』の中には、「日本とインドの算数の答えの出したたの違い」の話を思い出した。

インドのシリコンバレーと呼ばれるバンガロール市。南インドの九〇〇メートルの高地に位置している。この都市が世界の注目を浴び、コンピューターソフトのメッカ

となつてゐる背景に、インドにおける算数の教え方があると、深田氏は紹介している。

たとえば、半径一〇センチ、中心角七二度の扇形の面積を計算せよ、という問題が出たとする。

日本では、扇形の面積は、半径×半径×円周率×中心角+三六〇という公式を暗記させられているから、生徒は解答欄に一行の式と、六二一・八平方センチメートルという答を書く。

これが、橋本総理のやり方だ。

ところが、インドではこれでは丸が貰えない。少し長

くなるが、氏の説明を引用させて戴く。

インドでは、

『扇形は円の一部を切り取つたものであり、その面積を求めるには、まずその扇形のもとになる円の面積を求めなくてはならない』

と書きます。そして、

『半径一〇センチの扇形のもとになる円は半径一〇センチの円であるから、その面積は、半径×半径×円周率、

すなわち、 $10 \times 10 \times \pi \cdot 1 = 314$ である』と続きます。さらに、

『扇形のもとになる円の面積の関係は、中心角の大きさに比例する。円の中心角は三六〇度だから、たとえば、中心角が一八〇度の扇形は、中心角が円の一となら面積も二分の一になる。中心角が七二度であるこの場合は、

$$72 + 360 = 10 \cdot 1 \quad (\text{五分の一})$$

だから面積も五分の一。よって面積は、

$$314 \times 0.1 = 62.8$$

よって答えは六二一・八平方センチメートルである』と書いてやつと満点が貰えます。

日本では単なる計算問題として扱われている問題でも、インドでは、いちいち証明問題のようにロジックの流れを言葉で明記しながら、解答を導きださなければ、点数をもらえないのです。

『こういう教育をうけていると、理数的な論理に非常に強くなり、数学的センスには恵まれると思います』と現地在住のある夫人が話している。

以上で引用を終るが、この教育がコンピューター・ソフトのプログラミングに役立っているそうだ。さらに加えて、理屈好きな性質、ネイティブ・ランゲージが英語であることなどが、インドにシリコンバレーを築きつつある原点と言われる。

さて、結論をみちびく論理の流れを、日本の政治家や官僚は、国民の前に堂々と説明できないのは、今まで

の教育、あるいは試験の在り方が間違っていたのではないか。

真っ当な説明がなされていたら、言い換えれば、論理にかなつた、かつ正直な説明がなされていれば、役に立たない公共事業を延々と続ける愚行は避けられていただろう。

教育制度をかえて、このような人物の出現を待つのは、それこそ、日暮れ道遠しというものだろうか。

滅びゆく一つの文化

—中国の女文字の世界—

齊藤 勤

表意文字である漢字文化の中核、中国大陸の一隅に、女性だけが使用し、男性がほとんど知ることのない表音文字の世界がある。

一、女文字の伝わる地域

景勝の地として著名な桂林の東約百キロに位置する湖南省南端の江永県がその地域である。周囲を一千メートル級の山々に囲まれた盆地で、山地には瑶族が住み、平地には漢族、他に壮族、苗族など多民族が混住している。また周囲の山々は中国一級の自然保護区とされ、虎、狼、金絲猴など珍しい野性動物が生息している。

長期的なビジョンを掲げ、鉄の意志で国民に語りかけ、英國経済を見事に立ち直らせる基盤を作ったサッチャーさんのような政治家が、現れることを、日本の国民は切望しているのだ。

二、女文字が世に知られるまで

女文字関連の古い文献は一九三七年七月の「湖南省各县調査筆記上」で、ここに「花山廟で女たちが扇子を見ながら歌を歌う。その扇子に書かれた文字は細かい文字で、蒙古文字に似ている。全県の男性でこの文字を読めるものはいない」と記されている。

一九五〇年代、同県の文化担当の仕事をしていた周碩沂（チョウシキイ）が女文字の収集と整理研究を始めたが、五〇年代の反右派闘争、六〇年代から七〇年代に続く文化大革命により「妖字妖書」として批判され、調査も研究も中断させられ、同時に多くの貴重な資料も失われた。七九年に周碩沂は名誉を回復し、八一年に「江永文物誌」の中に「蚊文字」の一節を設け、女文字を初めて紹介した。

この年、武漢中南民族学院の宮哲平（コンジャピン）は、湖南省南部の民族調査の際、女文字のことを聞き、周碩沂を訪ねて共同研究をし、これらの調査結果を「中南民族学院学報」に発表した。これが同学院言語学専攻の呉譚林（ウータンリン）教授に渡り、同氏が北京の会

議に赴いた際、中国民族古文字研究会に報告し、初めて女文字の存在が中央に認知された。一九八四年のことである。

当時、華北師範大学の大学院生として古文字の研究をしていた趙麗明（チョーリミン）は、この論文に惹かれ、八六年から現地を訪れて調査を開始した。彼女の努力は九二年「中国女書集成」（清華大学出版）と実を結んだ。

三、女文字の姿

* 右上から下へ縦書きする

* 7文字または5文字で一句の歌を書き記すために使われる

* 字形は漢字（楷書）に由来すると思われるものが多いが、元の漢字の意味は表していない

* 字形だけを漢字から受け継いだ表音文字である
* 字種は約千字で異体字が多い

* 小さく細い字で書かれたものが美しいとされる

四、女文字が使われた地域の言語

この地域で使われている言語は、主に西南官話、土話、

美しい「女文字」の姿 ある「三朝書」より

七画 心 (心) sei³³

心 心 sei³³

八画 画 画

花 花 fu³³

九画 九 九

活 活 fuə³³

十画 十 十

的 的 kəw³¹

瑞語の三つである。西南官話は中国語の八大方言の一つである。土話は、方言を更に小さく分けたもので、女文字伝承者たちの話し言葉は江永土話であり、女文字が記録しているのは土話による歌や文章ということになる。

また土話だけを話す古老たちに、北京語は全く通じない。女文字は江永地方の土話の約四百の音節と、それぞれの声調を掛け合させた約千百くらいの、すべての音を表記することができる。

五、この地域の女性たちの特色

この地域の主たる産業は農業だが、豊かな水と温暖な気候に恵まれ、年に二度米がとれる他に薯、茶、白柚が特産物である。農作業に従事するのは、かつては男性だけであった。女性は漢民族の因習として纏足をしたため農作業は免れた。すなわち比較的豊かな農村で纏足の悪習が女文字発達に寄与したことになる。男性は外で働き、女性は家で「女紅（にゅほん＝織物、刺繡、縫い物、布鞋作り）に従事する」と役割がはっきりしていた。

またこの地域には、血縁のない女性たちが義理の姉妹として緊密な関係を結ぶ「結父姉妹」の風習があった。

一度契りを結んだ「姉妹」たちは、生涯深い関係を持ち続け、女文字で通信し、思いを伝え合った。この姉妹の一方が結婚するときは、三日ないし半月と共に暮らして別れを悲しみ「三朝書」を作った。

「三朝書」とは、嫁いで三日後に実家から届けられる食物、金などの贈り物の中に含まれる「結交姉妹」からの手製の冊子である。ここに書かれる内容は一定しており、前半で嫁いでゆく姉妹の円満な結婚生活と良い姑に恵まれることを祈り、後半で自己の苦しみや悩みを訴え、つらい人生を嘆くものが多い。

六、女文字の起源

女文字の起源に関しては全くわかっていない。現在のところ、漢字に由来し、その楷書の成立以後で、伝承等を考慮し、宋代末期ごろから形成され始め、明代末期から清代初期ごろには一応完成したのではないか、と思われる。

七、女文字の将来

中国の近代化に伴い、纏足はなくなり、初等教育制度も整い始めた。女性の間で女文字を習得する機会もなく

なった。現在、江永県の壮年以下の女性たちにとつては、全く知るところがなく、織物等の模様としての興味のみである。中央政府も教育システムに反する女文字の保存に関しては積極性を欠いている。
伝承者の高齢化を考えると、このユニークな文化は、二十一世紀前半には確実に消滅する運命にある。

いるところである。

これまでの国内外での人生を顧みて、人生とは、人と人との出会いが織り成す錦である。すばらしい、想い出多い人の出会いが多ければ多いほど人の一生は穏り多い人生ではないかとの思いを深くする。以下はこれまで私が出会い、私の人生を豊かにしてくださった人々のほんの一部の方々の忘れ得ぬ出会いの記である。

アフガニスタンのシャンサブ氏

ニューヨーク駐在時、仕事でワシントンに出張した。空港から乗ったタクシーの運転手が聴いている音楽が、中近東の調べに似ている。どこから来たのかと聞いた。アフガニスタンからだという。ニューデリー駐在時、アジア開銀プロジェクトで中国、ロシア国境のクンズ盆地方の灌漑用にK社のブルトーザーを売り込んだことを思い出した。その時の現地代理店がカブールのシャンサブ氏だった。知らないかと尋ねた。ところがどうだろう。「自分はその時のアフガニスタン農業灌漑省の局長だ。シャンサブはよく知っている」というではないか。当時、私がたいへんお世話をなった、駐アフガン松井佐七郎大

使も知っているという。更に驚いたことに、そのシャン・サブ氏はいまワシントンに住んでおり、アフガン共産政権に対する批判評論活動をアメリカの大学で活発に行っているという。

同氏に会う機会があれば渡してくれといって、名刺を預けた。一ヶ月ぐらいしてシャン・サブ氏からニューヨークに出張するのでせひ会いたいと電話がかかってきた。マンハッタンの日本料理店で、一別以来、十五年ぶりの感激の再会を果たした。カブールの旧友とニューヨークで会い、人生の不思議な縁と、思い出の数々を語り明かした幸せな一夜となつた。

小野田寛郎元陸軍少尉

リオデジャネイロにいたころ、親しくしていた朝日新聞中南米支局長、菊地育三氏から小野田寛郎ご夫妻を紹介された。その時の小野田さんの印象が強烈で、同氏の真摯な生き方に強い感銘を受けた。以来二十年間、人生の師としてご指導をいただいている。これまで一緒に、小野田さんを尊敬しているというパラグアイのストロエスナー大統領にも面談した。昨年は同氏の二十年ぶりの

ルパング島再訪に同行し、ラモス大統領を表敬する貴重な機会に恵まれた。

さらにニューヨークやカルガリーでも同氏の講演会やパーティーを開き、草の根の日米、日加親善に貢献いただいた。同氏は福島県塙町に平成の松下塾たる「小野田自然塾」を独立で設立され、余生を青少年の教育に注いでおられる。教師の端くれとして私は小野田さんの生き方に教えられることが多い。ブラジル以来の交友二十年を記念し、同氏から頂いた色紙の言葉「不撓不屈」を私は残された人生の座右の銘にしている。

スウェーデンのステバン・デディエル博士

サラリーマン時代に翻訳した「CIA流戦略情報叢書」(ダイヤモンド社)の著者、ハーバート・マイヤ氏に招待され、パリの「国際情報会議」で講演した。その席で出会ったスウェーデン・ルンド大学のデディエル博士に、同大学院で講演の機会をいただいた。また博士の生誕八十周年記念論文集にも寄稿させてもらった。先年東京で開いた「競合情報国際シンポジウム」では基調演説をお願いした。

ことし米寿を迎える博士の長寿の秘訣は、生涯勉強を続けることと、いつもガールフレンドを持っていることだという。私も博士の秘訣にあやかりたいものだ。

佐藤千寿氏

ニューデリーに赴任中、書画骨董、漢詩、隨筆、酒、グルメ通で有名な文化人経営者、千住金属の佐藤千寿社長が来訪された。社宅にお招きしたところ、室内を一瞥され、開口一番「本棚に本が少ない！若いときに読書し勉強しないと駄目だ」と一喝された。続けて「インドは古来、モヘンジ・ヨダロ、ハラッパ、ヘレニズム、ガンダーラなどの文化が華開いた、ヒンズー教、仏教、回教美術の宝庫だ。休日は、日本人同士のゴルフやマージャンは控え、インドにある五千年來の遺跡や博物館、骨董店を見て回れ。外國駐在中にしかできない現地の文化や歴史をしつかり勉強することだ」と諭された。

以来私はこの教えを守り、ゴルフもマージャンもやらない。そのかわり、インド、ブラジル、パナマ、カナダ、アメリカなど各駐在地で、暇をみつけては、博物館や美術館や骨董店を訪ね歩いた。おかげで我が家は外国の骨

董の家具や、絵画や彫刻でいっぱいだ。これらの品々に囲まれ、長い外国での生活や、そこで出会った多くの人々との不思議な縁を懐かしんでいる。

私は、唐の李商のことば「晩晴」を目指し、晴れやかな夕焼けの人生を送りたい。

ヘンリック・ヘーベ・ラーセン

—デンマークの高校三年生との交流覚え書き—

深尾 築助

プラチナブロンドの十八歳—序章に代えて

ヘンリックは、国際ロークリークラブがデンマークから日本に派遣した交換留学生である。人口五百人の町の高校から、一九九六年八月来日、翌年七月に帰国するまでの間、埼玉県宮代町、東京都羽村市、町田市、八王子市のホストファミリーにそれぞれ三ヶ月ずつ滞在し、都心の高校に通学した。学校の始業のベルを聞いてから家

を出ても、先生より早く教室に入れるようなところに住み、二両連結より長い電車を見たこともないヘンリックが、長時間電車を乗りついで通学した日本での学生生活を、いかに体験し、帰国後両親や友人にどのように伝えたのであろうか。

以下は、その一年間に亘る彼との付き合い、特に親代わりに起居を共にした三ヶ月間の心の交流の軌跡の記録であり、同時に彼が日本をどのように捉え、また筆者が彼自身と彼が育ったデンマークをどのていど理解できたか、についての覚え書きである。

日本刀と雪駄と割箸と

ヘンリックの日本についての第一印象は？ それがどのように変化し、その結果として帰国のお土産に何を選んだのか。彼は、生まれてはじめて見るあまりにも多い人々の群れ、二～三分おきに発着する超満員の山手線、新宿新都心の高層ビルや都庁舎の建築美、スピードは早いが運賃も異常に高い新幹線、東京ドームの興奮（デンマークには野球がない）等々、日本に来なければ解らない驚きに満ちた体験をした。なかでも、みんなが全く同

じ制服を着て、整然と登校する学友の姿には終生忘れ得ぬ威圧感を憶えたという。単に「文化の違い」などでは片付けられない、一步間違えば大きな誤解につながりかねない経験の連続であった、とも言う。彼の驚きは続く。米国に次ぐ世界の大國日本、平和で安全な日本、その中心である東京新都心の八公道に群をなす浮浪者、CDプレーヤーを盗んだ学友、財布を抜きとった掏摸、街中に氾濫する和製英語、一見アメリカナイズされはいるが英語で政治経済を論ずることができない学友たち（ヘンリックは英語・ドイツ語に堪能）、残された唯一のコミュニケーションの手段としての日本語での対話については、彼が日本語で話しかけても相手の日本語が聞きとれないと、「…もう一度と話し相手になってくれない」仲間、このような情況では、日本人になりきれ、と激励して送り出してくれた故国の友に合わず顔がない、と嘆く毎日であった。

帰国が近くなつた三月ごろから、彼の表情が明るくなつた。帰宅途中の電車で、運よく座席を確保したばかりに、心地よい眠りに誘われ、降車駅を乗り過ごしたこと

も再三ではなかった。日本人らしくなれた！と嬉しかった、という。学友と北海道のニセコにスキーに行つたこと、下谷神社の祭礼でお神輿を担いだこと、来日した両親と兄と一緒に京都・奈良に遊んだこと等々を契機として、急速に日本を身近に感じ、友達も出来た。日本滞在の総決算として、彼はお土産に木綿の浴衣と帯（母）、夏祭りのはっぴと雪駄（父）、歌舞伎にも登場するキセル（祖父）、上質の割箸と巻き寿司用海苔百人分（帰国後のパーティー用）を選んだ。テレビの暴れん坊将軍に魅せられて買い求めたかった日本刀は断念した。

スコール！ デンマークのこと

六本木にある唯一のデンマーク料理の店「カフェ・デイジー」と、デンマークビールのトップブランド「カルスペア」と「ツボー」を賞味した時、彼の目は輝いた。高校生の飲酒は法律で禁じられているが、彼の町の高校の隣にパブがあり、「学割あり」と書いてあるとウインクする。デンマークでのおしゃべりは、スコール！（乾杯）で始まりスコール！で終わる。国民一人当たりビール消費量は世界第4位（日本は第二十四位）、風邪を治

すために卵黄入りのビール（玉子酒）を飲み、アンデルセン誕生の地オデンセにも立派な地ビールの工場がある、など新知識を得た。極端な貧富の差がない平和な国デンマーク、その基礎となる老齢年金法・健康保険法・労働組合法（十九世紀末に成立）を享受しているデンマークも政治・経済的に諸制度の見直しを迫られているが、ヘンリックとの対話の中で最も印象的であった二つの話題を紹介しておこう。日本でも、最近デンマークへの投資誘致セミナーが頻繁に行われ、欧州の新しい物流拠点、製薬・バイオテクノロジー開発拠点、生物工学・生物医学・保険衛生教育・研究、医療機器産業の拠点としてのサイエンスパーク「メディコンバレー」が世界の注目を集めている。事実、一九九七年には電子産業が伝統的な農業と漁業の規模を上回った。もう一つの話題は、外国の企業誘致のメリットとして、デンマークの「非汚職指數」が世界第一位（トランスペアレンシー・インターナショナル社調べ）であること、その理由は、「強靭かつ正義感に満ちた国民性」にあり、第二次大戦中理不尽なドイツの占領下、徹底的なゲリラ・レジスタンス活動を

展開したことがその証拠である、という主張である。

相互に啓蒙する—おわりに代えて

昨年十一月、デンマーク王室御用達のジョージ・ジエンセン（英語読み）が銀座に進出した。ハムやベーコンの材料としてのデンマーク畜産豚肉の広告（婦人公論など）を見ることが多い。日本とデンマークの接点は増えている。

ヘンリックは、（一）麻薬の所持・服用、（二）飲酒・喫煙、（三）車の運転、（四）恋愛・性的行動、の禁止を定めた交換留学生規則を遵守し、日本を学び、デンマークを熱っぽく語つて日本を去った。さらに相互に啓蒙するための再会を誓つて。

『ソ連そしてロシア』

都甲 昌利

ソ連時代、一九六七年から約三年半、私はモスクワに勤務した。ブレジネフが共産党書記長でソ連が米国を敵にまわし世界覇権を争っていた時代だ。あれから三十年、そのソ連が崩壊し新しいロシアが誕生した。日本の新聞や雑誌にはよく「旧ソ連」という言葉が使われているが、これはおかしい。「旧ソ連」があるなら「新ソ連」がなくてはならない。ソ連の本当の意味が分かつてない。「ソ」は「ソヴィエト」の頭文字であることは誰でも知っているが、その本来の意味はと問うと答えられる人は少ない。それは「会議、助言、忠告、和合」といった意味である。そして、「ソヴィエト」には州ソヴィエト、地区ソヴィエト、町ソヴィエト、村ソヴィエトなどがあり、国家の政治及び行政の基礎なのだ。レーニンが一九一七年の十月革命の時、「すべての権力をソヴィエトへ」と

叫んだように権力機関である。「連」は言うまでもなく「連邦」の略であるが、ロシア語で「ソユース」と言いい、「同盟、組合、結社」の意味であるから、本来は「ソ同盟」が正しい。日本の共産党や左翼の人たちは當時「ソ同盟」を使用していた。「ソ」も「連」もその両方が無くなってしまったので、「旧ソ連」という言い方は間違いである。

ソ連時代は日本でもロシア語を学ぶ人たちが今より大勢いたような気がする。ソ連をもっと理解したいとか、学術文献を読みたいとか、ロシア文学を原書で読みたいという人たちに私も少なからず援助をした。あれから三十年経た現在はどうだろう。

昨年のある日、大学時代四年間一緒にロシア語を学んだ旧友から、「神田にあるニコライ堂のロシア語講座が廃止されそうなので、存続のための署名運動をしている。協力してほしい」との手紙を受け取った。ロシアに愛着のある者として、署名をして返事をしたが、ロシア語講座が廃止になったことを、数カ月して友人が知らせてきた。近年、大学でもロシア語を学習する学生が減少して

いるという。私が勉強した当時は、米ソ冷戦下でソ連に対する興味もあって、いわばロシア語ブームであったことを思うと隔世の感がある。七十年続いたソ連社会主義体制が崩壊してしまって、ロシアに対する関心は無くなってしまったのだろうか。最新の「岩波露和辞典」が必要になつたので近所の書店を数軒まわったが、売っていないかった。大きな書店でもロシア語学習参考書もたつたの数冊で目につくのは無数にある英語関係のものばかりであった。また、プーシキンからゴーリキーに至る十九世紀のロシア文学も今は流行らない。トルストイやドフトエフスキイの作品が日本人の知識層に与えた影響は大きいのに。それらは単なる小説というより、人類や世界の未来とか、宗教を超えた人間的幸福の創造とかいう大きな問題を我々に投げかけているからである。私もそれらの作品によって「魂」を動かされ、心の糧として生きてきた。戦前の財界人や官僚はよくロシア文学を愛読したという話を恩師から聞いたことがある。「復活」を「ボスクレセーニエ」とロシア語で言つて自慢したそうである。最近はどうなのだろうか。若し汚職で逮捕された高

級官僚や証券会社・銀行の経営者が「魂の文学」を愛読し、人間の生きる意義を考えていたら、あのような破廉恥な行動をとったかどうか。

日本人がロシアに関心をもたなくなつたのは、多分に日ロ間の政治、経済、貿易、観光などが現在冷えきつていることがあるが、多分に七十年間のソ連体制が我々に暗いイメージ、とくにスターリン時代、反対派への弾圧、独裁、肅清、強制労働、日本人捕虜、日ソ不可侵条約の破棄などで日本人がロシア嫌いになつてしまつたのではないか。多くの日本人はどうもソ連とロシアを同じに見ている節がある。ロシアの歴史は約千年で、その内のわずか七十年がすべての権力をソヴィエト共産党に集中した政治体制＝ソ連で、残りの九百三十年間はウラジーミル大公がギリシャ正教を国教として以来、イワン大帝の時代や、四百年も続いたロマノフ王朝時代であったのだ。そういうことを知れば、ロシアにもっと関心をもち愛着も増すのではないだろうか。

戦後五十年、米ソ対立の冷戦によって、日本政府はアメリカ陣営に組みこまれ、反ソ的体制をとつた後遺症が

深く日本の為政者の頭に刻みこまれてゐるようである。しかし、一九八九年、マルタ会談で冷戦の終止符が打たれ、ベルリンの壁崩壊、ソ連では共産党一党独裁が崩れ、大統領制の導入、社会主義経済体制から市場経済＝資本主義体制へ移行してしまつた。この事実は物凄いことなので、筆舌に尽くし難く、二十世紀における最大の歴史的事件であり、大袈裟に言えば全世界の人々の思想、規範、社会、政治、経済的価値観に重大なる影響を与えたといつても過言ではないと思う。未来が見通せないと、座標軸がなくなつたとかいうのは、元凶はロシアにあるのではなかろうか。この改革はレーニンの十月革命に匹敵する。いやそれより激しく大混乱をもたらすのは当然である。ゴルバチョフ、エリツィンが改革を始めてから、十一年も経つのにロシアは一向に落ち着きを見せない。指導層の汚職、インフレ、年金や賃金の未払い、貧富の格差の増大、凶悪化するマフィアの組織犯罪、ロシア軍の窮乏、核兵器の流失など暗く悲惨な話ばかりである。ロシアはどうなるのか。NATOの東欧諸国への拡大で、軍事的にはソ連は完全な敗北である。その代償としてロ

シアは西欧諸国の仲間入りをしたが、果たしてうまく國家の舵取りができるのか。そして日本は今そのロシアとどう付き合うかが問われている。

情報が共鳴する恐るしさ

多田修

結果だけを見ると不思議に見えることでも、そこまで至った経過を知ると「何だそんなことか」と拍子抜けすることも多い。大掛かりな舞台や音響効果も動員したマジックを見て感動した時、誰でも種明かしを知りたいと思う。半面、知らぬが花と思い直して家路につく。

昨年、大河ドラマになった毛利元就の故事に「三本の矢」の話がある。一本なら子供でも折れるが三本を束にすれば三倍の力が要るので簡単に折れない。だから教訓になつても、マジックとはだれも思はない。

しかし、宇宙を行つたもうひとりの毛利さんなら、三本で三倍以上の力が必要な現象に出合つたこともあるだろう。野球で使うロジン・バッグを矢にたたいて摩擦を持たせたら三倍の力では折れない。各々の矢が相互に干渉して三倍以上の力が要るからである。果たして毛利元就是そこまで知っていたらどうか。むしろこの故事はなかつたという説もある。余談になるが、断面積が三倍の太さの矢を折るにはもつと力が要る。

三本なら三倍というように、単純な加減算通りになるとき『重ね合わせ』の法則が成り立つといつてはいる。半面、摩擦で相互に干渉があるときは『重ね合わせ』は成り立っていないので、どうしてかなと不思議に感じることが多い。ここから先、複雑系の科学の領域に入る。

カオスという言葉を聞いた方も多いだろう。これも『重ね合わせ』が成り立たない領域の話である。したがって単純な加減算で済まないから、何が起るか予断を許さない。例えば「ふるまい」が分数で表される場合、分母がゼロになったとき無限遠点に跳ぶ。このように人を驚かせるような「ふるまい」になる場合をカオスといつ

ている。また、その付近をカオスの縁という。

もつとも、学者にいわせれば本にたとえると、「重ね合わせ」が成り立つ領域は第一章に過ぎないという。残りすべての章は加減算では済まない複雑な部分に入るらしい。

そうだとすれば、要素単位に分解して、それぞれの「ふるまい」を究明しても、全体の「ふるまい」を知ろうとする段階で、「重ね合わせ」が効くのは第一章だけで、第一章以下の理解は先送りせざるを得ないことになる。

『重ね合わせ』の法則は要素相互の干渉によって成り立たなくなつたが、この『反復』の「ふるまい」も、原因と結果の干渉によってはじめて生じたものである。干渉という「ふるまい」は物事を分かり難くする犯人として警戒を要する。

複雑系の科学の領域に入るには幾つかの境界線がある。いずれの境界線も越えると常識に反するようなことが起こる。

もう一つの例を挙げる。原因があつてはじめて結果が出るのが当たり前であるが、その結果が一部原因に影響を与えると、結果も変わってくる。その結果がまた原因に影響を与えると……と『反復』を繰り返し、予想もない結果が現れる。また、その結果から逆に原因を探ることも難しい。

インターネットを媒体としたコンピューターと通信の技術は世界を一望できるメガネになった。どの株式市場

普通、反復速度は速いので、途中の経過はわからない。さらに理解を妨げるのは、途中の結果が原因の一部になっているため、何が原因で、何が結果かすら後で判別しにくい点である。

もどきの債権市場も世界の人が注視している。当然、各国の市場が相互干渉を起こし、今までにない複雑な「ふるまい」を見せる恐れもある。

識者が国際化ではない、ボーダレス化だというのもあながち理由のことではない。そこでは各国の權威筋の意図が通用しない巨大な自己組織化が起こっている。

一方、経済学の中で、現実の経済の「ふるまい」と矛盾するといわれてきた無限合理性の仮定は、ボーダレス化によって復権しそうに見える。

このようにして、情報の共有に伴い干渉ウイルスが伝染しやすくなつて、だれも望まなかつた情報の共鳴などで暴走し、世界経済が瀕死の重症にならなければよいのだが。

最近の金融システムの不安について、デリバティブが云々されているが、それにはコンピューターの進歩と理工系の人々の金融界への進出がかかわっているといわれる。『重ね合わせ』の成立しない範囲を非線形といったり、「反復」をフィードバックというのも社会科学と自然科学が干渉を生じたことの兆しだろう。

そうならば「何をするか」の企画段階で、モラル・ハザードも含めて議論すべき時が来たようだ。市場経済のゴルフ場でもフェアプレーの精神が大事で、エチケット委員会の活動が重要になった。

遮断された玉音放送

水 谷 汎

一九四五年八月、原爆が二発投下され、大日本帝国の断末魔が遂に迫ってきた、と思った。当時、私は南方第一陸軍病院（在シンガポール）の經理室に、主計として勤務していた。政府は何を愚図愚図しているのか！ 一日も早く降伏しないと三発目が投下されるぞ、と怒りと苛立ちの日々であつたことを忘れない。

十四日に憲兵が来て、ラジオを押収していった。何のためにか分からなかつたが、玉音放送を聞かせないためで

あつた。

病院は患者を抱えているので日曜日を終日休むわけにいかない。日曜・水曜の両日午後を半休二回にして一日の休日に振り替えていた。十五日は水曜日で、恒例の半休となり、経理室の全員は退勤した。だが、私はただ一人居残って、来たるべき敗戦降伏後の事態を色々と想定して考え込んでいた。すると、突然電話が鳴りだした。休務なのに何事か、と受話器を取ると「非常戦備」の下令であった。

戦備は第一→第二→第三→非常の順序で下令されるべきなのに、唐突に非常戦備とは全く異常である。休日は取り消され、勤務員は慌ただしく出勤してきた。みんな怪訝な顔をしている。諸般の情勢から、敗戦降伏だと思つたのは私一人ではなかつたであろう。この年の新年会で、年配の応召兵が酒の上で「今度の戦争、どっちが勝つたかはっきりしているやないか!」と声高に語っていたのが耳に残っている。

非常戦備下令について、市内に反乱でも起きたのか、と若い兵が質問してきたが、私は胸中を明かし得ず、た

だ否定して黙然としていた。

午後二時に将校集合があり、南方軍総司令官の訓電が伝達された。その要旨は「本日正午内地から国策に関する重要な放送があるが、諸官は動搖することなく職務に精励せよ。ただしこの訓電をいかに解釈するかは諸官の自由なるも口外すべからず」であった。(傍線は筆者)

すでに午後二時を経過している上に、ラジオを押収しておいて、重要放送とか口外すべからずとか、全く人を愚弄した話だ。その夜、同僚たちと情況について論議したが、共通の判断は「敗戦」であった。日本は神国、必勝不敗を信じ込んでいる一部の連中に、敗戦をどのようにして知らせるのか、処置を誤ると混乱を招く、と危惧した。

夜半、数発の銃声が聞こえた。ゲリラの夜襲か、と怯え、流れ弾に当たらぬようにベッドから下りて床の上で仮眠した。早晩になり、前夜の銃声は近くのインド独立軍兵舎での仲間割れの撃ち合いであつたことが分かり、一安心した。

総司令部に出頭した院長が正午ごろ帰ってきて、當庭

に整列した勤務員に詔書を読み聞かせたので、前日の、聞かされなかつた放送の内容がよく分かつた。これで戦争は終わつた！死なずすんだという喜悦と共に、祖国は米国の属国となるのか、という暗い気持ちが交錯して、複雑な胸中であつた。

病院ではこの詔書に反抗する者は一人もいなかつたが、その夜は酒をあおつて自棄になる者や、殺す気はないもののドスを持って上官を追い回す者が出るという騒ぎがあつた。翌朝、院長に呼び付けられて「きみが酒を配給し過ぎたので騒ぎが起きたのだ」と戒告されたが、「酒の配給は主計の権限だが、どれだけ飲ませるかは内務班の責任だ」と強く抗弁した。ここで反抗の態度を示したとしても、死地に飛ばされることは、今やあり得ないと考えていたからである。（一九九七・一一・八記）

『製造業とリサイクル事業』

織田 純一郎

昨今、何でもリサイクルが盛んである。環境資源保護という観点からは大変結構であり、今後もますます重視してゆかねばならないことは言うまでもない。しかし、ここにリサイクル事業を実施するについて、その技術的解決の問題を別として大きな壁となっているものがある。それは品質とコストである。製造業では大なり小なり必ずこの問題がついて回る。もちろん、一口にリサイクルといっても多種多様のものがあり、更にリサイクルの中身にも極めて多くの態様があつて、簡単な言葉でそれらの課題をズバリ言うことは難しい。

一般にリサイクルといふと、我々は日常生活に密着した紙とか缶類、日用品等を思い浮かべ勝ちであるが、今や製造に係わる物のほとんどがその対象となつてゐる。ここでは、いわゆるリサイクルショップなどで扱つてい

る日用品的なものは除いて考えるものとする。

また、現状、対象となっているということは、その要請があるということにも繋がる訳であるが、実際にリサイクルされているのは、全体的にはまだ一部分に過ぎない。言い換えるれば、これは産業廃棄物問題に直結する話にもなる。

大体、ユーザー企業がリサイクル製品を要求するケースとしては、①使用済みの製品の処分に困っているケース（手間、経済的理由）②もっと安く製品を購入したいケースがあるが、いずれも製造側にはコスト的にかなりの負担が課される。②のように現状と同一仕様製品を要求するケースでは、品質面でも基本的には低下することは許されないものとなる。また、品質面で多少の低下が許されるとしても、リサイクルという理由からそれなりの品質のバラツキはいかんともしがたい。

日本では一般に品質について厳格な管理要請があり、ユーザーが製造者に対し製品の不良率を低く抑えさせることで企業間競争をあおってきた。しかし、最近の規制緩和やリサイクル化への要請などで品質管理についての

考え方も一部の分野では二分化しつつあるとも言える。ただ、公共がらみの仕様については日本のお役所感覚がハバをきかせている関係上、運用方法も極めて硬い感じがする。規制緩和の推進役も出所は同じのはずであるが、実際の規格運用の話になるとガチガチになるのが日本の感覚であるという感じがしてならない。

このように、リサイクル製品についても品質管理その他諸々の厳しい管理コストが追加される結果、最終製造コストはどうしても高くなる。

もともと、製造に関してリサイクルするという事は、新規製品に比べても安くはならないのである。製品の回収、選別、粉碎、洗浄、乾燥などの工程が入るのが通常だからである。当然、材料的にも古いものを使う（場合によっては新規材料を混入する場合があるが）ことから製造管理には余計に神経を使うことになる。不純物が混入するケースも増えることから、製造にあたって設備の損傷も早い。加えて、リサイクル事業は作業環境が劣悪な場合が多い。最近ではかなり良くなりつつあるが、リサイクル事業はこうした悪条件の中で発展してきた経緯

を知る必要がある。

このような背景下において、リサイクル事業は、製造業に関する限り、資金的助成を受けているものを除くと採算性は一般に悪いものが多い。

一方、近年の国際化により海外のリサイクル事業の話も結構あるが、前述の日本の感覚とのギャップが原因で相互乗り入れがうまくいかないケースも多い。

規制緩和により、JISにも海外規格の翻訳JISができたり、あるいは現行のJISの中に海外規格が採用されたりしているケースもあり、今後の動向が興味深いが、前述のごとく運用面をどうするかが課題になろう。

日本的产品管理の考え方も変わってゆかざるを得ないだろう。もちろん、最近ではかなり定着した感のあるIS 09000シリーズ（品質管理システム）の取得も国際的に重要であるが、必要かどうかは対象製品によって判断すべきである。余計な管理コストはかけるべきでないからである。

リサイクル事業の位置付けも、現状では製造者がほぼ一方的に諸々のリスクを背負っていることが多いが、今

後はもっとユーザー企業も受益者の立場から積極的に一体となって取り組んでゆくことが特に重要であり、それがリサイクル事業の発展に繋がってゆくと感じている。

Eメール仲間

今 村 亮

— Eメール通信

企業OBベンクラブにEメール会員制度の準備室が設置されるとの連絡が届いた。地方会員にとって何よりも嬉しい朗報である。Eメール通信は私の場合、ライフラインとも言えるほど、切実な存在である。米国に三十年近く生活した私は退職後、家内とともに日本に帰ってきたが、子供たち二人はそのまま残った。Eメールは、この子供たちとの交信に絶対欠かせない。Eメールのおかげで、太平洋をへだてても、毎日隣に住んでいるよ

うな安堵感がある。家内は文字だけでは心許ないようで、月に一度はボイスメールで確かめようとする。私も緊急時は、電話も使うが、こみいいた話は、先にEメールしておいて、結果だけを電話確認する。息子嫁、娘婿ともにアメリカ人なので、いきおい言葉は英語になる。孫娘は八歳、小学校二年生で、家ではMacを使って絵を書いたり、ゲームに夢中である。そのうち、Eメールもよこすようになるだろう。日本語は片言なので、英語になってしまふ。

『悠遊』第三号「夢を語ろう」の中で、Eメールとインターネットにかけたお正月の夢を書いてから二年経過した。目標の一つ、ホームページは昨年の十月からやつとネットにのせることができた。カラーも、動画もない地味なものである。結構、反響があつて、驚いている。Eメールで長々と自己紹介するよりはホームページで見て下さいというだけで足りるので重宝している。今年は子供たちにも安いデジカメを買ってもらつて、フェイス・ツー・フェイスのオンラインチャットをぜひたち上げたい。またホームページもカラーフルに再構築したい。

ベンクラブでも第一段階で、定期的なオンラインチャットを計画されることを期待している。以下私のEメール仲間をご紹介したい。

二 Eメール仲間

米国を離れる寸前、サンディエゴ・シニア・コンピューター・グループの存在を知り入会した。年会費は、夫婦で三十ドル。帰國後も不在会員ながら例会通知がEメールで届く。私も渡米時には極力顔を出す。交信の相手に初めて逢うこともある。メンバーの中にNOというアドレスがあり、面白がつてEメールしたところ、Nancy Obrienというれっきとした女性で家内ともども家庭訪問させてもらつた。コンピューターの前に座ると、コンピューターが小さく見える堂々たる体格のおばさんで圧倒されてしまった。

この会にカール・アマトニーカという長老がいる。彼は、今でもIEEE（電子技術者協会）に属するが退職後、東海岸からサンディエゴに移ってきた。彼は不定期だが、適当量のニュースがたまると、E-ZINE（E・マガジン）をEメールで流す。名付けてシニアEメール

ル・インター・アクティブ、略称SINTである。希望者には、無料で送ってくれる。内容は新聞雑誌からの小説要約が半分、あと半分はコンピューター活用のヒント、読者の投稿からなる。新聞雑誌は目の悪い奥さんのため毎朝読んであげているそうで、そのバイブルダクトと笑っていたが並大抵のことではできないと感心した。そのころの読者が二百五十人と聞いたが、いまは、もっと増えているだろう。広告掲載して広告料をとったらと言うと、そんな考えは毛頭ないと一喝された。昨年末にSINT第四十号が届いた。

広告が主でサービスはつけ足しのインターネット・メディアにあってSINTは、健闘する「シニア」の傑作である。精いっぱいの声援を送っている。

三 サードエージ

「ファースト・エージで成人した。セカンド・エージで職業につき、家族を養った。いま、サードエージを迎え、はじめて自分を見いだした。いまこそ継続教育と人生の探索と自己の創造の絶好機である。まだまだ体力もあり資金もある。何をすべきかの分別もある。新しい交際を

発展させると同時に、家族、友人ととの接触を大いに楽しみ、心の人生を味わおう。余力あれば経験と専門知識を世間に還元しよう」（サード・エージ電子ニュース・ホームページより）

米国シニアネット活動は最盛期を迎えてる。ケン・ディクトワルドの名著「エージ・ウェーブ」が出たのが一九八八年。シニアーパワーはインターネットを得て退職生活で老けこむどころか若さを取り戻し精力旺盛である。昨年にはサーチエンジンで有名なLYCOSからシニアネット・オフィシアル・ガイドが出た。

日本でもニフティサーブやPC・VANの熟年ユーヤー主導のメロー・ソサイアティ・フォーラムができ、新会員のためのセミナー、教室、ふれあいトークもさかんになつた。東京以外でも各地に同好会結成の動きがある。最近、京都のシニアークラブがカナダ・バンクーバーの日系人グループで構成する茶会ネットと友好関係を結び、お互いのホームページをリンクし合つてゐるのを見た。こういう形で、将来は日系人の多いブラジルや、ハワイ、ロサンゼルスなどとも連携していくだろう。ペンクラブ

のインターネット通信が成功したら、次はいよいよ本来のインターネットに向かい、世界のシニアに仲間入りをしましょう。

Eメールを受け取った朝などは、その日一日が楽しい。相手も同じだと思う。この気持ちさえあれば、タッチペース交信でも結構長続きすると確信している。

これが当時、世紀のギャンブラーとか商魂たくましい妖怪と、とかくの噂の渦中にあつたイラン石油輸入『日章丸事件』の張本人、出光佐三の言い分であった。
ここで、日章丸事件について触れておこう。昭和二十八年、わが国威は低迷のころ。

イランは永年にわたりその石油利権を英國のアングロ・イランカンパニー（A・I）社におさえられていた。第二次世界大戦後の民族主義の高まりのなかで、モサデクを首相とするイラン議会は利権奪回をはかり石油国有化を宣言した。

これが英・イ紛争の始まりである。英國はイランを経

済封鎖したり、イラン石油を買い取る者は「盜品故買」

「わが石油市場を牛耳っている國際カルテルに風穴を開けて産業の燃料コストを引き下げ、輸出競争力を強めて

インスピュードにきた新聞記者は鋭い語氣に圧倒された。「わが石油市場を牛耳っている國際カルテルに風穴を開けて産業の燃料コストを引き下げ、輸出競争力を強めて

イランは世界中に石油の販売先を求めていた。日本でも国際石油カルテル（七大石油会社）に全く染まっていない大手は出光だけ。あらゆるツテを辿ってイランから呼びかけはあったが、出光佐三は動こうとしなかった。

日英の外交・貿易面への顧慮からだった。しかし他方では、国際政治経済の動向をひそかに、周到に調査し続けていた。作戦本部長兼前線指揮官は、佐三社長の実弟・出光計助専務である。

米国はそれまでの模様眺め作戦を変更して、米英蘭系の国際合弁会社をつくりイラン石油を一括手中に收めようとした。しかも、国際司法裁判所は英國の提訴を却下した。この二点は、イランの石油国有化が世界に認められた証左である。ここにおよんで出光佐三は、英國ならびに国際石油カルテルからいかなる威嚇や妨害がなされようとも輸入を敢行しようと決断した。時の国威は低くとも、彼は高い矜持を秘めていた。

事実、英國大使館・外務通産両省・銀行筋などからの難題・トラブルは続発した。イラン石油輸入用の外貨割当がなされず、信用状（L/C）開設もままならない。

出光佐三は常にみずから苦境の陣頭に立つて、それらを勝ち取った。A・I社に提訴された東京・横浜両地裁法廷においても所信を堂々と述べて勝訴に導き、関係者の士気を鼓舞した。

「徳は孤ならず」。当時の対英関係上、表立つことはできなかつたが、石橋湛山、一万田尚登、奥村勝蔵外務次官、東京ならびに東海両銀行首脳をはじめとして天谷直弘通産省為替局企画課員ら、大国の横暴に憤りつつ将来の活路を模索しようとする一担当者にいたるまで、大勢の方々の陰ながらの激励と協力による成功でもあつた。

米国西海岸で出光の給油所を數カ所やつてみろとのご下命を受けた。全く採算があわないことを口実に、駆け出しのガソリン・給油所専任者は不遜にも異論を申し上げた。

「ソロバンのことを言つているのじやないよ。ポンスケ課長！ やれ」。

後日、出先の責任者として大きな判断に迷う都度、私は心中ひそかに出光佐三の教えを仰いだ。答えはすぐ出

た。その教え、決断の根底には常に、国際信義、日本の進路、業界のあるべき姿、商人道、消費者本位、人間尊重・青年の育成などについての信念が貫かれていた。

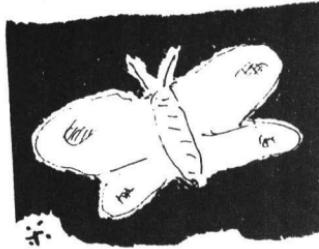
一九八一年三月七日逝去、享年九十七歳。

昭和天皇より『出光佐三逝く 国のためひとよつらぬき尽くしたるきみまた去りぬ さびしと思う』との御製を賜った。誠に恐懼、感激の極みである。

四十年にわたり出光佐三の薰陶に浴したことをボンスケは誇りに思うとともに、いまだにその威厳におひえ、温顔を懐かしく想い浮かべている。

戦後の機械の輸出は、どの商社も繊維機械の輸出で始まり、日本の産業構造の変遷と共に造船、建設機械、自動車、工作機械、半導体と推移したが、その結果が日・米貿易摩擦である。

私は、繊維機械の輸出に携わり、一九七二年十二月、印パ戦争の折、日本航空の救援機によってパキスタンのカラチから帰国したが、それ以来、駐在はお断わりし続け、七四年から七九年にかけてソ連（ロシア）東欧圏の出張に明け暮れた。その間、駐在の話や噂が絶えなかつたが、八一年十一月末のある日、上司から「キンシャサ駐在はどうだ」と話があり、そろそろ年貢の納めどきかと観念した。その時の私のキンシャサに関する知識は



キンシャサの一期一会

松浦 武弘

* コバルト・銅・コンゴ河の鱈…
* ベルギーの植民地・レオポルド二世…

* 槍を持ち、豹の毛皮を巻いた土人の門番……

* 鉄道プロジェクト課の橋のプロジェクト

といったくらいで、貧弱なものだった。

会社では駐在員研修を行う。最後に行われるのが駐在員給与の説明で、これが全員の感心事である。当時の海外給与で一番高い地域が「キンシャサ」「サンダカン」であったと記憶している。人の行きたがらないところの給与は高い。だから「キンシャサに決まつたよ」と言うと、先輩、同輩、部下の全員から、氣の毒そうな顔つきで「頑張って来てください」と言われたことが今でも鮮明に思い出される。

私は八一年三月から八四年五月まで二年余り単身で駐

在した。たまたま伊藤忠が「マタデイ橋」プロジェクトの幹事商社であつたこともあり、大使公邸では副幹事商社である三井、三菱の上席に座る珍しい立場であつたこともあり、苦労もあつたが、今になってみれば、概ね楽しい駐在であった。

この二年余りのキンシャサ生活では、色々な人との出会いがあった。それも「マタデイ橋」を抜きにしては考

えられない。三井の杉田和夫、三菱の上田直春の両氏とは、同年齢ということもあり、特に親しかった。

特命全権大使として小宅庸夫氏が、四十九歳の若さで八三年一月に着任され「マタデイ橋」プロジェクトを積極的に支援された。大使の父親が旧国鉄OBの技術者で、当時、東京大学で「トンネル工学」の講師をされていた。小宅大使は、在任三年で離任されたが、外交官としては珍しく積極的に動き、はつきりとは非を言われる人であり、各国大使（ベルギー、米、英、ドイツ、フランス、カナダ等々）の間でも評価の高い方であつた。大使として在任中、以下のようなセレモニーを立派に取り仕切られた。

▽マタデイ橋竣工式

▽天皇・皇后両陛下（皇太子時代）のザイール訪問

（一九八四年）

▽経団連ミッショングループ長（三井重工金森会長）

▽コンタクト・ミッション（キンシャサ市街地鉄道

電化プロジェクト）

八一年一月から二年間、マタデイ現場指揮官として駐

在し、その後も八三年の竣工式でモブツ大統領臨席の式典一切を取り仕切った溝畠靖雄氏は、武骨な土木屋で、大学の後輩だったが、現在はJR東日本都市開発専務として華麗な転進を遂げ、貸しビル、ホテル、レストラン、カラオケ店、スーパー・マーケット等々の総指揮をとっている。

八二年一月から二年間、本工事副隊長として駐在、得意のフランス語でザイール側関係者との交渉を一手に引き受けた宮本征夫氏（東大土木・大学院卒）は土木屋とは思えぬ几帳面な人で、他人以上に自分に厳しかった。私との初対面は着任日の夜、私の前任者が旧国鉄関係者の主だった人たちを所長宅に呼び、所長交替ペーティーを準備してくれたときのことだ、彼の第一印象は、黙って酒を飲む陰気な酒豪という感じだった。

彼が帰国する数日前、私は大送別会を催した。所長宅のサロンに、かなり大きなステージがあり、そこに立て別れの挨拶をする彼が「キンシャサで松浦氏と付き合つてから、陰気な自分がいくらか明らかになつた」と言わされたことが今でも印象に残っている。

施工業者連合の総責任者で、業者を纏め着工から竣工までの総指揮を執られたのが七九年一月から八三年六月まで四年半駐在された石川島播磨重工業の玉井清一氏で、常に礼儀正しい紳士であった。大酒豪で崩れる事はなかったが、数回愚痴を聞いた記憶がある。毎年、建国記念日の二月十一日にキンシャサ会が開催される。いつも盛況を極めており、これからも相当の期間存続すると思われる。その最大の理由は、マタディ橋プロジェクトにある。契約前、契約、施工、竣工、アフターサービスまで、膨大な数の人々が関与しているので、会に出席すれば、かなりの数の知人に会えるからだと思う。加えて皇太子時代の天皇・皇后両陛下がザイールを訪問され、当時の駐在員は大使公邸で、お二人と言葉を交わす榮誉に浴したことも大きな理由ではなかろうか。

この日、私も前日本人会会長として三十分ほど親しくお話をする機会に恵まれた。プリンス・ライトのチーフペーパーが印パ戦争の折のペーパーであったことが分かり、ザイール・キンシャサの地で奇しき邂逅を喜び合つた。

世間は狭い。縁は異なるもの味なもの、という。一期一会。今後とも人との出会いを大切にしたいと、痛感する次第である。

ベトナム戦争後しばらくのアメリカ社会は「ミーアイズム（自分主義）の時代」と呼ばれたが、村上氏は日本でも七〇年代後半からみられたミーアイズムの代表的な作家とみられ、その作風は、現実と距離をおいて物語を書くことに特長がある、いわばデタッチメント（無関心）派とみられている。

村上春樹著
『アンダーグラウンド』

櫻井清治

平成九年間に読んだ本で、専門書以外の中で最も心に残つたものを一冊挙げるとすれば村上春樹著「アンダーグラウンド」である。

この本を、七百ページを超す大冊ということからくる氣の重さを感じながら読み出しが、村上氏が従来の作風と変わって、地下鉄サリン事件という圧倒的な現実について、作家は何をなすべきかを示したことと、その内容について、大きな驚きと多大の感銘を受けながら一気に読み終えた。

私は様々な外部の場所を体験し、腰を据えて、そこで日本語で物語を書くという作業を試してきたわけだ」と書き、さらに「さすらうながら自分を摸索していく時期は終わりかけている、そろそろ日本に帰ろうと思い、日本

に戻り、小説とは違うかたちで、日本という国についてより深く知るためのまとった仕事をすることにより、新しい自分のあり方を見つけることが出来るのではないかと思った」と述べている。

村上氏は、一九九五年三月に日本に一時帰国していたが、その時に地下鉄サリン事件が起きた。氏は講談社より持ち込まれたこの事件についての企画が万一、本の構成に関する双方意見の相違により、講談社から断られることがあっても、何らかの形で実現しようとの固い決意をもつたと、別の場面で述べている。

この本は、公表されることのなかった二千数百人ともいわれる被害者より、十代から六十代にわたる六十二人の被害者をえらび出し、一年にわたって各人二~四時間の直接インタビューを行い、たいへんな作業と苦労を重ねた上で、六十人の被害者の証言をまとめたものである。著者である村上氏は表面に出ることなく、その日事件のあった地下鉄にたまたま出合わせた被害者のそれまでの人生、その日の実体験の詳細、それからの心身と環境の変化などが克明に述べられている。

当時多くのマスコミにより報道され論評された膨大なオウム関連文書のなかで、ほとんど取り上げられることのなかった被害者自身を主役とすることにより、いまの日本人が抱える多くの問題が浮き彫りにされている。長い間海外で暮らしたことと、その作風から、日本という風土より意識的に離れていると思われていた村上氏が、現実とは何か、日本とは何かを探求したものが「アンダーグラウンド」であると思われるが、数々のベストセラーを出した村上氏の作風が従来のデタッチメント（無関心）よりコミットメント（関心）へと、その変貌を示すものとなるであろうかという意味でも、注目すべき作品である。

この本に語られた被害にあつた方々の証言より、多くのことを感じた。

第一は、抽象的な論理や思考ではなく、現実に命の危機を肌に感じた体験がそのまま語られるのは強い迫力があり、単なる体験談としてうけるべきではないということ。第二に無意識的に選ばれた日本人の標準的な各層の人たちの日常の考え方がそのまま出ており、日本人一般

の生き方をよく示していること。次に、官の対応のまさ
さである。緊急のときに個人個人は適切に対応している
のに、官の対応はきわめてまだるっこい。第四には日本
人の市民倫理、特に職業倫理である。仕事を大切にし、
相当の責任感をもつていることが伝わってくる。次に事
件に遭うことによる被害者の心の変わり方である。命の大
事さと生きることをもう一度考えたいとの思い
(本人と家族)、一度死んだと思うフッ切れ、会社人間への
反省など。

× ×

× ×

最近は出版不況だという。読者の財布のひもが固くなっ
ていること、忙しい現代人には読書にまわす時間の余裕
がないこと、活字離れが進んでいるなどの理由からとい
う。それにもかかわらず新刊書の数はふえており、一
九九六年には年間約六万三千点、昨年はこれを超える勢
いであるという(日経新聞)。これらの中からどの本を選んで読むかを決めるのは容易なことではない。

読書の目的を大別すると、仕事や研究のため、一般教
養のため、趣味・娯楽のため、に分けられるといつてよ

いかと思う。いずれにしても読書の習慣でよいことは、
活字を通じて自分のイメージや想像力を膨らます訓練が
出来ることであろう。情報通信の発達によりパソコンの
データベースや、インターネットで広範な情報・知識の
収集は可能かつ容易になった。これはこれで大事なこと
であるが、このようにして引き出したデータからは、活
字を通じて得られるような創造力を生む点では足りない
面があるよう気がする。村上春樹氏が今後「アンダーア
グラウンド」で示したようなノンフィクションの作品と
共に「レキシントンの幽霊」(一九九六年)のような
「さめない夢なのかさめてからの夢なのか」と思わせる
ような作品を今後も発表されることを期待するものであ
る。



愛・恋の俳句拾集

藤井長治

私は、著名な俳人の句集をたくさん読んでいるわけではないし、俳文、俳壇史、俳句評論などを繙いたこともあまりない。若いときに、芭蕉や子規にひかれて、俳句に多少馴染んだ覚えはあるが、この程度の拙い俳句歴では、妻や恋人をうたった句などを、拾える筈がないと思っていた。ところが最近、蕪村や漱石の句などをひろい読みする機会があり、愛や恋の俳句にひきつけられ、拾つてみようという気になった。森澄雄の句は、あとで述べる理由で、最近の句集二、三冊は読んできた。

今から一百年あまりまえ、巨匠寺謝蕪村は愛人をうたつて、ひときわ抽んでた句を残している。

妹が垣根三味線草の花咲きぬ

二人してむすべは濁る清水かな

恋さまざま願の糸も白きより

春風や同車の君がさざめ言
女俱して内裏拝まん臘月

筋かひにふとん敷きたり宵の春

誰が為の低き枕ぞ春の暮

さすがに蕪村、これらの句は徳川中期の作とは思われないような、ロマンチックな描写に満ち、近代詩の香りがただよう。

明治二十年代から大正五年に没するまでに、二、四〇〇句あまりをよんだといわれる漱石にもすべてがたい恋の句があった。

春雨や身をすりよせて一つ傘

罪もうれし一人にかかる臘月

思ひきや花にやせたる御姿

影法師月にならんで静かなり

逢ふ恋の打たでやみけり小夜砧

行秋や博多の帶の解け易き

降る雪よ今宵ばかりは積れかし

漱石のこれらの句は、蕪村の近代性にくらべ、やや観

二十世紀にはいり、妻へのはげしい欲情とふかい愛情を、闊達にうたいあげたのは、中村草田男であろう。

妻抱かな春星の砂利踏みて帰る

妻一夕夜あらず二夕夜の天の川

虹に謝す妻よりほかに女知らず

これらの直截的な妻への讃歌は、草田男の名のあるかぎり、長く後世にのこるであろう。

森澄雄には、若いころ妻をうたつた
除夜の妻白鳥のごと湯浴みをり

の名句があるが、妻への愛情は、急逝した彼女への一連の悼句のなかに、蕩々とながれている。自分が旅にでた直後、留守居の妻がとつじよ亡くなり、死目にも会えなかつた。この世の無常と悲哀と無念さのないまじつた、蕭条たる心のうちに、妻への思慕と愛情をうたいあげた。

たまたま私の妻も、森夫人の一年ほど前、おなじように、脳梗塞であつて亡くなつたこともあり、同類のよしみで森澄雄の身につまされ、句に引きつけられた。澄雄じしん、悼句を一、三百も作ったと言つてゐるが、これらの句は、人生のひとつつの極みを内に秘めて

いるように思う。ここでは、心惹かれる十句あまりを掲げる。

木の実のごとき臍もちき死なしめき

白地着てつくづく妻に遣されし

先立ちし妻を叱るや墓参

うしろより声あるごとし花野ゆく

妻いまもうつつのこゑを檀（まゆみ）の実

芒原妻は先の世歩みをり

ひろやかに身一つがをり夜の秋

ひとり居の飲食（おんじき）も身も冬に入る

千両や吐息ともども妻恋し

鳶や寝にぬくかりし妻の夢

妻なくて道に出てをり春の暮

初つばめ妻ゐるごとくひとり茶を

私の妻も鍵和田先生のもとで、四年ほど句作に没頭していたから、天国のどこかで、森夫人と併談に興じていられるかもしれない。

この三、四十年ほど、俳句の世界はかつてないほどの盛況のようである。妻や恋人への愛をうたつた句は、ま

まだほかにたくさんあるに違いない。なにとぞご教示をいただきたい。

アメリカの教育の一面

莊 司 忠 志

去年後半六か月、ニューヨーク市の北およそ百六十キロにある田舎町で暮した。開拓時代の初期の頃から開かれたニューアーランドの中心で、ゆるやかで広大な丘陵に恵まれた酪農地帯である。クリスマスツリー用のモミの木栽培が盛んだ。夏場の週末には、マンハッタンからもたくさんの人たちが、おいしい土地のワインと田舎料理を楽しみにやってくる。あちこちの湖沼の周りの森のなかに、都会人の別荘が見え隠れする。

こうした、都会を遠く離れたニューアーランドの田舎に、古い歴史を誇る私立全寮制高校やりベラル・アーリアッタ女子学生は、西海岸のオレゴン州からきていた。

ツ・カレッジが点在している。一方、総合大学（ユニバーシティ）のほとんどは都市にある。町の近くに、かつて七つの名門女子大学（セブンシスターズ）の一つと呼ばれたバッサー・カレッジがあるが、今では男女共学になっている。

明治初期、日本政府は五人の少女をアメリカの学校に派遣した。その一人津田梅子は、のちに津田塾大学を創設し、山川捨松は日本人女性として初めてアメリカの大学から学士号を授与された。私は山川捨松、後の陸軍大臣大山元帥夫人の記録に興味を持ち、彼女が学んだバッサー・カレッジの図書館を訪れた。関係資料は、数キロ離れた別館にあった。本館と別館あわせて三十人ものスタッフをかかえており、ほとんどは女性で、司書の資格を持つベテランである。その一人が半日私の調査に付き合ってくれた。

町の西側を流れるハドソン川の岸辺にあるバード・カラッジは、リベラル・アーツ・カレッジであるが、音楽や舞台芸術、絵画などの教育に力を入れている。偶然知りあつた女子学生は、西海岸のオレゴン州からきていた。

どうしてアメリカの反対側の遠くからこの大学を選んだのかと聞いたところ、音楽と一般教養に特色ある校風にあこがれたという。

アメリカで大学を探すのは簡単だ。大学の卒業式にみられる、四角帽子を描いたグリーンの案内があちこちに立っている。ウイリアムズやアムハースト・カレッジなど、どこに行つても、まず圧倒されるのはキャンパスの大きさと緑あふれる美しさである。十八ホールのゴルフ場を持つバッサー・カレッジのように、ゴルフ場を持つ高校もある。ある高校では、ひとクラス生徒五人から多くて十七人であり、教師の数もそれだけ多い。ここには日本のような受験の重圧はない。全寮制なので、通学の時間は不要で、その分スポーツや趣味を楽しめる。

こうした私立高校や大学の年間費用は、アイビー・リーグ大学も含めて、およそ三万ドルである。十年の間に二倍近く上がってしまった。そのため一部の私学は一握りのお金持ちのものになりつつある。金持ちはますます金持ちになり、中間や低所得層の所得があまり増えていない社会で、どんな家庭がこのような高額な費用を払える

のか。高額な学費を徴収しながら、一方で半数近くの学生がなんらかの奨学金を得ている。大学は膨大な寄付金や基金を持っており、その運用益の一部が奨学金になっているのである。奨学金を受ける資格は成績とニーズ（必要性を詳細に調査）である。スポーツ奨学金も多い。どの大学の入学事務所にも、銀行と提携したローンのパンフレットがあり、上限は十三万五千ドルである。医学生には別途高額ローンがある。

アメリカの高等教育は、絶えず思い切った自己革新をおこなっている。世界に通用する魅力ある教育は、多くの留学生を集め、その外貨収入は年間三十億ドルに達する。教育はビッグ・ビジネスである。ところが昨年来のアジアの経済不況は、アジアからの留学生を直撃した。留学生の一部は学業途中で帰国する者もあり、新しい留学生も激減している。

マンハッタンの北部に、日本人が多く住んでいる豊かな住宅地がある。この地域の高校以下の公教育は、アメリカでもトップクラスで充実している。公教育の予算の大部分は不動産税でまかなわれる所以、学校も立派だし、

高い給料で良い先生を雇っている。低所得者層の多いマンハッタンの一部には、教室が足りず、廊下、教員室、食堂まで教室に使っている劣悪な状況もある。そこには暴力、セックス、麻薬などの問題があるし、昼食に外出した中年の女性教師が、麻薬の現場で逮捕されるなど、荒廃した公教育も現実である。

新聞の求人欄に、日本では考えられないような珍しい広告を見た。プリンストン大学が「FAIRNESS」

担当のスタッフを求めており、なんと経歴も報酬も学長に次ぐ高い地位とある。あらゆる「公平さ」をチェックし、大学にアドバイスする仕事である。ダートマス大学は、一年後の秋の学期からの新学長を探していた。教授職だけではなく、学長まで、広く世界から探しているのだ。

アメリカの大学の学部教育は、特別の部門以外、日本のように文学部とか経済学部とかの学部制にはなっていない。用意された数百の科目から自分の勉強したい科目を選択すれば良いのだ。日本の大学では、入学時に学部や専門を決めてしまう。入学してから志望を変えるのは

簡単ではない。十八歳で将来の方向を決めて後悔しないのか、大いに疑問だ。教養課程と専門課程が四年では短過ぎるのだ。もっと教養課程を重視し、たっぷり時間をかけ、ほんとうに自分がやりたいことを見付けだし、学士号を修得してから大学院やプロフェッショナル・スクールで専門に進めるコースが生まれないか。アメリカのリベラル・アーツ・カレッジのような制度が、日本に生まれて欲しい。

私の生い立った町

竹内京一

昭和六年六月生まれ、干支はひつじ年で、生まれたところは東京、青山高樹町の日本赤十字病院です。至って健康な赤ちゃんは体重一九〇〇グラムで、生後三十二日目にお宮詣りをいたしました。父はこの赤ちゃんの名前

を東京一と呼びたかったのですが、そうもいかず、京一と命名し、愛称は京ちゃんでした。当時、我が家家の景気は良く、東京帝国大学土木科を卒業した母の従弟が月給四十円だったころ、父の月給は外資系のためか職工の係長でしたが、百二十円で、従って、土佐の高知の親戚連中は皆、我が家に下宿し、米国からも親戚の一世人が下宿していました。私は二歳まで、当時お屋敷町の芝区白金三光町の二階建ての家にいましたが、父は二階建ては子供に危ないからと、蒲田区の平屋に転居しました。

蒲田は今と違い、駅の西口から道塚町（今日の新蒲田）までススキの野原でした。また、蒲田で強く印象に残っているのは、「貸家」と書いた半紙を左斜めに貼った家が目立つことです。蒲田は日支事変のころ、町工場が増え、町の至る所に旋盤工場が見られるようになります。現在の蒲田、川崎は工場地帯ですが、当時は葭（ヨシ）の茂った湿地帯で、ザリガニの宝庫でした。子供のころは、父と一緒に散歩がてら、六郷の土手を歩きながら、川エビを掬いました。

父はこの川（多摩川）で投網をしました。糠と蚕のさ

なぎの粉末、それに土を等量に混ぜて直径十センチぐらいの団子を作ります。午後三時ころから、この団子、撒き餌七十個ほどを一時間半かけて、川下の大橋（矢口の渡し—新田義貞の子、新田義興が騙し討ちされた所で、歌舞伎「神明矢口の渡し」が作られています）から川上の沼部にかけての約三キロに投げて歩き、そこには目印をつけてます。そして川下に下ると、川面をエビや魚が跳ね上がり、色々な魚が集まって来たのが分かりますので、魚が集まつたのを見て、投網をするわけです。フナ、エビ、その他の小魚がたくさん取れ、一回で十五～三十キロは取れました。近所に配っても余り、大型電気冷蔵庫が一般家庭にはない当時ですから、甘露煮にして食べさせられ、つまり、幼時にカルシウムを十分補給されていましたのです。

船釣りは田町から一人一円でした。釣った江戸前のハゼ、アナゴ、シャコ、時にはエビなどを船上で天ぷらにして食べましたが、今から見れば、都会人の楽しみでした。

町には行商も多く、約三十種類あったと記憶しています。

す。ラウ屋—煙管（キセル）の雁首と吸い口を結ぶラオス由来の黒い斑のある竹を羅宇（ラウ）または羅越（ラオ）と言います。この竹の管にタバコのヤニが詰まりますので、それを、蒸氣で洗浄したり、交換したりする商売です。ピート蒸氣を用いた笛音を立てながら車を曳いて歩いておりました。今日でも一台は東京にいるようで

す。（先日、老後の楽しみに、機械を取り寄せた人のＴＶ番組がありました）。玄米パン、納豆売り（一個一銭）、これは四角の籠に入れて肩からカバン状態に吊りました（先日、老後の楽しみに、機械を取り寄せた人の

したものです。

天秤で担って売りに来たものは、いわし売り、魚屋、餅つき屋（臼、コンロ、薪、釜、せいろなどは天秤で持参）、煮豆屋（四～五段の引き出しのついた箱を天秤で前後に背負います。引き出しの中は銅張りです）、豆腐屋（注文すると、賽ノ目などに切ってくれます）、ベッコウ飴売り（人や動物など細工をします）、しんこ飴売り（同様に細工をしてくれますが、色がつけられます）。

その他に道具を背負って来るのは、刃物研ぎ、富山の薬売り（家に置き薬として置いて行き、一年後に、消費した分を請求します）、竿竹売り、傘直し、靴直し、くず屋（籠を背負っている）、イカケ屋（鍋や釜の補修）。ドジョウ売りもいました。注文すると、その場で裂いて、骨と内臓をとります。頭も切り離し、これはダシに使つたと思います。天秤で売りに来たものは、後にリヤカーや自転車などに積むようになってきました。

蒲田周辺で最も有名なのは、羽田空港で、当時は現在の十分の一ぐらいの広さで、穴守稻荷神社周辺で潮干狩りをしたことを覚えてています。昭和二十二～二十三年で

も品川の駅からはお台場が見え、大森の海岸でも潮干狩りが出来、富士山は東京から良く見えました。

昭和十五年は皇紀二千六百年で、記念行事があり、航空記念日には陸海軍の飛行機一千機が東京上空を覆い、国威を宣揚したものです。そして私は東京上空三〇分の遊覧飛行を初めて体験しました。

松竹大船撮影所は当初、蒲田にありました。今、銀座の小松ストアの隣にある黒沢という文房具店（最初はタイプライター店）の先祖は黒沢鉄工所と言い、大正時代に盛んだった会社です。会社敷地の半分にチユーリップを植えて市民に解放しており、私のカッコウの遊び場でした。今日の新蒲田の南方です。この会社は中に黒沢小学校もあり、従業員の子弟も通学しており、大正時代の総合的理想を行ったものでしょう。

そのような質問には「マイクロソフト社のウインドーズのようなもの」と答えることにしており、アップル社のパソコンを使う人以外、大概誰もがこのソフトを使っている。しかし、政府や国際機関がウインドーズを使うと決めた訳ではない。ましてや消費者である我々が独自に判断して決めてきた訳でもない。そういえばテレビでも現在はNTSCという技術標準のテレビを誰しもが疑わずに利用しているのだから、何もマイクロソフト社のウインドーズばかりでも問題が無い。そうとも言えるから、大騒ぎする代物ではないのかも知れない。

デファクト・スタンダードと
クローバル・スタンダード

許斐義信

最近、新聞でデファクト・スタンダードという言葉を

よく見かける。

それが「一体どんな意味なのか」と聞かれたことは一度ではない。

そのような質問には「マイクロソフト社のウインドーズのようなもの」と答えることにしており、アップル社

しかし、このソフトは単にパソコンのソフトだけに止まっているかというと、どうもそうではないらしい。例えば、テレビで電話線を利用して、好みの時間に好みの番組を見るようなサービスが始まったとしよう。その時、どのテレビでもウインドーズのようなソフトが必要で、それが決め手で次世代のテレビを買う。単に一度買えば済むのなら許せるが、パソコンのように数年に一度は買いたい換えないといふのが見られるようになる。そんな不安がしないではない。そのところは、テレビを開発したRCA社やオーディオ・カセットを開発したフィリップス社などに比較して、マイクロソフトという会社は、何とも素性が悪そうで、信頼感がない。だから特定の技術の主導権をこの会社に押さえられたら、数年ごとにテレビを買い換えさせられるかもしないという不安が付きまとだ。

ウインドーズだけではない、政府や業界団体が決めた訳でもないのに、あたかも技術標準のような立場に立っている事例が増えているから始末に終えない。その多くは通信やコンピューターの周辺で起こっている。そしてほとんどすべての技術が、ひところ技術力を失ったと揶揄していた米国の会社なのだから、技術という代物は不思議である。インターネットもそうだし、そこで情報を探すソフトも、また電子メールを送るソフトも、そしてインターネットを構築するルータと呼ぶ機器も、あらゆるもののが米国発の商品なのである。技術力があると自信過剰だった日本企業は、DVDとかCD-ROMといった周辺機器以外では、その存在感は全くなかった。技術は日本でも、ソフト技術は米国。そのような技術棲み分け論で良いという議論も成り立つが、ことはそう簡単ではない。テレビやビデオでの稼ぎで国民を食わせてきた家電業界も、次の時代には、マイクロソフト詣での巧拙で企業の業績が采配されるとしたら、当事者ならずとも、面白くない話なのである。

新聞がこんなことを考えてデファクト・スタンダードと声高に叫んでいるかどうかは知らないが、どうしたらデファクト・スタンダードを取れるか。マイクロソフト社がどのような技を駆使して今日の地位を築いたのか。その分析や理論闘争が盛んだが、問題はデファクト・ス

タンダードの取り方ではない。眞の問題は、日本の企業で新たな技術開発ができないところにある。「円高でもアジア諸国に負けないだけの技術優位のある商品を開発できなければ、資源もない日本の明日はない」それは判つてゐる。しかし、現実はこの通り。気付いてみたら価格を叩かれる商品以外には、日本には無かつたという次第である。

さらに悪いことには、グローバル・スタンダードといふデファクト・スタンダードと似て非なる言葉も流行つてゐる。企業の業績は連結決算だ。欧米流の持ち株会社を解禁せよ。ROE（自己資本比率）が低いのは儲けが少ないからだ。借金経営は問題だ、自己資本の強化が必要だ。貸し渋りにはグローバル・スタンダードに合わせた自己資本の充実が不可欠だ。倒産しそうな不良債権が多い銀行には政府の資金を投入して優先株を保有し、グローバル・スタンダードに合わせねばならない。いやはや、どうでもしてくれ。そう言いたくなる。世界の標準に合わない企業は生き残れない。だから世界標準が大切だという議論を真っ向から否定するものでもないのだが、

歐米追従が長過ぎたのか、自信が元から無かつたのか。それは判らないが、資本の論理ですべてが割り切れる社会の問題も、かの米国では起こつてゐる。そして事実、日本経済は、その制度をそのまま導入して来なかつたからこそ今日がある。第一、連結決算を見て株式を購入する投資家がいるのだろうか。投資家の見返りである配当は個別企業のままだし、持株会社を解禁したといつても「子会社を上場してキャピタルゲインを得る」という類の技は通用しなくなる。そんな幼稚な検討もしないで、すべてがグローバル・スタンダードの時代なのである。最近では「スタンダード」という言葉が出てきたら、要注意」と思った方が正しい。スタンダードという言葉を吐く前に、何故なのか、どうすべきなのか。それを十分議論したいものである。せつかく築いてきた日本経済のシステムを一気に放棄する覚悟があつてのことならざ知らず、盲目的な歐米追従の旗振り役が使う言葉が、何やらスタンダードなのである。

技術開発力で負ければデファクト・スタンダードも無いし、日本経済のメカニズムも根底から修正し直す覚悟

が無ければグローバル・スタンダードも無い。そこに問題の本質がある。

ピーはその居間の隅で仔犬を生んだ。

十一時二十分に一匹目が生まれ、きつかり二十分毎に一匹ずつ、四匹目が生まれたのは一時二十分であった。我が家にとつても、お産は初めての経験だったが、社会人一年生の娘が、「犬の飼い方」といった本から得た知識で、見よう見まねで生まれてきた仔犬の袋を破って呼吸できるようにさせたり、途中まで出てきた逆子の仔犬をひっぱり出したり、産湯につからせたり、大活躍だった。

目を閉じたままの三〇〇グラムの小さな生き物、黒い毛につつまれて三匹、茶色が一匹。何て可愛いのだろう。そのあとは、我が家も臨戦体制となつた。母親が仔犬を押しつぶすこともある、とのことで、そういうことがないように、ずっと誰かが見ていてはならない。

最初の夜は、五匹の犬は次男の部屋で寝かせた。仔犬たちが気になつて息子は結局一睡もできなかつたらしい。母乳も皆に行きわたらなくてはいけない。力が強い犬が、ミルクの良く出る乳房を独占していくは、小さい子どもは育たなくなつてしまふ。仔犬の場所を入れ替えたりし予定していた部屋だった。先輩が帰られた一時間後にピー

『ベドリントン・テリア』

西川 永幹

て、四匹皆が母乳を十分に飲んで元気に育つように目を届かせるのも、人間の役目だ。

ママのいない我が家では、娘がママ代わりだ。しかし週日は娘も会社に行かなくてはならない。娘と息子二人、私の四人で犬シフトを組んだ。「パパは会社が忙しい」と訴えて、私は当番日を土・日にしてもらった。学校に通う息子たちが、原則ウイーク・デーの犬当番となつたが、新人の娘も有給休暇をどんどん使って、犬のために会社を休んだらしい。子供たちの都合がどうしてもつかなくなり、私も十月に一日間犬のために仕事を休んだ。「パパは休めないよ」と言つたが「イノチと仕事とどちらが大切なか」と娘に迫られて選択の余地がなくなってしまった。私自身の会社への忠誠心のために言つておくと、私は会社を休んだが、厳密に言うと「仕事」を休んだわけではなかった。仔犬たちは要するに「番」をしていれば良いので、家に仕事を持ち帰り、仔犬たちのかわらで書類を読んでいた。しかしやはり「会社を休んでいる」という解放感も手伝つてか、仔犬たちのそばで過ごす時間は、かけがえのない充実した時のように思われる。

仔犬たちが生まれて暫くの間は、病氣なく健康に育てる、ということが、我が家の一絶対の家是（適当な言葉だろうか）となつた。夜仕事から帰ると、まず犬たちのいる台所へかけつけて、犬に挨拶をする。しかしある時「パパの手は汚いから犬に触る前に手を洗え」と子供たちに言われ、しかたがないから手を洗つてから仔犬を抱き上げるようにした。抱き上げて子供の見ていないところで、仔犬の口に私の舌をつき出す。犬にとって、きれいも汚いもないから私の口に吸いついてくる。仔犬の口の甘酸っぱいにおいがたまらなかつた。この犬とのキスを毎晩四匹の仔犬全部とした。仔犬たちは皆私が好きなのだ。

二週間と少しくらいして、離乳食が始まるところになると大変だ。それまではウンコもシッコもピーピーがなめてしまつて、いたから寝床はきれいだったが、それをしなくなつてしまつた。仔犬たちは、台所の中に作られた囲いの中をよたよた歩きまわり勝手なところで粗相をしてしまう。トイレ・シートを敷いておいて、そこでするよう

れた。

におぼえさせようとするが、何しろ相手が四匹だ。とてもできたものではない。

ブーピーを子供の時から駆けた経験を持つ娘は、何とか四匹を駆けようとしたが途中で「無理だ」とあきらめてしまった。四匹いっしょは相手の数が多くすぎる。「仕放題にされてしまう」第一ラウンドは娘の負けであった。三週間くらいして、体重が生まれた時の三倍になった。もうそろそろ目が開くかな、と毎日仔犬たちを見ていたが、ある日、うつすらと目が開いた。目は開いても、おそらくまだ見えておらず、顔の前で手を振っても反応が全くなかった。しかし、電灯の光を映してキラリと光る仔犬の目は、宝石のように輝いて見えた。

一ヵ月すぎて、少し歩けるようになり出すとお互いにじゃれあったり、人間と同じやれようとしてとても楽しくなった。息子が友達への電話で仔犬たちは「ものすごく可愛い」と言っているのが聞こえた。子供たちも皆仔犬が大好きだった。

九月七日に生まれてから十一月八日に、犬好きの方に三匹お譲りするまで（一匹は家で飼うことになつた。現

在我が家にはブーピーとショーンの一匹のメス犬がいる）二ヵ月間、仔犬たちの世話を家中で本当に大変だった。仔犬たちも病気にならずすくすくと育ってくれた。仔犬たちのはしゃぐ姿を見ていると、苦労もふきとんでもった。二ヵ月間、仔犬たちが我が家に幸せを運んでくれたような気がして、感謝している。他家に行つた仔犬たちも、その後、それぞれ元気にしていることで、ブーピー+我が家の幸せが、少し広がりを見せたようにも思われ、良かった、と思つている。

ヒモ

村田 孝四郎

韓子は片田舎の貧乏農家に生まれ育つた。色白で愛くるしい子だった。中学を出るとすぐ、近くの町工場に働きに出たが、給料は安く地味な生活しかできなかつた。

そこで、いつからか夜の街に出て客を引くようになった。しかし、田舎では客種もよくないし客数も限られる。十八になったころ、一稼ぎしようと都会に出てきた。番茶も出花、若さと容姿には自信があったので、仕事はすぐ見つかるだろうし、ひょっとすると、いいパトロンに巡り会えるかも知れないと安易に考えていた。

ちょうどそこへ現われたのが、米蔵と日太郎である。

二人は暴力団仲間で、以前大喧嘩をして米蔵が勝って以来、日太郎は米蔵の子分に成り下がっていた。二人は韓子のような田舎からボットと出のうぶな若い娘を見付けては、そのヒになって金を巻き上げ、豪勢に暮らしていった。魚心に水心、韓子は一見紳士的な二人に簡単に言いくるめられて、お金をたくさん貸してもらい、言われるままに客を引いた。おかげで立派なマンションに住め、派手な衣裳や装身具や化粧品も揃えることができた。その代わり、高利の多額の借金を背負いこむことになったのである。しかし、初めのうちは若さと美貌で客が面白いやうについたので、高級レストランで食事をしたり、外車を乗り回したり、海外旅行をするなど華やかな生活

を送りながらも、月々の借金の返済はそう重荷とはならなかつた。

こうして十五年ほどが夢のように過ぎていった。いつしか韓子も三十を越えていた。女は盛りを過ぎると急速に容色が衰える。韓子も例外ではなかつた。若い競争相手がふえたことや、世の中が不景気になったこともあって、価格を下げてもだんだん客がつかなくなり、収入も減ってきた。やがて、元金どころか利子さえも払えない状態になつた。そうなると、米蔵と日太郎は手のひらを返したように冷淡になり、マンションを取り上げるぞ、衣裳も取り上げるぞ、親に肩代わりしてもらおうぞと毎日のように韓子を脅すのだった。

困り果てた韓子は、若返りのため無謀にも美容整形手術を受けることにした。しかし、手術の費用は目の玉が飛び出るほど高く、とても韓子には負担できない。しかたなく再び米蔵と日太郎に追加の借金を申し込んだ。米蔵と日太郎にしてみても、韓子に破産されてしまつたのでは利子はおろか貸付金さえ戻つてこなくなる。それでは元も子もない。韓子にはどうしても、もう一度立ち直つ

て稼いでもらわなければ困る。一人は相談して韓子に厳しい条件を付けて融資することに決定した。毎日五人以上の客を取ること、車も手放し、マンションから木賃アパートに移ること、食費は一日千円に抑えること、風呂は一週間に一度、タクシーはだめ、電話もだめという厳しいもので、貸付金は利子も含めて全額を五年以内に返済することと決められた。屈辱的な条件で、第一、一日に五人の客を取ることなど不可能だ。これでは韓子の体はボロボロになってしまいます。

もちろん、米蔵たちは韓子のためを思って金を貸すのではない。韓子から吸い取れるだけ吸い取るのが目的である。しかし、韓子はこの条件を受け入れざるをえなかつた。それ以外に道がなかつたからである。それに、夢よもう一度という甘い考えもあつた。

だが、歳とともに肌の衰えはどうしようもなく、また、一度身に付いたぜいたくな生活は容易には捨てきれず、約束の五年が経つても借金は返せなかつた。すると、米蔵と日太郎は韓子を見限り、身ぐるみ剥ぎ取つたうえで、韓子の田舎へ行つて年老いた両親を脅し、娘の借金の形

だといつて家と田畠を取り上げた。それがもとで韓子の両親はまもなく自殺してしまつた――。

やつれ切つた韓子はいまホームレスとなつて、ボランティアの世話を受けながらどうにか生きている。ときお出ないで田舎でつましく暮らしていればよかつた、身の程もわきまえず華やかな生活に憧れたのがいけなかつたと。ヒモは餌食の骨の髄まで吸い尽くすのだということを今にして悟つた。だが、もう遅かつた。

ある日、韓子はテレビを見ていて、自分と同じような境遇の女たちがたくさんいることを知つた。泰子、稻子、香織、馬利亜、比呂美、みんな自分と同じようにヒモに絡めとられて一切を失つた。越子や華子にもヒモの手が迫つているが、米蔵や日太郎のような狡猾な暴力團を取り締まる警察はどこにもいないという。この国は金を持つた暴力團が支配している國らしいのだ。

最近のロシア事情

上 沢 準 一

一、デノミに遭り付けたロシア経済

一九九八年一月一日からロシアは「千分の一デノミ」を実行した。一万ルーブル紙幣が十ルーブルと読み替えられる。

一九九二年三月、エリツィン大統領のもとでロシア連邦が成立してから六年、超インフレで膨れあがったループル経済が何とか落ち着いて来たので通貨単位も平常化しようというものである。

ソ連時代の一ドル／一ルーブルから九七年末には六千ルーブル弱まで下落した露貨がデノミで一ドル／六ルーブルまで戻る。その代わり帳簿という帳簿は零を三つずつ落とさねばならない。

実は、昔のドル・ショップの流れをくんで、モスクワやウラジオなど主要都市の土産物店はもちろん、食料品

店でもスーパーでも、気の利いたところはみな既に店頭価格がドル表示になつていて。大インフレ時代の知恵であつたがデノミでも値札を付け替える必要はない。そう支払いは換算してルーブルで行わねばならない。そういう決まりになつてはいるが、ドル紙幣で受け取り釣銭だけルーブルという店も多い。

昨年十一月、沿海州南部のウスリースク市に、ある企業の経営診断に赴いた。ところが経営計画も、資金繰り表もなんと「ドル表示」で出てくる。訳を聞くと、「ドル資金」を導入して経営建て直しをするのだからドル建にしたのだという。

ルーブル建てだと、零の数だけで記入スペースが塞がってしまうと笑っていた。ただし帳簿だけはキッチンとループル建てで付けていた。IBMのパソコンのおかげで記帳は苦にならない。

確かにドル建ての経営計画にすれば、中長期計画もロシアにまだ残る年率一〇ないし一二%のインフレや、年率三〇%のルーブル資金の金利も米ドル並みまで捨象出來る。

外国との商品貿易もドル決済が基準だというから、ロシア経済は「米ドル建て経済」で裏打ちされていると言える。

二、市場経済化後六年間の試練

六年前、ロシアは軍需産業と基礎鉱工業を除くほぼすべての国有国営企業の資本を株式化して民間に放出した。実際は「バウチャード」という株式購入権利証を国民に配るという形で、一気に民営化を図ったものである。

バウチャードそのものが売買取引されたため、化学工業はじめ各業界にスキャンダルめいた混乱が起きたが、二年程で「民営化」は目標の八割方実現し、政府は、赤字企業の資金繰り補償という重荷を軽くした。

民営化して独立採算となつた企業が従業員の生活を抱えてまず受けた洗礼が「猛烈なインフレ」である。「物」さえ握っておれば「インフレ・ヘッジ」は出来るが、肝心の基礎物資が出回らない。

少した。物価はソ連時代の数千倍にも跳ね上がった。支払い人件費はどんどん上がる。次の仕入れができるない。各種税金もうなぎ登りになる。銀行に行っても預金不足と称して貸してくれない。その月の人件費を引き出しに行くと、残額があつても、引き出し額と同額の預金を迫られる。借り越し金利はインフレ率を上回る。

そんなこんなで資金繰りの苦しい企業がまず払えなくなるのが税金である。徵稅機關もシステムも不備なロシア政府は、たちまち稅收不足となり公務員の給料遅配が起ころ。各官公庁は、手を回して何とか押えた現物の支給で何ヵ月も細々つなぐことになる。勤務先は生活物資の配給所と化した。

ウラジオを中心とする沿海州南部の例を挙げれば、民営化した大企業特に製造業がインフレで原材料の手当てが出来ず、まずへとなる。ついでシベリアの大規模道路工事が国家予算のカットで建設業が軒並みダウンする。大工場や工事現場に石炭を供給していた石炭鉱山が倒産する。原材料や石炭の輸送を担当していたトラック運送業がへとなる。民営化した火力発電所が石炭不足の上に

八九〇九年の間にGDPは四八%、農業生産は四三%、鉱工業（小企業を除く）生産は五四%、それぞれ減

電気代の不払いに見舞われて間引き運転となる。

市中の停電はいまだに時々起ころる。電力不足もあるが、発電所や送電／受変電設備が故障するからだ。保守点検でも停電する。

停電は照明だけでなく、給湯と暖房に影響するから、冬場や夜間は困る。工場や一般市民は慣れているようだがホテル住まいの者にはたまらない。

昨年十一月企業診断に赴いたウスリースク市のホテルでは、ポット入りの「お湯」と浴室の湯は出たが、それ以外、朝も夜も食事は一切無し。暖房も壁ぎわの電気暖房だけで心もとなく、停電こそ無かつたが、外は零下七度。日本から持参のインスタント・ラーメンと公設市場で仕入れたハム、チーズ、パンで食事を済ませ後は毛布をかぶってテレビを見るという毎晩であった。

三、健気なリストラと国民経済の盛り上がり

そんな試練の連鎖のなかで、潰れた炭鉱を鉱区ごとに独立させ、工場の機械を回し、トラック運送の規模を縮小し、発電所を修理してフル運転に近づけ、懸命のリストラに挑戦している。

九七年、ロシアのGDPは前年比横ばいだが、鉱工業生産は一・五%の伸びを示した。インフレ率は年率一〇ないし一二%に沈静化し、国民の実質所得は三%増えた。公式統計の失業者は九六年の二三百六十万人から九七年二百十万人に減り、九七年一～九月の商品貿易は百四億ドルの黒字となつた。外貨準備高は九七年十月二百四十億ドルに達している。九八年のGDPは二%の伸びが予測されている。人員整理にも、もう慣れだ。

政治・経済・社会の各般にわたり、課題こそなお山積みだが、ロシア文化と科学技術のレベルの高さやパワーを感じさせるリストラ振りである。



アジア随想、再びイシドまで

福井　律

平成九年は、宿痾ともいえる小生の腰痛治療法が奏效し、一時は歩行困難で何度も出発直前に断念した海外旅行が自信をもって、再開出来た記念すべき年となつた。

現代医学では手術するよりないといわれた頸椎、腰椎変形症対策として磁気シャワー療法を指導していただきた石渡弘三氏、おすすめ願つた平野真起子様に厚くお礼申し上げる。

動けるとなると、ありがたいことにお誘いの旅程の消化に追われることになる。

まず初夏、前年から開放された旅順、大連行で、過ぎし日露の戦いを偲び、続いて杭州、蘇州と、少年時代の懐かしい記憶をたどつて、大陸へ渡つたのが手始めとなつた。

そして前の年からの懸案「中国陝西、四川の旅」から

本格的な旅程となる。八木毅氏（愛知県立大学名誉教授）の主宰されるこの歴史研究グループは、気持ちのよい好学の方々の集まりで、この楊貴妃の足跡を探る旅にはぜひ加わりたいと、治療に専心したわけ。

前回は河南省安陽、鄭州、開封と、商殷の遺跡から鞏県を経て洛陽と中国中原史跡の旅を満喫したのだが、九月二十日再び一行と、西安からスタートすることとなつた。

めぐり来てここ中原に秋氣満つ

なつかしの顔　西安の秋日和

そして、玄宗、楊貴妃ゆかりの西安、（華清池、兵馬俑、杜陵）貴妃終焉の宝鶲、劍門関を経て成都へ。成都では（杜甫草堂、竜馬、三星堆兩遺跡）を回り、上海から帰国。

楊貴妃の墓去り難き秋の声

もろこしの畑一面の秋雨かな

五丈原秋かなしみの坂上る

四千年の瓦を探す秋の原

杜甫草堂　鷄頭赤く爽やかに

・ 竹や竹 杜甫も驚く竹の春

・ 乾し茸を疑いつ買う旅の果て

九日間の中国行は終わり、十月はベンくらぶの野村嘉彦氏のお世話でベトナム行。同氏は三井物産を通じてベトナムとの交流四十余年渡航六十五回に及ぶベテラン。ベトナム大好きの小生には、またとないチャンスと、南北一千キロ縦走八日間の旅に飛びついた。

・ 三度来て南の国のかを知る

・ 安南を愛する旅に秋暑し

・ 雲の峰ハロンの海に映える島

・ ワンダラーと珊瑚押し売る子の日焼け

・ 潮風を船窓に受け蟹食らう

・ 水牛と帰り急ぐ子夏の暮

・ 故郷に似る古都の秋越の国

・ フエ京都 扶余奈良と比す秋の声

・ 三度飲む安南の美酒 秋闌けて

そして野村氏の紹介で、ハノイでは小松みゆきさん、フエでは平田好さんから、生々しい日越交流に苦労されているボランティア活動の実態なるものを聞く機会を持つ

た。勤勉実直な民族性、高い識字率と信頼心、爆発的な若々しいエネルギー、プラス、適切なドイモイ政策と外資導入で、極めて明るい近未来が期待出来るという、小生の樂観的ベトナム觀は正直しさかぶらついたようだ。それでも近隣諸国に比べると、私達に一番近い国、一番若い洋々たる将来に満ちた国といえるのではないか。

そして十一月、夏以来アジアの通貨危機の渦中にあつたバンコクに訪れることになる。ここ数年、毎年秋開催のASAFA(アジア証券アナリスト連合会)に参加することにしているが、前年のニューデリーに続いて、この年はバンコク。残念ながら開會冒頭のタイ国蔵相の講演はサラリと逃げたもの。無理からぬところだが……。駐タイの某銀支店長によると、農本主義のこの国では、為替下落の影響をジカに受けるのはごく一部。工場が駄目なら、田舎へ帰つて、大家族主義の傘の下で生きていけるという人たち。そういえば日本にもそんな時代があった気がする。しかし、物価騰貴の波は徐々に庶民生活を脅かしつつあったようだ。

タイからの帰途立ち寄つたミャンマーは、親日国とし

て好感を持てるが、アメリカをはじめ日本まで、人権問題から投資を手控えたためか、経済に弱い軍事政権は、外貨不足、インフラ未整備、すべて足踏みで処置なしの状況。一人当たりGDPは、タイの三〇分の一、ベトナムの半分という数字（日本の三五〇分の一）はこのまま、見放していくよいものだろうか。日本で伝えられるマスコミ報道には、やはり偏向がある感をもった。

それはともかく、アジア通貨危機以来見えて来たのは「アジアの凋落、アメリカの隆盛、ヨーロッパの停滞」の図式の変化が、ヨーロッパの停滞からの脱却、それも「ユーロ」単一通貨導入を控え、ヘッジファンドのアジア売りという形で現れたといわれる。

アジア諸国の金融の三つの共通病として過度の成長指向、肥大化した公的金融、身びきによる腐敗があげられるが、この弱点をついて売りたいたのが、ソロスに代表される三つのヘッジファンドであり、欧州系銀行の資金がその中核をなして、ユーロ浮揚に成功したとか……。日本の政局、景況に気をとられている内に世界は、欧米、亞、それぞれのバランスの中で激動・浮沈をくりか

えしつつ、新しい世紀に向かっているようだ。過度の悲観も楽観も禁物、日本人の良識と技術力を信じて、冷静に処理すれば、この危機は突破出来ると思われる。

十二月、木岡先輩から、年末たった五日間だから行こう、というお誘い。檻を出た虎、立ち上がる象の一年後を見にインドへ……。

菜の花はさかりインドの年暮
天竺の師走の夜は涼しくて
立ち上がる象いつの日か冬日向
冬うらら象に乗ったよ城の坂
象の背はガクンガクンと小春かな
冬晴れや天の声聞く塔高し
名も知らぬ花咲き競う師走かな
永遠に変らぬ国か綿の花
天竺の夢をかなえて年終る

(平成九年十一月末日記)

会社と知性

森田 茂

「会社や社員には知性がない」と言えば身もふたもないが、本當にあるのかと問えば疑問がわくこともある。最近、中小企業向けの雑誌の編集長と話し合ったことがあるが、それらの経営者たちは、たとえば環境の大切さは理解しているものの、仕事となると利潤優先となり、環境のことは二の次とせざるを得ないのが普通なのではなかろうかと感じた。知性ある経営者でも知性を發揮することは限らないからだ。

サラリーマンの中には、上司の信頼を得て引き立てられるのを期待し、必要以上に公私ともに尽くす人はいる。そのために体をこわすだけでなく、正邪の判断力が鈍るような知識人の弱さを見せつけられることがある。ある社員は「知性って何ですか。そんなこと考えている暇はないね」と嘆いていた。

こんなことで会社も当人も大丈夫なのだろうか。もつと知性のもつ力を養う必要があるのではないか。

これからの会社の知性とは

一九七〇年代は物を大量生産し消費する時代であり、八〇年代は株式、証券の取引が活況を呈したお金の時代であった。そして、これまでの経済システムが行き詰まつた不況下の九〇年代はまさに人の時代である。今までは、戦術はあるが戦略のない会社が多くなったように思う。いまは、実力があり知性のある社員をもつ会社でないと生き残れないような厳しい社会環境となっている。

目前の仕事という戦術を軽視するわけにはいかないが、今の仕事は世の中に必要とされているのか、そのためにはどうしたら良いのか。会社の、業界への座標軸をどう進展させるのか。社員の本当の教育は何なのか。これらを決定するには会社としての長期的計画やビジョンが必要である。知性的経営にはこれは欠かせない。これが戦略なのだ。

さらに、これから会社は社会に役立つ内容がないと存続することはできない。「企業がどれくらい環境に配

慮した経営を心掛けているか」を測る世界共通の物差し作りができた。ISO規格といわれるものである。企業が「もうけ第一」で済んだのは過去のことと、いまは「環境にやさしい企業」で、いろいろの形で社会貢献が求められる時代になってきている。知性的経営の真価が問われることだろう。

社員の知性とは

会社内での地位の問題は人生を左右することがある。真に肩書へのこだわりを取り除くことは難しい。とくに、少しでも上に立ちたいと望む者はそうだろう。窓際を感謝できる人はまずいない。

社員の中には地位が上がれば上がるほど、魚の平目みたいに、上ばかりに気を使う人がある。会長や社長などとも、上の立場のものは部下が気を使ってくれることを、感情的に善とする。義理人情を重視する人は結構いるからである。自分の立場を地位だけで考えるなら、その人生は喜怒哀楽の縮図のようになる。こういう集団は知性的とは呼べない。知性と理性とは同根だからである。ある人は、あまり肩書にこだわるな、という。いやな

らやめたらいいと忠告する。社内で、上や下ばかり見ないで、仕事を見よとも語ってくれる。

そこで、仕事のスペシャリストになるためには三つの方法があるという。

1、財政、科学など、自分の専門分野をもつ

2、マネジメント力をつける

3、語学力をつける

しかし、これだけでは必要にして十分な条件とはならない。知性の養成を加えなければならないからである。なぜなら、これらの能力が本当に役立つためには、正しい知性の力が重要な役割をもっているからである。

社員が知性を養うことは、会社にとっても本人にとっても大切なことであるが、知性が仕事にも私的にもプラスに働くなければ何にもならない。

どうしたらよいのか

バブル後の日本経済の再構築にはまだ時間がかかるに違いない。このような経済環境の中で、企業は経費節減、人員整理や組織の再編成など極めて厳しい防衛的措置を探らざるを得ないが、最も重要なことは創造的事業をど

う展開して行くかであろう。

二十一世紀には、地球的規模の人口、食料、エネルギーや環境問題などの調和を図らないと困る。そのため企業として必要なことを真剣に考える時代になるだろう。

企業としての、新しい時代に見合ったニーズと能力とは何か。それをどう開発するか。これから社員教育の質的あり方など、企業にとつても多事多難な局面に遭遇していくに違いない。社員のあり方は、企業の組織の一員としてだけではなく、知性人としてどうあるべきかを一人一人が眞面目に考える時である。知性ある戦略と効率的な戦術の真価がいま問われようとしているからである。知性（INTELLIGENCE）を正しく働かせるにはどうしたらよいのだろうか。仏教では、知性の上位には道心（WISDOM）があるという。人間としての道を求める心に、本当の知性が宿ると説いている。まさに、人間としての全人格のことになる。眞に知性を具備できるかどうかは、永い人生では結局その人の人生観から生まれるものである。

いまや、経済観念や損得の価値判断だけに重きを置く

のではなく、自分の人生は何なのか、どうあるべきのかという哲学こそ大事なことなのである。

薄幸の美人女形
—十二世片岡仁左衛門

閔谷裕彦

私と歌舞伎の縁は昭和十五年ころ父親の大きな書庫の中で演芸画報を引っ張り出した時に始まる。大正・昭和の分から写真だけを抜いて厚い三冊の合本にしたもので、一目みて虜になってしまった。さすが、所々に挟まっている明治初期の名優たちの写真是かなり違和感があったが、五世中村歌右衛門、十五世市村羽左衛門、七世市川中車それに六世尾上菊五郎、初世中村吉右衛門等の名優の舞台姿には言い知れぬ感動をおぼえたものである。

たまたま当時、沢村訥升（後八世沢村宗十郎）の番頭さんが我が家に出入りしており、歌舞伎座の券が定期的に

に手に入ることになった。父はそれを惜しげもなく家族に分け与えた。おかげで昭和十八年一月からほぼ一年間、ほとんど毎月歌舞伎を観ることになった。この時代の入场料は一等四円九十五銭プラス税九割であった。

当時の花形は何といつても十五世市村羽左衛門で天性的美貌と朗々たる口跡。登場するとパッと舞台が明るくなる。とにかく素晴らしい。この橋家のお相手が十二世片岡仁左衛門であったのだ。この役者の経歴を少し探ってみよう。

昭和九年十月に名老け役、十一世片岡仁左衛門が死去。甥で養子の十二世我童が十二世仁左衛門を継いだのは十一年一月であった。家の芸「馬切（うまきり）」で織田三七信孝を演じ、美貌と冷徹な気品で大評判をとった。御所の五郎蔵では羽左衛門の相手役として皐月を勤め、これも評判がよかつたという。昭和八年十一月にホープ五世中村福助、同九年十一月六世尾上梅幸、十一年四月四世沢村源之助、同年九月坂東秀調、十五年八月市川松蔦と女形を立て続けに失った昭和初期の歌舞伎界はついに十五年十一月、大御所五世中村歌右衛門の死去により、

まさに立女形不在の時代に入っていた。

七世沢村宗十郎すでに老い、中村時蔵、市川男女蔵（後三世左団次）では力不足。六世芝翫（後六世歌右衛門）は品がよいだけ。唯一の希望は、私のひいきの尾上菊之助（後七世梅幸）。その中で美貌の女形、仁左衛門は十五世羽左衛門の貴重な相手役として三千歳、十八夜、お轍、小糸等を演じ、徐々にその輝きを増していった。私は彼の先代萩の政岡、源氏店のお富、直侍の三千歳、桐一葉の淀君、権上の小紫等を観た。政岡は本役。淀君も神經質な面がよく出ていて、しかも美しかった。

この役者は若いころは朝顔日記の深雪のような悲劇の乙女が持ち役であったらしいが、三千歳や小紫のような薄幸の遊女を演じさせると天下一品であった。残念だったのは戦時下で、それも敗色濃厚になりつつあり、検閲もヒステリックになつて、堅苦しい狂言しか許可にならない。おかげで助六などにはお目にかかれず、従つて仁左衛門の揚巻にはついにご縁がなかつた。

私が観たこの人の男役は九条武子女史の舞踊劇四季の春の部の五人囃子と後述の義賛。老け役では盛綱陣屋の

後室微妙。きざはしを使った豪快な落入りが評判になつた源平布引滝の義賢最後では主役の帶刀先生義賢をやり、血紅（のりべに）をふんだんに使って熱演したが、これはいさか空回りの感じであった。昭和二十一年五月六日、長年の相手役十五世市村羽左衛門が七十二歳で死去。同月二十五日には休場中の歌舞伎座がアメリカ空軍B29型機二五〇機の空爆を受けて焼失してしまった。仁左衛門の心の痛手はいかばかりであつたろうか。

終戦後、残っている劇場は東劇と新宿第一劇場。仁左衛門は新宿第一劇場で弁天小僧と長谷川伸の沓掛時次郎のおきぬ、十一月宇野信夫のいわし雲でお民、番町皿屋敷の後室真弓、それと何と与話情の与三郎を、十二月の東劇では良弁杉の良弁と琴責めの阿古屋、佐々木高綱のおみのを演じている。

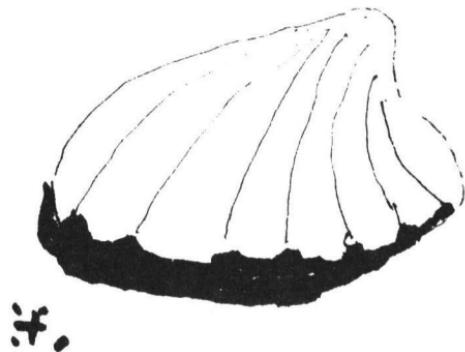
昭和二十一年に入つては出演の記録がない。そしてその年の三月十六日、同居の座付き作者見習、飯田利明によつて若い妻、二歳の三男、お手伝い一人ともども五人が薪割りで惨殺された。食い物の恨みからの凶行であつた。仁左衛門、享年六十五歳。

平成十年の歌舞伎界は、甥の片岡孝夫の十五世仁左衛門襲名で華やかに幕を開けた。昼は口上と寺子屋の松丸、夜は廓（くるわ）文章の伊左衛門（劇中口上）。今世紀最後の大立者の襲名披露なので、松竹は一月に連続公演で陣屋の熊谷、口上、助六を。四月五月は大阪、十月名古屋、十二月京都、その後は全国規模で、ほぼ三年にわたつて襲名公演を打ち続けるというのだから凄まじい。私自身も孝夫は結構気に入っている。姿が良く、口跡も立派。時代物、世話物何でもござれ、和事もこなす。間違いなく名優の器である。

大新聞、特に産経新聞は四ページ特集を組んで孝夫とともに歴代の仁左衛門を紹介しているが、いさか公平を欠くと思われるのは、平成六年に物故した孝夫の父、十三世については四段の囲み記事「神仏と歩んだ芸格」「入神の芸」「心眼の芸」と、かなりオーバーに激賞しているのに、十三世の従兄にあたる十二世については「眼が美しく品位ある美貌。当たり芸は義賢、朝顔日記の深雪。大正末期に邦劇座を主催、新しい役の開拓に熱心であった」と、わずか八行のベタ記事で済ましてい

る。せめて「十五世羽左衛門の相手役として昭和十年代後半歌舞伎座の立女形として活躍」ぐらいは書いてもらいたかった。

大体、人間歳を取れば気力、体力共に衰える。役者としての評価に、敬老精神で甘い点をつけ、すぐ人間国宝、文化財扱いするのが最近の傾向である。厳しい眼を持つ辛口の評論家がいなくなつて、ただ、ちやほや褒めそやす輩が多いのは歌舞伎界のためになるまい。十二世『左衛門』が災厄に遭うことなく、せめて後十年長生きしていたら歴史に残る名女形になつていしたことであろう、と残念でならない。まさに死ぬ者貧乏である。



短歌サロンについて

細川謙三

平成九年のペンクラブ『短歌サロン』の作品を各人五首ずつあげておく。ご覧のとおり、昨年の途中から平木幹夫さんが新たに加入され、現在、私を含めて九人の会である。

短詩の修練期間は、もちろん個人差はあるが、一般的に三年程度と言われている。しかし、本会の皆さんは水準が高く、何人かの方々は、すでに新聞投稿歌の水準などは遥かに越えていられよう。

もう一つ、短歌がいまだに人に訴えるのは洗練された言葉の韻律が読む人の心に沁み入る作用をもっているからだということを忘れてはならない。

以上のようなことを実作をとおして批評し合い高め合っているのが、わがペンクラブの短歌サロンである。毎月第一水曜日の午後二時半から養和クラブで開いている。多くの皆さんの参加をお待ちしている。

土屋文明に
涙たれ昂り幾年をよみつぎし吾が結論なり まごころ
の説は
という歌がある。そして、彼の師の伊藤左千夫は「歌は訴えである」と言った。まごころといい訴えといい、いかにも古くさく聞こえるだろう。しかし、まともに生き

て行こうという声を人に伝え、自分が生きていく嘆きを人に訴えたいというのが短歌の本質であることはいつまでも変わりがない。

わが手造りの会

北田純一

小林正憲

自らを問いつめながら会長になるをきめたりつゝもりの
真夜

まつ先に反対せしは妻なりきわれの病を案すればこそ
唐突でも当然でもなしひたすらに我が手造りの会守る
ため

会果つることあらばあれその時は創りし者が幕閉じるべ
し
何も聞かず助けくれたる友ありき心安けし冬の曇りに

三枝亨

藤岡豊

警官に写真撮るなど制止さる戦争の傷癒えぬ油田に
われを「叔父よ」と呼びくれし友若くしてアラブ砂漠の
土になりたり

インド人の労務者に混じる空の旅カレーの香り機内に漂
う
宮鳩に絡み糸を解きやれば籬の萩をこぼし飛び行く
真間川の川辺に戦ぐ笠菅や笠編みし母もはや七回忌

風に鳴る雨戸の音にしき妻の声のかなしくよみがえるな
り
老松も新しき芽を包みおり生きる喜び示すごとくに
うちつづく一人暮らしの鍋料理今宵はうまし風邪癒えし
ゆえ

若き日を想いて眺む土の上のフンコロガシの働くさまを
抜け毛手にわが老い思ふ一本のかくもか細く白くなれり
と

土手くだり岸に見上ぐる金門橋赤き橋桁逆光に映ゆ
配達終えもの言わず去る若者は額髪の隙間にピアス光ら
す
五合目の岩場にたてば涯しなき青き裾野が夏の陽に映ゆ
夕日まぶしく校庭はいま静かなり孫連れて小学校の前を行
くとき
肩ごしに吾を見つめるみどりごの瞳に百日紅の花映りお
り

西川知世

日帰りに神戸にいます病む母を見舞う往反身を固くして
病棟のロビーに母と別れ来て故郷離れしことを悔いをり
手術終えし母の麻酔の覚めぬまま最終列車の座席に座る
声未だ弱々しけれど管ひとつ取れゆく母の瘦せし手
をとる

忘れられしことく置かれある滑り台に椿の花の散り崩れ
いし

細川謙三

子規よりも三年遅れて死にゆきしポール・ゴーギャンを

今更に知る

モルヒネにたよりし晩年のゴーギャンは子規よりもなほ

陰惨にして

「オリーヴ園のキリスト」の暗き色彩を思いつつ寒きバ

ス停にたつ

富裕なる銀行家の息子ドガの一生読みをり屋の講義終へ

来て

大正六年盲ひて死にしドガのこと読みをり冬枯丘のにこ

もりて

鷗外より子規より更にあはれるドガとゴーギャンの晩年を知る

花水木高く芽ぶきしづが庭をおのが砦のごとく生きゆく
弱き暮に負け帰りゆく茂吉の住み文明の住みし青山の路
を

危ふかりし坪こゆるなく生き来たり今日人前に茂吉を語
る

坪をこえんとして越えざりしわが一生バラの下草引く午
後の庭

サロン・メイトの歌

平木幹夫

死に場所を得しものごとダイアナ妃華やかに短きいの
ち終りぬ

来るたびにことばかず増え可愛さに小憎らしさ交え孫育

ちゆく

赤らみて木の芽ふくらむ武藏野の冬枯れの木々窓に見お
ろす

山田紀美子

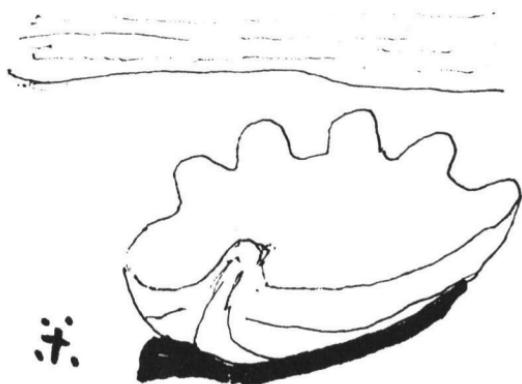
夫在れば吾娘の手をとり歩むべきヴァージンロード母娘
で歩む

輝きて我娘はわが手を離れたり今日より柘植と名乗り歩
めよ
孫よりのハワイみやげの口紅をおちょぼぐちして老い母
はさす

目黒 美保子

幾たびも同じ話をくり返す母と真向う卓をはさみて
枝々に芽ぶき赤らみ見ゆる日はコートのボタン外して歩
く

つかの間の梅雨の晴れ間の尾根道を歩幅の違う夫に従き
ゆく



ベン俳句の一年 その佳句鑑賞

平間 真木子

毎月、第一木曜日の午後を定例日として、この一年間俳句会は順調な歩みを続けることが出来た。ご多忙の故に鳴沢秀影さんは休説、ご病気のため佐藤利治さんの中斷など少しさびしい思いであるが、新たに岸本義生さんの参加を得てうれしいことである。

赤坂迎賓館周辺のさくら吟行、秋色の古河庭園吟行と外に出ての作句の機会を増やして、自然との係りの中に楽しい俳句の会を目指している。

浅野正春

雛の夜の男は手持ち無沙汰なる
花の雨人の帽子を借りて來し

懐かしやあいつは何処の花を見る

黄昏を待ちぬて夏至の酒となる

木洩れ日を透かして青きソーダ水

船旅より

茉莉花や島に小さき税関舎

回教の一枚曆守宮鳴く

亜熱帯樹林の島に髪洗ふ

洋上に夜の雲白しひでり星

船旅にして望郷の體の皮

ペンドントさげて日焼の機関長

貿易風荒れ向日葵の畑なる

平間 真木子

一見豪放な正春さんの、しかし繊細な面を感じる作品である。中でも「あいつは何処の花を見る」と言うこの表現の奥にある懐旧の情、追慕のこころに共鳴した。別れて久しい友人への思いが籠っている。

春服を脱ぎて検査着一枚に

池田耕治

春宵の銀座へ今日の検査終へ
同宿の一会の人と春の夜

春晩の散歩や万歩計をつけ

歩をのばし花の桜田門くぐる

現役の仕事にて忙しい日々の或るとき、思い切って検査を受ける。長年無理ばかりして来た身体、と思えば多少の不安など……。検査着という日常着ではないものを身に付けるときの気持の動き、それが窺える一句である。

百日紅みなどみらいの街に咲き

石川正達

ルーズソックスの少女ら多し風五月
星月夜波の残せし貝拾ふ

満月の夜なりと言へど米軍機
悩みごとあり月明の階のぼる

「みなとみらい」「ルーズソックス」の一旬の明かるさ、「波の残せし貝拾ふ」という甘い感傷、このどちらも作者の持ち味として楽しい。米軍機への思いは、元新聞記者として見逃すことの出来ない現実といえよう。まだまだ若い作者の姿が見える。

上沢準太

中国よりロシアという風に、広く諸国を歩き活動の幅を拓げておられる作者の作品は多彩である。山開きの華厳の瀧、海開きの北朝鮮など、余人の及ばぬ作品を見せて下さることはうれしい。

散る花のあなたに聳え松江城
朝市や色よき茄子を山積みに
山開き華嚴の瀧の嵩増せる
目拾ふ北朝鮮の海開き

初雪の河辺にダーチャ灯をともし

伊香保路の風を孕める鯉幟

亀井弘次

田楽を妻と楽しむ菖蒲園

味噌汁に木の芽を浮かべ夫婦なる
星月夜となりしバーベキュー終る
落葉松の色づきそめしカヌー漕ぐ

「田楽」「木の芽」の二句はどちらも「妻」と共にあ
る作者の姿が見えてこころよい。或る年齢になつたとき
人々は「夫婦かな」との思いを深めるのであろう。人生
の味合いというものを感じることが出来る。

かもめーる甚だ暑しと書き送る

岸本義生

開きたるページのままの残暑かな
鳩の鳴く声のもの憂き晚夏かな
洋館の蒼然として秋の薔薇

冬に入る成すこともなく耳を搔き

参加されて未だ一年に満たぬが、非常に意欲的に俳句
を楽しみ、立ち向かっておられる。俳句の一つの型であ
るところの「残暑かな」「晚夏かな」という使い分けを
しっかり身に付けて下さったのである。

退院の髪に刺さりし余寒かな

北田純一

カイゼルの破顔一笑風光る

山開きレインハットの老夫婦

夜の秋のまたジョーカーを貰ひけり

月明かし聳えて最高裁判所

退院後の髪を印象的に伸ばし、いよいよ大人の風格を
増された。作品もまた幅広く、意志的に手を括げている
風である。「レインハットの老夫婦」の落着きある句境
のよさ、「またジョーカーを貰ひけり」の余韻ある作り
方に共鳴する。

啓蟬や生ける証しの土うごき

三枝 亭

骨折のギブスのとれて花を見に

「右江戸」の標のありて野紺菊

ドラキュラの館か赤き鶏頭咲き

冒險に縁なく生きて神無月

インドに長く駐在されたと聞いてるので、なんとか
く「冒險」の二字を作者の上に思い描いていた。ところ
が作品に「冒險に縁なく生きて」と拝見したのである。
それにしても「ドラキュラ」「ギブス」の句には他の人の
の作品にない味があり、格別の楽しさを覚えた。

ゆりの木の芽吹き赤坂離宮かな

西川 知世

焼茄子や母より受けし厨事

はつたに噎せし幼き日のありぬ

ナプキンはギンガムチェック海開き

洋館や赤きシェードの秋灯

さくら吟行の折りの「赤坂離宮」の一句が好きである。
ゆつたりと身丈けの伸びた、語句の斡旋のよろしさ。明
るくて品格があつて……。また、「ギンガムチェック」
「シェード」などの片仮名の使い方にも若さが感じられ
て、今後的一年が期待される。

菊教のごとし菊人形焚かる

吉井 米三郎

海鼠噛む佳境に入りし八犬伝
白玉や少年の日は絆着て
うすばかげろふ誰が転生や吹かれをり

群発地震遠のき穴子蒸してをり

殆ど見る機会のなくなった菊人形。それを焚く景など
見るべくもないが、この作者はきちんと見つめて句作り
に余念がない。「白玉」の少年の姿は、作者を含めて過
ぎし日の懐かしさに満ちている。心の襞のこまかさ、と
いうものを感じる次第である。



林 篤二（はやし・とくじ）一九九七年十一月二十
六日転移性肝臓がんのため死去。七十三歳。一九二
四年京都生まれ。第八高等学校、京都大学経済学部
卒。毎日新聞入社、東京本社整理本部長、役員待遇・
印刷局長、スポーツニッポン西部本社社長など歴任。
毎日新聞社社友。企業OBペンクラブ運営委員。

静かな笑顔の人

トクさん、あまりにも早すぎた
よ。去年の、夏を迎える前だった
か、たまたま「悠遊」の話が出て、
第五号の編集も頼むよ。読むぐら
いはお手伝いするから」と言う私
に、あなたは「うん」と言うでも
なく、ただ穏やかな微笑で答えて

くれた。それがまさかの急転とな
るとは、今も信じられぬ思いだ。

七月はじめ胃がんと分かって入
院、八月半ば胃を全部取り去つて

一応退院された。私などより何年
も若いから、すぐに回復されて、

悠遊の編集と一緒に楽しみたいも
のと願っていたのに、それは果た
せぬ夢となってしまった。あつと
に座るトイメンとが中心となって、
論議しながら作りあげる。ニュー

ろしさを思い知らされた。

トクさんと知り合ったのは、もう三十三年も前のこと。私が毎日新聞の現役時代、名古屋勤務を終えて東京の編集・整理に帰ってきた時に始まる。新聞の編集は政治・経済・国際問題などを扱う「硬派」と社会だね中心の「軟派」に分かれれる。私は軟派育ちのだが、硬派のデスクに座られた。その時の「トイメン」として会ったのがトクさんだった。週一回くらいの割合でトクさんと組んだ。

新聞の編集は、取材各部からの原稿が整理本部（今は編集制作総センターと呼ばれている）に集まり、硬・軟デスクとその向かい側に座るトイメンとが中心となって、

スに対する迅速な価値判断、的確な見出しづくりが要求される。どちらかというとんびり屋で多いの多い私、それも硬派ものに慣れない私を助けてくれたのがトクさんだつた。私が価値判断を誤つたり、迷つたりしていると、トクさんは静かな微笑と穏やかな論調でこれを正してくれた。その幅広い教養と的確・迅速な判断力によつてどんなに助けられたことか。教えられることが多かつた。

旧制八高時代には陸上部の短距離選手としてスピードを競つた。迅速な判断力はその時培われたのかかもしれない。京大経済学部に進んでは「京大新聞」に籍を置き、戦後の復刊に尽力されたと聞く。新聞記者への道はその時決めてい

たのだろう。私がトクさんに会つたときから親近感を持てたのは、同じ学部出身だったこともある。それよりも何よりも、トクさんがラグビー愛好家だったことだ。私が京大でラグビーをやつていたこともあって、仕事を終えたあと、ラグビー談義で夜を明かしたことでも幾夜がある。

会社では、穏和な人柄、明快な判断力を見込まれて労使関係のうるさい印刷担当（役員待遇）やスポーツニッポン西部本社社長に任せられた。苦労したようだが、得意の粘り腰で見事に重責を果たされた。

酒をこの上なく愛したトクさん。若いころは天衣無縫、豪快に振る舞い、酒をめぐる逸話の種は尽き

なかつた。最近は新聞仲間の月一回の飲み会やベンクラブの月例会、運営委員会などの後、みんなと静かに酒を楽しんでいた。トクさんが京大でラグビーをやつていたこともあって、仕事を終えたあと、ラグビー談義で夜を明かしたことでも幾夜がある。

会社では、穏和な人柄、明快な判断力を見込まれて労使関係のうるさい印刷担当（役員待遇）やスポーツニッポン西部本社社長に任せられた。苦労したようだが、得意の粘り腰で見事に重責を果たされた。

私がお預かりしている原稿がある。トクさんの持ち味を、きわめてよく表現しているので、遺稿としてここに掲載、ご冥福をお祈り申し上げる。

「四季」が奏せられていた。クラシック音楽を聴きながら読書しているのが好きだったトクさんに相応しい葬送の曲のように思えた。

私がお預かりしている原稿がある。トクさんの持ち味を、きわめてよく表現しているので、遺稿としてここに掲載、ご冥福をお祈り申し上げる。

柔軟な頭脳、強い決断

林 篤一（遺稿）

バブルが崩壊して、日本の企業社会は変わりつつある。会社が社員に求めているのは、愛社心よりも各自の能力であり、社員が会社に求めているのは、出世よりも自分にあった仕事である。

一九九五年の勤労者世論調査（総理府）によると、転職について「自分の能力や適性が発揮できるなら転職してもよい」と考える人が五九・九%、二十、三十歳に限る七〇%を上回った。「一生を会社に捧げて悔いない」と考える人は少數派になつたのである。

一方で、中高年の管理職の頭の

切り替えは遅れている。事故を起こした原発や倒産した金融機関の管理担当者が相次いで自殺した。いずれも組織への過剰な責任感が引き金となっている。高度成長期以来、こういう悲劇を繰り返している。

最近、出版界では「上司本」が次々にヒットしている。「おごるな上司！」「イヤならやめろ！」「よい上司、悪い上司」等々、いずれも二十万部を超す売り上げである。これらの本が共通して指摘しているのは、時代の変化に鈍感な上司はダメだという点である。年功や経験、会社への忠誠心だけを頼みにしてきた管理職の人たちに、きびしい風が吹いてきた。しかし、

であることもまた変わらぬ真理だ。仕事のおもしろさに生き甲斐を求められるのもこの世代である。さて、あなたは「会社人間」を貫くか、それとも別の人生を求めるか。

一、「出世はおまけ」と割り切れる会社に生きるにしても、特に管理職たるもののが掛けなければならぬのは、柔軟な姿勢である。ある新聞の特集に「仕事に殺されないための五カ条」（九六・一・二〇・朝日）というのがあった。その中の一条に「出世はおまけと割り切ろう」とある。会社べったり主義と訣別しようという呼び掛けである。

管理職がこぼす愚痴のなかでいちばん多いのが「このごろの若い

者は…」であり、そのあとに「自分勝手」「命じた通りやらない」等と続く。要するに会社への忠誠心、上司への尊敬が足りないのが不満なのである。これでは、若手をたばねる資格なし、と断じてよい。

時代が変われば、理想の上司像も変わる。部課長が頼みとする経験、知識、慣行等々への評価は低くなつた。マニュアル人間的な生き方が否定される時代なのだ。

そうと割り切れば、管理職の心の負担はグンと軽くなる。つまり部下と共に新しいマニュアルを作つていくということになれば、自分の能力、個性も生かされ、時には会社に対して「ノー」と言えるし、会社を自己実現の場と考えることも出来る。出世よりも、そちらの

方が大事と考えられないだろうか。そちらについては前記五カ条の第一項にいわく、「責任は上に取つて上司への尊敬が足りないのが不満なのである。

一、四十歳の決断

作家の井上靖氏は、毎日新聞の記者であった。終戦の年、三十九歳でやっと「学芸部副部長」という肩書きがついた。年齢の割に出世は遅かった。サラリーマンとしての先は見えていた。そのころの井上さんには三つの道があつた。

美術評論記者　詩人　小説家

このうち、美術評論記者がいちばんやり易い。そのまま新聞社にいればよいのだ。「詩」についてはある程度の実績も自信もあつたが、生活に不安がある。迷いはしばら

く続いた。

彼が新聞社に入社した動機は、サンデー毎日の懸賞小説に入賞したからである。そこで彼は考えた。「もう一ヶ月小説に挑戦してみよう」と。ちょうどそのころ、気の合った傍系紙の友人から、闘牛大会失敗の話を聞いたことも執筆意欲をかき立てた。こうして昭和二十二年芥川賞作品「闘牛」が生まれた。そのあと彼はまっしぐらに文学の世界に飛び込んでいった。

井上さんが小説家として大をなした要素として、詩人の素質、新聞記者としての体験、美術への造詣、があることは通説であるが、何よりも、四十歳にして自立の決断をした点にあることは言うまでもない。この「決断」あってこそ、それまでの「蓄積」が生きたので

ある。

一、イヤならやめる

「イヤならやめろ」の筆者で、分析計測メーカー、堀場雅夫氏は、会社の社是を「おもしろおかしく」としているという。その意味を同氏はこう言っている。

何物にも代えがたいのが人の命。

その人のいちばん大事な時間を企業に捧げている。企業が、いわばその人の人生を独占している。そう考へると、企業が、人がおもしろおかしく生きていける場を提供することが大切であると同時に、個人の側から言えば、会社がおもしろおかしいところでなかつたら、そんなところにいる意味はない。

だから、みんなで寄つてたかって、おもしろおかしい職場にしていこ

うではないか、と考えなければならない。

これは、人生哲学としても、経営哲学としても、含蓄のある発想である。更にまた、氏は「いかに努力しても、会社の仕事がおもしろくない時は、その会社と訣別する時だ」とも言っている。

会社に骨を埋める覚悟ならば、部下と一緒に考える柔軟性を。また、自立するならば、自分の選んだ道を貫き通す強い意志力と十分な蓄積がなければならない。これが中年サラリーマンの基本姿勢であろう。



企業O B ベンクラブのあゆみ

平成九年（一九九七年）

年表（原則として敬称略）

年史

一月例会（二十二日）

○入会三名 奥村正右衛門・岸本義生・多田

修

○ゲスト講師

長崎和夫氏 毎日新聞論説副委員長・元政治

部長 「政界再編の今後」

○「本の紹介」水谷 汎 「儒教とは何か」

○「平成九年活動方針」決定

二月例会（十九日）

○入会 岡 政昭

○退会 宮沢 済・山内了一

（二月十日現在会員八十三名）
○運営委員総数は十九名
○新たに九名の入会があつたが、退会者六名、林氏の死により、
平成九年会員数は八十二名となつた。

二、出版・プロジェクトについて

○（1）同人誌「悠遊」第四号が三月十三日発行された。（編集
都甲昌利 「航空協定と最新航空事情」

。 「本の紹介」 黒崎昭二 「神々の指紋」

。 会計規則第二条の改正により、平成九年度より年会費が一万二千円から一万五千円に値上げ決定

。 「悠遊」第四号が二月末完成、三月例会で会

員に配布

世話人 林 篤二・石川正達)

。 「ゆつたり暮らす法則」が書苑新社より十月一日付出版された。
(プロマネ・櫻井清治・石川正達)

。 (2) 出版および出版準備中のもの

。 「奥さま便利帳」秀巧社印刷より九七年十二月出版。

(プロマネ・三枝 亨)

。 「オーストラリア暮らし入門」大修館書店より九八年四月出版

予定。(プロマネ・森田 茂)

。 (3) 雑誌関係への寄稿

。 「アジア時報」への寄稿

アジア調査会出版の月刊誌(アジア時報)への寄稿、続行中。

(プロマネ・石川正達)

。 「ザ・ビジネス・サポート」東京商工リサーチの月刊誌(コラ

ム・話の広場)への寄稿、二月終了。(プロマネ・遠藤俊也)

考える」

。 経営コンサルタント・月刊誌(経営政策研究所)随想ほか寄稿、七月より(プロマネ・森田 茂)

。 同人誌「悠遊」第五号は九八年三月発行予定(編集世話人・石

川正達)

。 「ペン隨想」は定着し、九七年は毎月例外なく寄稿された。

。 「本の紹介」 関谷裕彦 「空飛ぶ寄生虫」

四月例会(二十三日)

。 入会 織田純一郎

。 会員講演

。 中川路 明 「介護保険について」

。 「本の紹介」 関谷裕彦 「空飛ぶ寄生虫」

三、ミーティング・勉強会

五月例会（二二十八日）

。入会 松浦武弘

。ゲスト講師

鮫島敬治氏 日本経済研究センター・研究

顧問 「香港回帰と日・米・中の三角関係—

第十五回党大会を前にして」

。「日本の紹介」大泉 潤 「資本主義の未来」

六月例会（二十八日）

。入会 東前田原与一

。会員講演

石川正達 「新聞の用字・用語」

。「日本の紹介」斎藤 効 「白鳥伝説」

七月例会（二十六日）

。ゲスト講師

高橋禮介氏 キリンビール（株）基礎技術研

究所顧問 「ニュー・バイオテクノロジーの

現状と将来」

。「日本の紹介」吉葉芳彦 「閔姫—みんび—暗

。内外情勢研究会（プロマネ・鳴澤宏英）

「金融ピッグバンの意義と問題点」「アンバーサミット」ほか
内外の主要トピックスを中心に、鳴澤会長による基調講演をも
とに真剣な勉強会が行われた。

。何でも書こう会（プロマネ・浅野正春）会員寄稿の多数の随筆
をベースに活発な討議がなされた。

。英語トーク会（プロマネ・岩崎洋一郎・鳴澤宏英）

Dr.T.Jordan. Mr.Richard Cropp（両氏とも元在日米国商工
會議所会頭）またEarle T.Okumura氏を迎えて、英語による
楽しい会が持たれた。

。環境問題研究会（プロマネ・森田 茂）

「国際動向と日本の対応」「大気汚染」などについて世界の動
向を踏まえての勉強が行われた。

。勉強会「サロン21」発足（プロマネ・北田純一）

。短歌、俳句は、細川謙三、平間真木子両先生の指導により、ま
すます盛会となっている。

四、講演活動

。上智大学・生涯学習研究室ゼミにて、「企業OBペンクラブの
活動—書くことと人生」につき、森田 茂が行った。

五、会員ニュース

殺」

八月例会（休み）

。入会 渡里 清

九月例会（十七日）

。ゲスト講師

三宅純一氏 日本総合研究所副理事長

「財政投融資改革を巡る話題」

。「本の紹介」岡 政昭 「純度への挑戦一秒

にかけた四百年」

十月例会（二十二日）

。入会 西川永幹

。会員講演
斎藤 劲 「古代史の面白さ」

。「本の紹介」岸本義生 「醇なる日本人－孫

文革命と山田良政・純三郎」

。同人誌 「悠遊第五号」出版は平成十年春と

決定、特集テーマは「高齢者の主張」

新井 進 群炎美術協会展覧会に洋画出品（二月）
中川十郎 香港にて「ビジネス競合情報」講演（一月）

「朝日ウイークエンド経済」に「経済重視に傾く
国際情報戦」寄稿（二月）

米国・サンダーバード大学で講演（六月）

「経営コンサルタント」誌に「省エネ論の盲点」

森田 茂

詩集「ほたる道」出版（三月）
を発表（一月）

長谷川正男

深尾栄助

「経営コンサルタント」誌に「いま必要なフロン
ティア精神の三つの条件」を発表（三月）

鳴澤宏英

「経営コンサルタント」誌に「今月の言葉」を寄
稿（四月）

野村嘉彦

雑誌「財界」に「私のベトナム交友四十年史」を
三月号から毎月十回連載）

林 洋

「日経メカニカル」誌に「自動車事故は語る－輕
量化・肉薄化の重いつけ」を寄稿（四月）および
「大型車の共振転倒について」を発表（五月）

「経営コンサルタント」誌に「藤野忠一郎の『航
海理論』経営」を寄稿（七月）

上沢準一

短歌集「桜台詩編」を短歌新聞社より出版（九月）

十一月例会（二十六日）

。ゲスト講師

中曾根悟郎氏 東邦生命・顧問、上智大学

講師（元スペイン公使・ウルグアイ大使）

「ODA問題について」

。「本の紹介」松浦武弘 「赤い橋」

。『訃報』林篤一氏が十一月二十六日転移性
肝臓ガンのため逝去。心よりご冥福をお祈り
いたします。

十二月例会（十七日）

。入会（平成十年一月より）玉山和夫

。退会 高後雅行、池田善行

。会員講演

丸山暢謙 「私の処女出版—ゲーテ研究」

。「本の紹介」多田 修 「『複雑系』で読む日

本の産業の大転換」

。例会のあと忘年会が行われ、アジア調査会、

日本実業出版社、書苑新社、経営政策研究所、
東京商工リサーチ、TKCの関係者と懇談。

丸山暢謙 「J・W・フォン・ゲーテ旅路遙か、見果てぬ
夢」を栄光出版社より出版（九月）

八木大介・許斐義信共著「ベンチャー・キャピタル」をマネジ
メント社より出版（十月）

六、十二月末にて現役員の任期が終了、新たに
来年度からの新役員が次の通り決定

会長

北田 純一

副会長（事務局総括）

亀井 弘次

副会長（運営委員長）

中川路 明

副会長（会計担当）

上沢 準一

理事

櫻井 清治

事務局長

藤岡 豊

運営委員長補佐

都甲 昌利

監事

遠藤 俊也

まとめ

出版界の不況の影響があつたが、二冊出版の運びとなつた。その
上ゲストや会員の講話、各種勉強会、「本の紹介」など活発な活
動が行われ、充実した年であった。

執筆者名簿

氏名	(カッコ内は本名)	出身会社	生年
浅野正春	あさの まさはる	(株)日立製作所	1934
アブドルカーダー栄子	アブドルカーダー えいこ	ニューサウスウェルズ 州立コレスピンドンス スクール日本語教師	1933
新井 進	あらい すすむ	伊藤忠商事(株)	1931
池田 耕治	いけだ こうじ	第一勧業銀行	1927
石川 正達	いしかわ まさと	毎日新聞社	1921
今村 亮	いまむら りょう	京セラ(株)	1931
岩崎 洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン	1929
遠藤 俊也	えんどう としや	(株)東京銀行 丸紅(株)	1924
大島 義	おおしま みよし	エヌ・イーケムキャット	1931
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄	1929
大野 显	おおの ただし	三井物産(株)	1933
岡 政昭	おか まさあき	東京銀行NBD	1926
織田 純一郎	おだ じゅんいちろう	古河電工	1942
上沢 準一	かみざわ じゅんいち	三菱商事(株)	1927
亀井 弘次	かめい こうじ	キリンビール(株)	1928
岸本 義生	きしもと よしお	兼松	1927
北田 純一	きただ すみかず	三菱商事(株)	1928
黒崎 昭二	くろさき しょうじ	新日本製鉄	1927
許斐 義信	このみ よしのぶ	三菱商事(株)	1944
小林 正憲	こばやし まさのり	大和毛織 国際工機	1930
三枝 亨	さいくさ とおる	三井物産(株)	1927
斉藤 効	さいとう つよし	吳羽化学工業(株)	1925
櫻井 清治	さくらい せいじ	三井物産(株)	1926
佐份利 治	さぶり おさむ	京セラ(株)	1926
莊司 忠志	しょうじ ただし	石川島播磨	1932

氏名	(カッコ内は本名)	出身会社	生年
関 谷 裕 彦	せきや ひろひこ	ローヤル・ネドロイド・ラインズ	1932
竹 内 京 一	たけうち きょういち	トープラ	1931
多 田 修	ただ おさむ	横河電気	1929
都 甲 昌 利	とこう まさとし	日本航空	1933
寺 井 精 英	てらい きよひで	電気通信大学教授	1927
中 川 路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業株	1929
中 川 十 郎	なかがわ じゅうろう	ニチメン	1935
鳴 泽 宏 英	なるさわ こうえい	㈱東京銀行	1922
西 川 永 幹	にしかわ ながみき	さくら銀行	1941
西 島 力	にじしま つとむ	住友商事株	1930
野 村 嘉 彦	のむら よしひこ	三井物産株	1917
長 谷 川 正 男	はせがわ まさお	長橋小学校校長	1928
東前田原 与 一	ひがしまうだはら よいち	㈱全日警	1940
平 間 真木子	ひらま まきこ	㈱日本機械輸入協会	1925
深 尾 榮 助	ふかお えいすけ	富士銀行	1931
福 井 律	ふくい たかし	明光証券株	1924
藤 井 長 治	ふじい ちょうじ	三井物産株	1919
藤 岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事株	1932
細 川 謙 三	ほそかわ けんぞう	㈱東京銀行	1924
正 木 豊	まさき ゆたか	㈱マサリヤ社	1936
松 浦 武 弘	まつうら たけひろ	伊藤忠商事㈱	1939
水 谷 汎	みずたに ひろし	満鉄・友愛信用組合・横浜メキシコ名誉領事館	1917
村 田 孝四郎	むらた こうしろう	新日本製鉄	1934
森 田 茂	もりた しげる	出光興産株	1930
吉 井 米三郎	よしい よねさぶろう	三井物産株	1926
吉 嵩 清 己	よしざき きよみ	関西ペイント㈱	1925
吉 葉 芳 彦	よしば よしひこ	出光興産	1931
西 川 知 世	にしかわ ちよ	企業OBベンクラブ事務局	1948

特集の「高齢者の主張」十六編、自由テーマ三十一編、合わせて四十七編。「悠遊」も第五号を迎えこれまで以上に質量ともに充実してきました。

ペンクラブ会員は八十人を超すほどになつてますので、さらに多くの方々の参加を希望します。表紙の絵及びカットについては毎号、新井進さん、吉井米三郎さんにお世話になつています。ありがとうございます。原稿整理に、思わず新聞流に手が走り迷惑をおかけした点があるかと思いますが、ご寛容ください。

これまで「悠遊」編集の柱となつて活動された林 篤一さんを失つたことは残念でなりません。この五号を靈前に捧げます。

〔編集世話人〕 石川正達、中川路 明

〔編集メンバー〕 鳴澤宏英、北田純一、浅野正春、遠藤俊也、上沢準一、櫻井清治、平間真木子、藤岡豊、細川謙三、村田孝四郎、森田 茂

〔事務局〕 西川知世

事務局から

西川知世

十一月も終わろうかというある日、林 篤一さんが亡くなられました。悠遊の発刊にご尽力をくださった方でした。すこしはにかむような笑顔で、「知世さん、悠遊のことなんですが」と打ち合わせをしてくださったことが思い起されます。同人誌を出すということが、企業OBペンクラブの大きな柱になるということを常々話されていました。そして、号を加えるごとに充実してきていると楽しそうでした。ご冥福を心よりお祈りいたしますとともに、第5号の発刊を林 篤一さんと一緒に喜びたいと思います。

昨年も企業OBペンクラブの活動は活発に続けられました。鳴澤会長を軸に会としての充実期であったと思います。今年は新体制に移行し、躍進を期待されています。事務局といたしましても皆さまのお役に立てるようになると引き締めて頑張りたいと思っています。引き続きご指導下さいますようお願いいたします。企業OBペニ

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第五号

一九九八年三月十八日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ「悠遊」刊行委員会

代表 北田 純一

印刷所 株式会社 ヨコタ

東京都江東区亀戸三一〇一三(〒135-0071)
TEL ○三一三六三八一五四一一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局 藤岡 豊

川崎市麻生区細山五七一三(〒213-0001)
TEL ○四四一九五五一〇〇四五

口座 第一勧業銀行丸の内支店 企業OBペンクラブ

(普通 1633830)

価格 一、〇〇〇円

